



# 越谷市いきものの調査 2017-2020 報告書



越谷市

# もくじ

●はじめに	1
●調査の方法	2
●調査した生きものと報告件数（調査期間ごと）	4
●調査の経過	5
●参加いただいた市民調査員	7
●生きものごとの調査結果 ※〈〉内は掲載ページ数	8
■き（樹木）	9
1. ヤナギのなかま〈9〉／2. ハンノキ〈10〉	
■くさ（草本）	11
3. ヨシ〈11〉／4. ミゾソバ〈12〉／5. スミレのなかま〈13〉／6. キタミソウ〈14〉／7. ムラサキサギゴケ〈15〉／	
8. アレチウリ〈16〉／9. カントウヨメナ〈17〉／10. 在来タンポポ〈18〉	
■とり（鳥類）	19
11. カルガモ〈19〉／12. オナガガモ〈20〉／13. アマサギ〈21〉／14. コサギ〈22〉／15. オオバン〈23〉／	
16. ユリカモメ〈24〉／17. コアジサシ〈25〉／18. カワセミ〈26〉／19. コゲラ〈27〉／20. モズ〈28〉／	
21. シジュウカラ〈29〉／22. ヒバリ〈30〉／23. ツバメ（ツバメの巣）〈31〉／24. メジロ〈32〉／	
25. オオヨシキリ〈33〉／26. ツグミ〈34〉	
■むし（昆虫類）	35
27. モンシロチョウ〈35〉／28. スジグロシロチョウ〈36〉／29. アオスジアゲハ〈37〉／	
30. ナガサキアゲハ〈38〉／31. ツマグロヒョウモン〈39〉／33. コクワガタ〈40〉／34. ヒグラシ〈41〉／	
35. クマゼミ〈42〉／36. カマキリのなかま〈43〉／37. シオカラトンボ〈44〉／38. ハグロトンボ〈45〉／	
39. イナゴのなかま〈46〉／40. ショウリョウバッタ〈47〉／41. トノサマバッタ〈48〉／42. クビキリギス〈49〉	
□コラム 外来カミキリムシの拡大	50
■はちゅう類	51
43. ヘビのなかま〈51〉／44. カメのなかま〈52〉	
■りょうせい類	53
45. トウキョウダルマガエル〈53〉／46. ニホンアマガエル〈54〉／47. アズマヒキガエル〈55〉	
■かい（貝類）	56
49. タニシのなかま〈56〉	
■ほにゅう類	57
50. タヌキなど〈57〉	
□コラム アライグマが急増しています！！	58
■調査報告のなかった生きもの	59
32. ミドリシジミ／48. メダカ〈どちらも59〉	
●地区別・環境別結果から	60
□コラム（生物多様性と希少種）	62
●市民調査員からの声	63

# はじめに

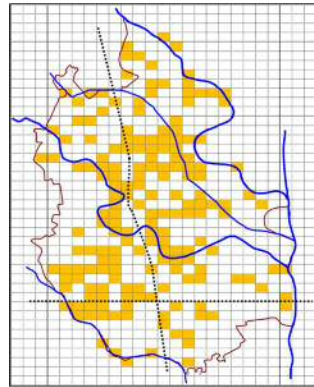
これまでの、「越谷市ふるさといきもの調査」とその結果について

越谷市ではこれまで、平成9年度から5年毎に、市民の参加による生きもの調査「越谷市ふるさといきもの調査」を行ってきました。調べる生きものを30数種類選り出し、市内を570区画（メッシュ）に分け、それぞれの区画での1年間の発見報告を集計してきました。

合計4回、述べ915人の調査員による調査の結果、特にシラコバトの発見数がかなり減っていました。それ以外の鳥類は、シジュウカラやコゲラなどを中心に、発見数が増えています。また、植物では、ハンノキの発見数が大きく減っていました。

## ふるさといきもの調査（4回）の結果

調査年度	平成24年度		平成19年度		平成14年度		平成9年度	
	参加者数	210	243	248	214	報告メッシュ数	発見報告総数	報告メッシュ数
指標生物名称	報告メッシュ数	発見報告総数	報告メッシュ数	発見報告総数	報告メッシュ数	発見報告総数	報告メッシュ数	発見報告総数
在来タンポポ	232	485	261	592	153	324	153	307
セイヨウタンポポ	328	913	346	1,085	341	965	404	1,146
セイタカアワダチソウ	256	702	312	812	321	713	291	666
カントウヨメナ	131	300	167	395	224	471	192	406
キタミソウ	13	27	22	50	19	42	35	74
スマシ	110	209	91	239	—	—	—	—
ミソソバ	45	116	69	220	74	129	76	133
ヨシ(アシ)	189	549	—	—	204	571	239	539
ジュズダマ	76	177	—	—	103	194	85	179
ハンノキ	70	190	133	324	87	263	112	337
ケヤキ	254	609	304	841	279	752	350	967
クヌギ	103	275	126	356	106	310	84	249
幹周リ2m以上の樹木	166	616	167	503	—	—	—	—
シラコバト	20	27	38	62	88	178	140	286
キジバト	456	1,874	329	1,488	288	885	255	686
コサギ	260	910	218	773	172	448	171	345
カルガモ	271	1,349	232	1,337	181	700	150	497
カウセミ	87	380	41	125	—	—	—	—
コゲラ	95	232	52	159	32	74	28	40
ツバメ	388	1,241	292	970	246	607	195	445
ツバメの巣	109	220	101	228	72	118	68	145
ハクセキレイ	465	1,949	321	1,312	253	700	267	776
モズ	180	468	89	314	93	182	91	260
ツグミ	386	971	217	654	130	264	135	245
オオヨシキリ	105	292	78	243	54	107	33	58
シジュウカラ	300	1,022	153	570	98	171	67	119
オナガ	261	795	177	489	145	296	127	232
モンシロチョウ	309	1,041	280	879	315	807	253	636
スジグロシロチョウ	64	118	49	58	45	66	48	57
アオスジアゲハ	195	504	125	267	164	321	76	175
ナガサキアゲハ	54	95	—	—	—	—	—	—
ツマグロヒョウモン	178	426	—	—	—	—	—	—
コクワガタ	18	21	25	42	10	10	14	17
ヒグラシ	23	30	18	23	17	20	16	19
クマゼミ	24	38	14	16	—	—	—	—
オオカマキリ	63	117	41	71	40	58	43	89
シオカラトンボ	158	388	98	213	144	234	108	241
アサザ	—	—	7	12	—	—	—	—
ヨモギ	—	—	—	—	353	976	396	1,075
クズ	—	—	—	—	140	264	143	297
セイヨウオオマルハナバチ	—	—	8	9	—	—	—	—
ミドリシジミ	—	—	—	—	6	7	10	13
アメンボ	—	—	—	—	89	213	81	146
ハイケボタル	—	—	—	—	1	2	1	1
ハグロトンボ	—	—	20	44	—	—	—	—



第4次調査報告書と、発見報告の集計例（色付きが発見された区画）

今回の、「越谷市いきもの調査2017-2020」について

「ふるさといきもの調査」の結果により、調査を行った生きものすんでいる場所やうつりかわりを知ることができましたが、平成9年度の調査開始から20年ほど過ぎ、市内のいきもの種類や数、すんでいる環境も大きく変わりました。

そこで、これまでの調査結果を活かしながら、調べる生きものや調べ方を考え直した、「越谷市いきもの調査2017-2020」を、平成29年度から令和2年度までの4年間をかけて行い、延べ513人の調査員の皆さんから、8,067件の貴重な報告をいただきました。

今回の調査では、調査期間中に、新型コロナウイルス感染症拡大により、緊急事態宣言が発令され、外出の自粛や、一斉調査の中止などがあり、調査員の皆さんの活動にも影響がありました。この調査への参加が、市内の生物の観察や、自然環境に直接触れるきっかけとなつたのではないのでしょうか。

このたび、この調査結果をまとめた報告書を発行する運びとなりました。参加された方も、残念ながら参加できなかった方も、この報告書を読んで、身近な環境への興味・関心を深めていただければ幸いです。



## ちょうさ ほうほう 調査の方法

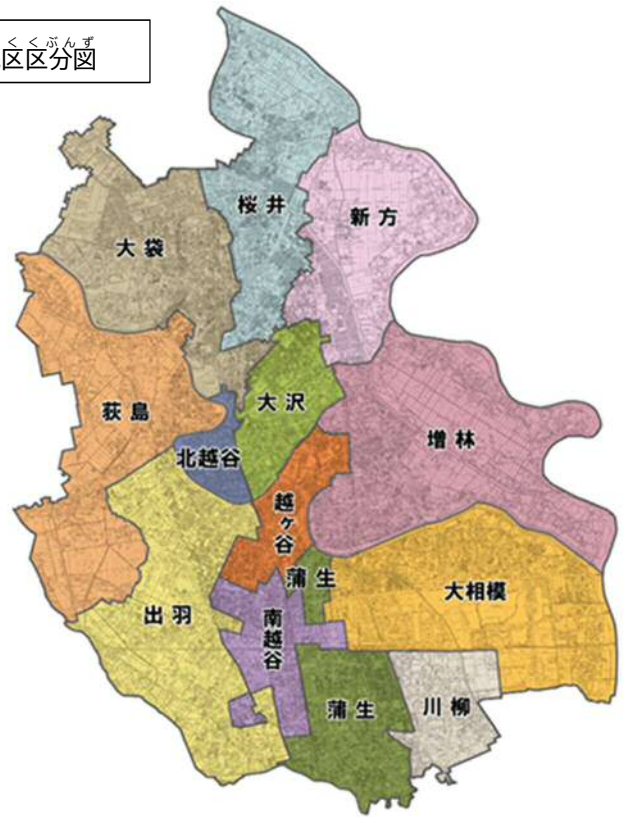
この調査では50種類の生きものを見つけた地区別・環境別に記録し、用紙による報告のほか、環境省の「いきものログ」から報告していただきました。

## ちく ね かけ 方 地区の分け方

越谷市では、13のコミュニティ区域（公民館区）を基本的な単位として、地域活動のほか、都市計画や緑化計画などのまちづくりを進めています。

この調査でも、13地区別に発見情報をまとめることにより、それぞれの地区の環境がどうなっているか考える材料とします。

ちくくぶんず  
地区区分図



## かんきょう ね かけ 方 環境の分け方

市内の主な環境を次の7種類に分けました。どのような環境に生きものがいたかを調べることによって、生きもの暮らしを考えることができます。

**た 田んぼ**  
みず  
水をはってイネやクワイを育てているところ

**はたけ くさち 畑・草地**  
やさいやくだものそだ  
野菜や果物を育てているところ。また、地面が広く草で覆われているところ

**すいろう かせん 水路・河川**  
ようすいろうやかわなど。  
堤防や堤防沿いの林（河畔林）も含みます

**じゅりんち 樹林地**  
やしきりんやぞうきぼやし、  
じんじやから はやし、  
神社・お寺の林、  
くないちようかちまぼ、  
宮内庁鴨場、工業団地の緑地帯など

**こうえん 公園**  
としこうえんのほか、  
しょうきぼ 小規模な児童遊園や  
ふれあい公園など

**じゅうたくち 住宅地**  
じゅうたくやみせなら  
住宅や店が並んでいるところ。学校や  
こうきょうしせつ 公共施設、街路樹、  
えきまえ 駅前も含みます

**ちようせつち 調節池**  
かわのみずをひきこんで  
こうすい 洪水を防ぐ池。開発  
による調整池も含みます

## ちょうさきかん 調査期間

この調査は平成29年から令和2年までの間、季節（3ヶ月）ごとに実施しました。また、季節によって見られる生きものが違うため、それぞれの回で調査する生きものを変えて行いました。

		へいせい ねんど 平成29年度 (2017年度)											
だい かい 第1回		が 4月	が 5月	が 6月	が 7月	が 8月	が 9月	が 10月	が 11月	が 12月	が 1月	が 2月	が 3月
かき 夏期		← 調査員募集 5/1~6/2			← 調査期間 7/1~9/30								
		へいせい ねんど 平成30年度 (2018年度)											
だい かい 第2回		が 4月	が 5月	が 6月	が 7月	が 8月	が 9月	が 10月	が 11月	が 12月	が 1月	が 2月	が 3月
しゅうき 秋期					← 調査員募集 8/1~9/3			← 調査期間 10/1~12/31					
		れいわ ねんど 令和元年度 (2019年度)											
だい かい 第3回		が 4月	が 5月	が 6月	が 7月	が 8月	が 9月	が 10月	が 11月	が 12月	が 1月	が 2月	が 3月
とうき 冬期							← 調査員募集 8/30~11/29				← 調査期間 1/1~3/1		
		れいわ ねんど 令和2年度 (2020年度)											
だい かい 第4回		が 4月	が 5月	が 6月	が 7月	が 8月	が 9月	が 10月	が 11月	が 12月	が 1月	が 2月	が 3月
しゅんき 春期		← 緊急事態宣言			← 調査期間 4/1~6/30								

※第3回と第4回は期間が連続しているため、調査員の募集はまとめて行いました。

※新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が令和2年4月7日から5月25日まで発令されました。そのため第4回は一斉調査を中止し、一般調査についてもその他の回より報告件数が少なくなっています。

## ちょうさほうほう 調査方法

事前に指標生物についてまとめたガイドブックを配布しました。ガイドブックには指標生物の調査期間、見つけられる環境、特徴を記載しています。

調査員には「見つけた場所の名前（●●公園など）や目印（●●ビルの前など）」、「見つけた場所の環境（田んぼ、公園など）」、「生きものの数（●匹、●本、●平方メートル~植物など）」、「生きものの様子（●をしていた、花が咲いていた、木にとまっていた）など」を記録し、できるだけ写真を撮るようお願いします。

## ちょうさけつこ 調査結果

調査結果は、用紙に記入し郵送等で報告していただきました。

また、環境省が運用している、国の機関・県や市町村・専門家・市民のみなさんなど様々な方が利用できる、生きものの情報を収集・提供するインターネット上のシステム「いきものログ」を活用し、報告をいただきました。



ちょうさ い ほうこくけんすう ちょうさきかん  
 調査した生きものと報告件数 (調査期間ごと)

ほんごう 番号	ぶんるい 分類	しひょうせいづめい 指標生物名	第1回 平成29 (2017) 年 7月1日～9月30日 かき (夏期)	第2回 平成30 (2018) 年 10月1日～12月31日 しゅうき (秋期)	第3回 令和2 (2020) 年 1月1日～3月31日 とうき (冬期)	第4回 令和2 (2020) 年 4月1日～6月30日 しゅんき (春期)
1	樹木 (ヤナギ類)	ヤナギのなかま		138		
2	樹木 (カバノキ科)	ハンノキ		43	92	
3	草本 (イネ科)	ヨシ	275	141	70	38
4	草本 (タデ科)	ミゾソバ	13	42		
5	草本 (スミレ科)	スミレのなかま				25
6	草本 (オオバコ科)	キタミソウ		23	25	
7	草本 (ゴマハグサ科)	ムラサキサギゴケ				3
8	草本 (ウリ科)	アレチウリ	122	68		18
9	草本 (キク科)	カントウヨメナ		131		
10	草本 (キク科)	在来タンポポ			133	72
11	鳥類 (カモ科)	カルガモ	209	205	174	88
12	鳥類 (カモ科)	オナガガモ			8	
13	鳥類 (サギ科)	アマサギ				5
14	鳥類 (サギ科)	コサギ	201	112	114	47
15	鳥類 (クイナ科)	オオバン		96	170	
16	鳥類 (カモメ科)	ユリカモメ		22	28	
17	鳥類 (カモメ科)	コアジサシ	19			30
18	鳥類 (カワセミ科)	カワセミ	57	44	56	6
19	鳥類 (キツツキ科)	コゲラ	27	47	26	8
20	鳥類 (モズ科)	モズ	54	170	148	9
21	鳥類 (シジュウカラ科)	シジュウカラ	131	151	161	38
22	鳥類 (ヒバリ科)	ヒバリ			15	20
23	鳥類 (ツバメ科)	ツバメ (ツバメの巣)	270		27	109
24	鳥類 (メジロ科)	メジロ	10	41	169	4
25	鳥類 (ヨシキリ科)	オオヨシキリ	28			32
26	鳥類 (ヒタキ科)	ツグミ		19	352	
27	昆虫類 (シロチョウ科)	モンシロチョウ	318	163		187
28	昆虫類 (シロチョウ科)	スジグロシロチョウ	11	6		5
29	昆虫類 (アゲハチョウ科)	アオスジアゲハ	349			30
30	昆虫類 (アゲハチョウ科)	ナガサキアゲハ		2		
31	昆虫類 (タテハチョウ科)	ツマグロヒョウモン		98		
32	昆虫類 (シメチョウ科)	ミドリシジミ				0
33	昆虫類 (クワガタムシ科)	コクワガタ	2			0
34	昆虫類 (セミ科)	ヒグラシ	8			
35	昆虫類 (セミ科)	クマゼミ	36			
36	昆虫類 (カマキリ科)	カマキリのなかま	93	49	132	
37	昆虫類 (トンボ科)	シオカラトンボ	315			
38	昆虫類 (カトンボ科)	ハグロトンボ	90			5
39	昆虫類 (イナゴ科)	イナゴのなかま	58	76		
40	昆虫類 (バッタ科)	シヨウリョウバッタ	213	52		
41	昆虫類 (バッタ科)	トノサマバッタ	114	79		
42	昆虫類 (キリギリス科)	クビキリギリス		23		1
43	は虫類	ヘビのなかま	14	1		2
44	は虫類	カメのなかま	87	30		
45	両生類 (アカガエル科)	トウキョウダルマガエル	17			4
46	両生類 (アマガエル科)	ニホンアマガエル	99	39		
47	両生類 (ヒキガエル科)	アズマヒキガエル			2	1
48	魚 (メダカ科)	メダカ				0
49	貝類	タニシのなかま				16
50	ほ乳類 (イヌ科)	タヌキなど	5	3	3	0
ちょうさたいしょうしゅ 調査対象種			30種	30種	20種	30種
ごうけいほうこくすう 合計報告数			3,245	2,114	1,905	803

※色つきの部分が調査期間別の調査対象種の報告件数となります (色の種類は8ページからのグラフと対応しています)。

## 調査の経過

調査は「一般調査」を中心に実施しました。一般調査とは公募によって一般市民（市民調査員）を募集し、市内13地区別・生育域カテゴリー別による指標生物を調査し実施するものです。その他に市内小学校（学年単位）を対象とし、学校農園や学校近隣の屋外観察地において生物調査を実施した「学校調査」、専門委員とともに市民調査員・一般市民が指標生物以外にも含む生物について調査を実施する「一斉調査」を実施しました。一斉調査は専門委員から見分け方や説明を受け、市民調査員が一般調査を実施する際の参考になるよう、勉強会を兼ねて行いました。

## 調査員の募集

市民調査員の募集は、第1回は平成29年（2017年）5月1日から6月2日まで、第2回は平成30年（2018年）8月1日から9月3日まで、第3回と第4回は同時に令和元年（2019年）8月30日から11月29日まで、広報紙・ホームページ・ポスター掲示・チラシ配布を行い実施しました。

## 第1回 平成29（2017）年7月1日～9月30日（夏期）

市民調査員197名に参加いただき、3,245件の報告がありました。

がっぴ 月日	概要	内容
H29 6/8	学校観察会（新方小（北川崎ホテル田んぼ））	参加：新方小学校2年生30名、5年生38名、 専門委員2名、地区コミ協1名 計71名
6/18	市民調査員説明会	参加：市民調査員119名、専門委員3名 計122名
7/17	一斉調査（県民健康福祉村）	参加：市民調査員33名、専門委員4名、 一般参加13名 計50名



説明会



学校調査



学校調査



一斉調査



一斉調査



一斉調査

第2回 平成30 (2018) 年10月1日～12月31日 (秋期)

調査員108名に参加いただき、2,114件の報告がありました。

一斉調査では埼玉県東南部地域5市1町の連携事業として広く参加者を募集し実施しました。

がっぴ 月日	がいよう 概要	ないよう 内容
H30 9/15	しみんちょうさいんせつめいかい 市民調査員説明会	さんか しみんちょうさいん めい せんもんいじん めい けい めい 参加：市民調査員80名、専門委員5名 計85名
9/29	いっせいちょうさ (まつぶし めどり おかこうえん) 一斉調査 (まつぶし 緑の丘公園)	さんか こしがやし めい そうかし めい よしかわし めい 参加：(越谷市30名、草加市5名、吉川市8名、 まつぶしまち めい せんもんいじん めい けい めい 松伏町2名) 45名、専門委員5名 計50名
10/10	がっこうちょうさ (にいがたしょうがっこう ふるとねがわ かせんしき 河川敷)	さんか にいがたしょうがっこう ねんせい めい せんもんいじん めい けい めい 参加：新方小学校5年生35名、専門委員5名 計40名



いっせいちょうさ  
一斉調査



いっせいちょうさ  
一斉調査



がっこうちょうさ  
学校調査

第3回 令和2 (2020) 年1月1日～3月31日 (冬期)

調査員104名に参加いただき、1,905件の報告がありました。

がっぴ 月日	がいよう 概要	ないよう 内容
R1 2/21	しみんちょうさいんせつめいかい 市民調査員説明会	さんか しみんちょうさいん めい せんもんいじん めい けい めい 参加：市民調査員64名、専門委員4名 計68名
R2 1/18	いっせいちょうさ (かさいようすいろしゅうへん) 一斉調査 (葛西用水路周辺)	さんか しみんちょうさいん めい せんもんいじん めい けい めい 参加：市民調査員39名、専門委員3名 計42名



いっせいちょうさ  
一斉調査



いっせいちょうさ  
一斉調査



いっせいちょうさ  
一斉調査

第4回 令和2 (2020) 年4月1日～6月30日 (春期)

第3回と同じ調査員104名に参加いただき、803件の報告がありました。

令和2年4月25日に一斉調査を行う予定でしたが、新型コロナウイルス感染症予防の観点から中止となりました。

がっぴ 月日	がいよう 概要	ないよう 内容
R2 4/25	いっせいちょうさ (ちゅうし) 一斉調査 (中止)	しんがた ※新型コロナウイルス感染症予防の観点から中止

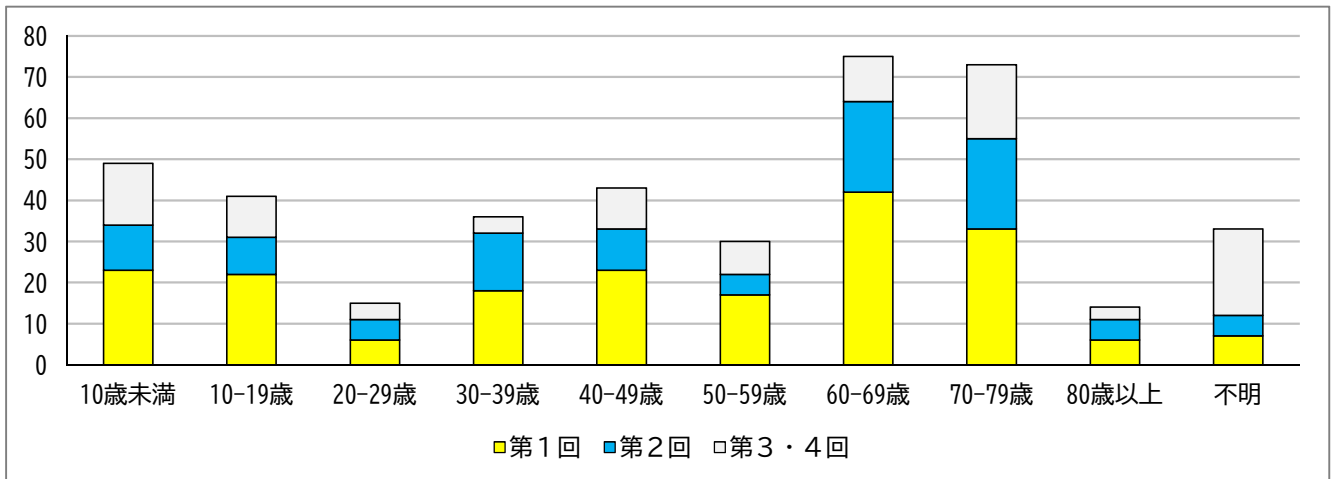


## 参加いただいた市民調査員

この調査は、市内に在住・在学・在勤または市内で活動されている小学生以上の方から応募された市民調査員の皆様により、報告をいただいています。

### 参加人数と年齢構成

第1回は、個人195名と大袋東小学校5年生の皆さん、第2回は、個人105名と埼玉県立越ヶ谷高等学校科学部の皆さん、第3回及び第4回は、個人102名と埼玉県立越ヶ谷高等学校科学部、埼玉県立越ヶ谷北高等学校生物部の皆さんに参加いただきました。なお、第1～4回の延べ参加人数は、513人（団体参加は、1団体を1名として集計）になりました。また、調査回ごとの年齢構成は次のとおりでした。



### 参加いただいた市民調査員のお名前

青木 雅美	井原 結子	北川 五十雄	坂本 光嗣	中川 兼雅	正野 恵子
新井 達也	岩田 孝	熊谷 厚子	佐野 章男	長峰 久美子	増田 逸雄
飯嶋 隆	宇都 雄哉	熊倉 厚子	佐野 洋一	西尾 賢彦	松下 澄子
五十嵐 治	遠藤 脩造	小池 さくら	鈴木 功	橋 美智代	松嶋 順子
池ノ谷 龍市	延与 亜山	小池 茂	鈴木 則子	長谷川 清	萬 義雄
石井 秀夫	岡田 香子	小池 ほのか	住田 博美	長谷川 實	明念 洋子
石垣 隆夫	小曾川 弘美	小菅 才子	高野 泰志	早川 秀郎	柳澤 秀男
石川 健太	小野 博康	小菅 靖	高野 日暖	早坂 奏人	四谷 厚子
石川 光夫	片岡 征二	小西 美碧	高野 力駆	春山 沙織	渡辺 優真
伊藤 千笑	加藤 満	小林 伸広	高橋 信子	春山 さやか	大袋東小学校 5年生
伊藤 寛人	茅野 説	小林 大輝	高橋 良子	藤山 桂子	
井上 宗紀	河井 裕子	小林 憲子	田口 浩明	藤山 愉乃	越ヶ谷高等学校 科学部
井原 透雄	川戸 満夫	小柳 孝子	辻 隆信	船底 直敬	
井原 菜緒	神田 絢子	坂本 誠一郎	中尾 浩久	堀之内 稔	越ヶ谷北高等学校 生物部
その他202名の皆様				正野 愛優未	

※氏名等の掲載に同意いただいた市民調査員、学校名を掲載しました（敬称略 五十音順）。

# 生きものごとの調査結果

市民調査員より報告いただいた結果を、生きものごとに以下の形式でまとめました。


生きものを見つけた地区別・環境別に集計した結果をグラフにし、調査結果を踏まえた専門委員のコメントを掲載しました。

生きもの名


大きさや特徴の紹介

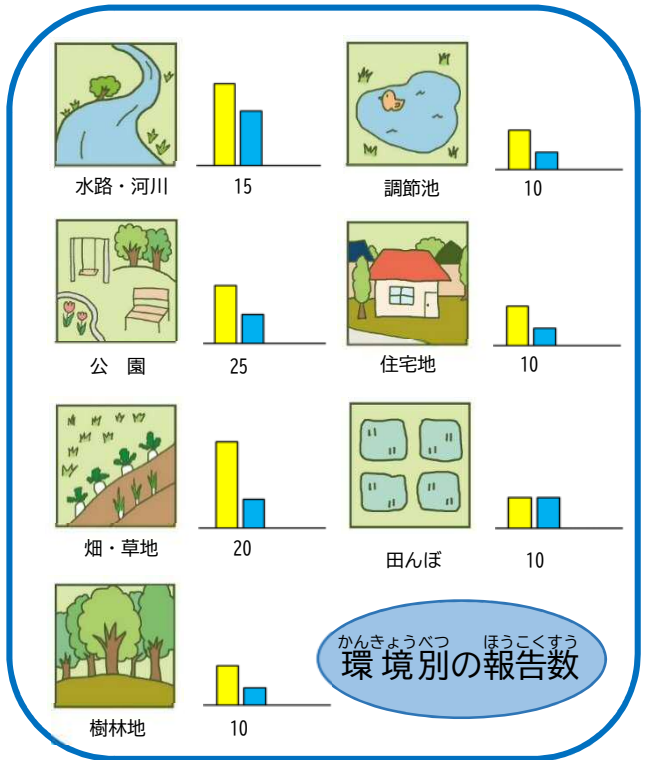
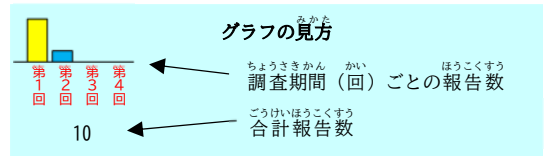
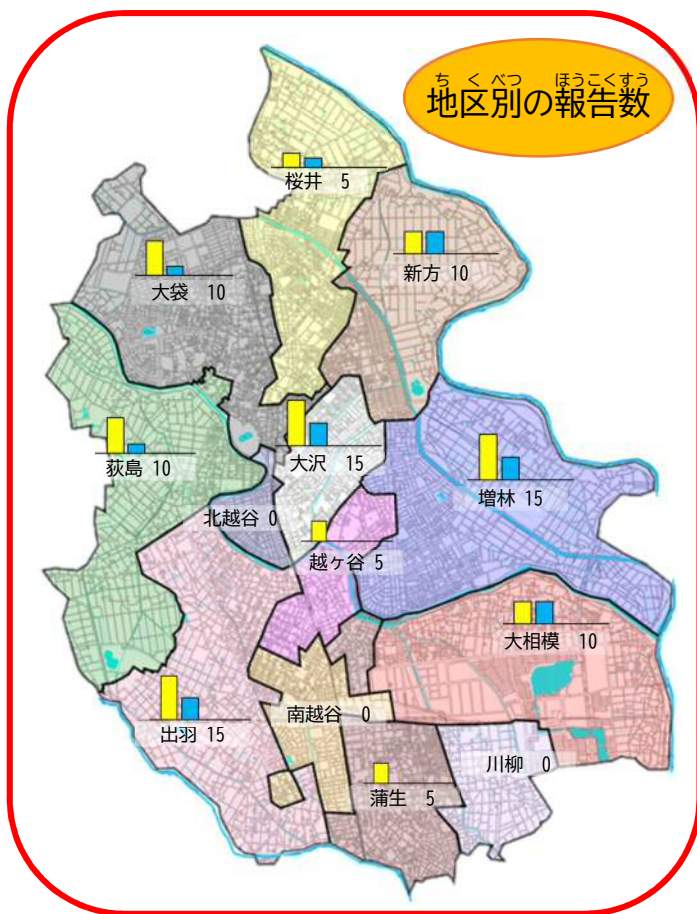
調査期間ごとの調査報告件数

## 埼玉県レッドリスト・環境省レッドリストのランクについて (該当種のみ記載)



調査員からの報告写真





専門委員のコメント

# 1 ヤナギのなかま

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい かい  
調査報告件数 (調査期間 第2回)

第1回 H29. 7~9月	第2回 H30. 10~12月	第3回 R2. 1~3月	第4回 R2. 4~6月	合計
	138			138

たか さ ひく きから たか きまで おお く しゅるい  
高さ 低い木から高い木まで多くの種類があります  
(シダレヤナギは15mくらいまで)

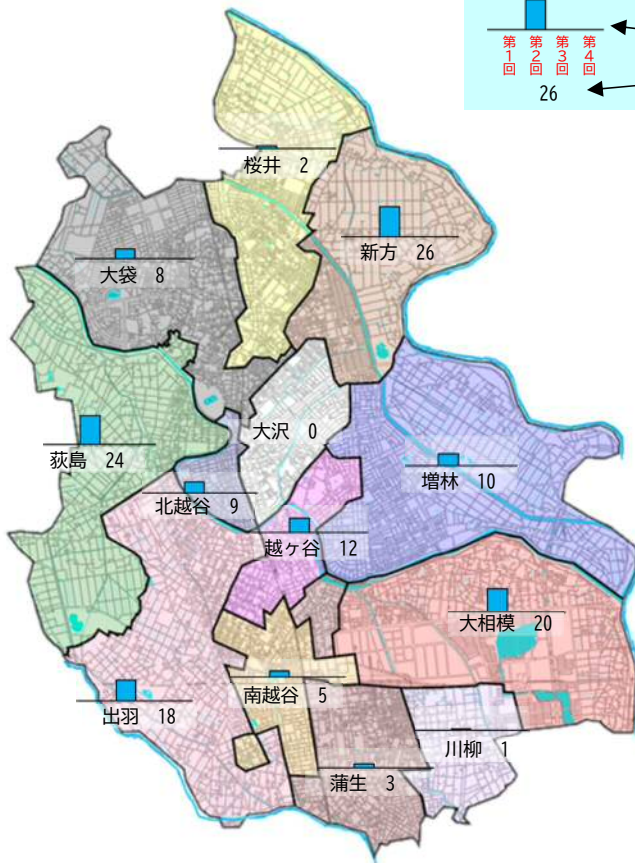
とく ちゆう らくようじゆ ふゆ は お  
特徴 落葉樹 (冬に葉が落ちます)

よく見かける葉の細長いシダレヤナギのほか、葉が丸いやナギもあります

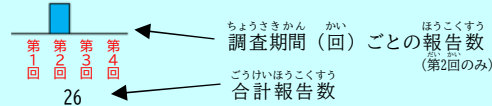
ちゆうさいん ほうこくしゃしん  
調査員からの報告写真



ちくべつ かんきょうべつほうこくすう  
地区別・環境別報告数

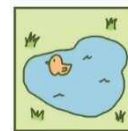


グラフの見方



水路・河川

63



調節池

26



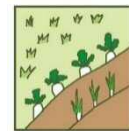
公園

25



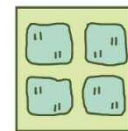
住宅地

16



畑・草地

6



田んぼ

2



樹林地

0

- ヤナギ類は生態的に河川沿いや湿原地帯に生息している。
- 越谷市内においては比較的広い範囲から報告が寄せられている。
- とくに、新方地区・荻島地区・大相模地区・出羽地区に多いが、これは、これらの地域が比較的大きな河川沿いにあるため、ヤナギ類が主に河川沿いや、もとは河川であった低湿地に多く自生していることをよく表している。
- これらは河川の護岸がコンクリートで覆われてしまうと消えてしまう運命にある。ヤナギ類は種類が多く他の樹木と見分けるポイントは、春早くに咲くヤナギ類特有の綿毛をつけた花を見ることなどで見分けることができる。

(飯島 眞)

## 2 ハンノキ (カバノキのなかま)

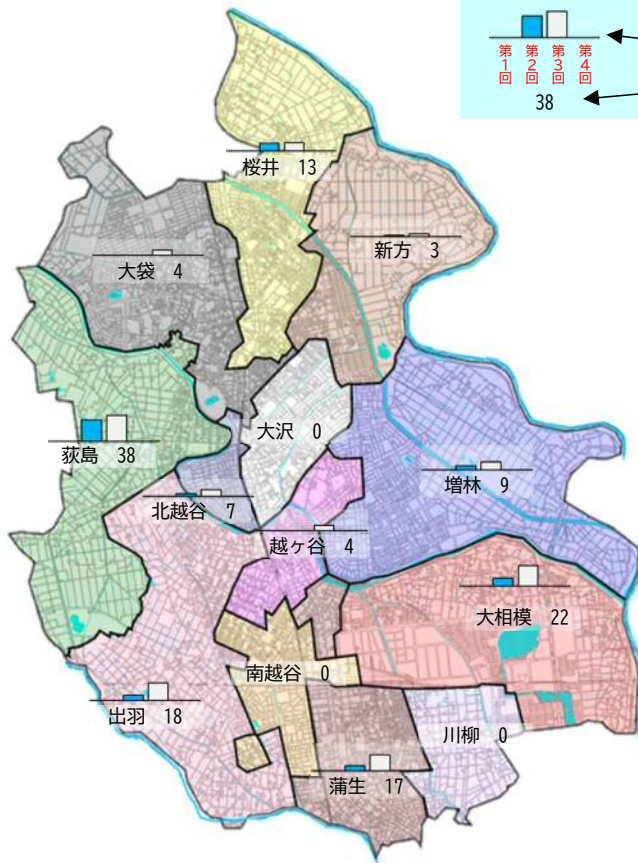
ちょうさほうこくけんすう		ちょうさきかん		だい		かい	
調査報告件数 (調査期間				第2・3回)			
第1回	第2回	第3回	第4回	合計			
H29. 7~9月	H30. 10~12月	R2. 1~3月	R2. 4~6月				
	43	92		135			

高さ 15mくらいまで  
 特徴 落葉樹 (冬に葉が落ちます)  
 2~3月に細長い黒褐色の房をつけます  
 樹皮は紫褐色で不規則に浅く裂けてはがれます

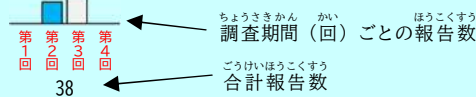
### ちょうさいん ほうこくしゃしん 調査員からの報告写真



### ちくべつ かんきょうべつほうこくすう 地区別・環境別報告数



#### グラフの見方



水路・河川

56



公園

32



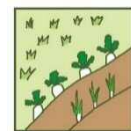
住宅地

16



樹林地

11



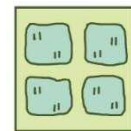
畑・草地

8



調節池

7



田んぼ

5

- ・ハンノキは生態的に湿地帯に多く自生する植物で、最も有名なのは釧路湿原のハンノキ林である。そのため自生地は比較的限られていて、荻島地区・大相模地区・出羽地区・蒲生地区、その他の地域でわずかに見られる。
- ・これらの地域はかつては広い範囲で湿地が広がっていた地域で、その痕跡としてハンノキが自生している場合が多い。また、中には稲穂をかける稲木として人為的に植えられたものもある。これらのハンノキも使われなくなることでやがて消える運命にある。越谷市のかつての環境を示すとともに、県の蝶であるミドリシジミの食草でもあるので、市民の力で残していきたいものである。
- ・見分けるポイントは、2cmほどのマツボックリによく似た果実で、冬の間に長く垂れ下がった雄花とともによく目立つ。

(飯島 眞)

### 3 ヨシ（イネのなかま）

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい かいすべ  
調査報告件数（調査期間 第1～4回全て）

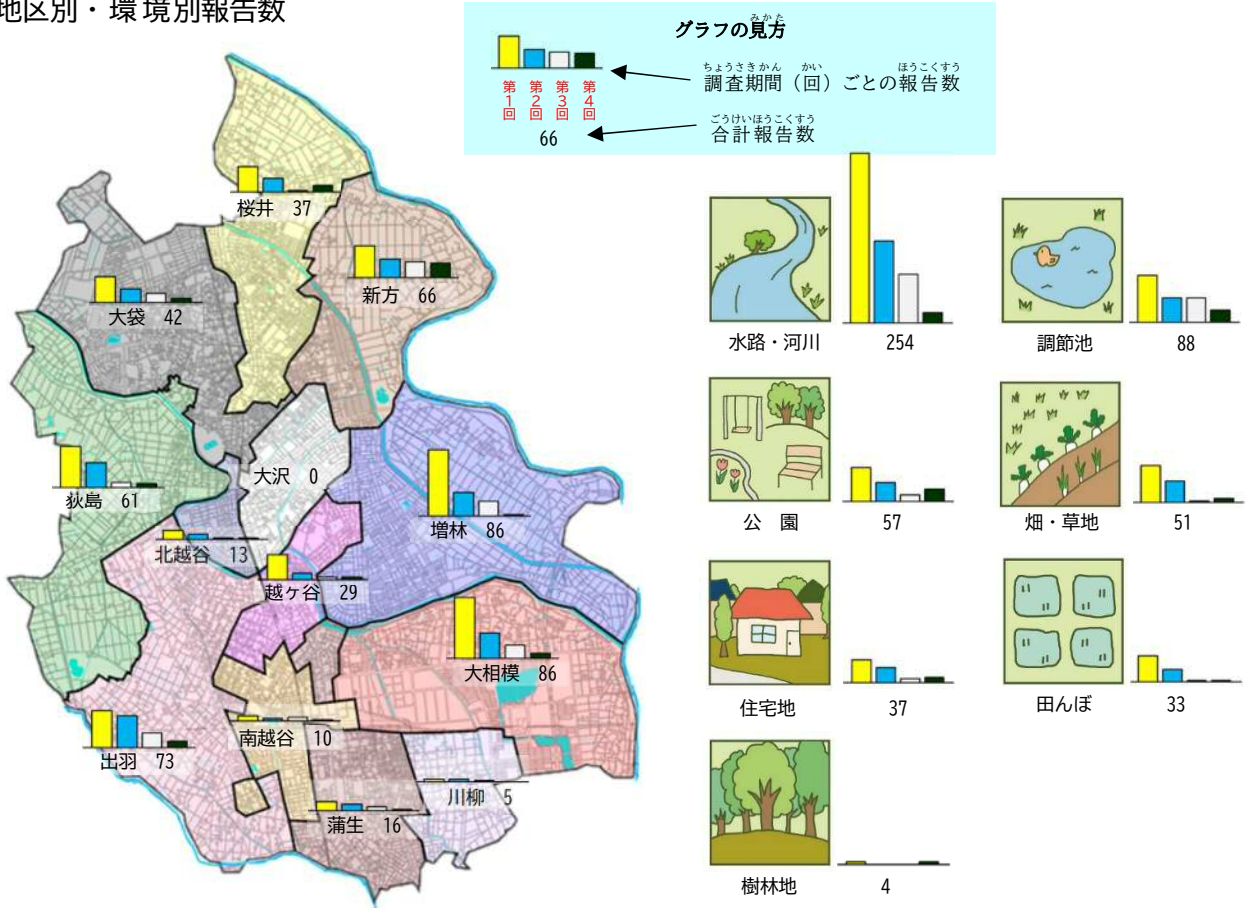
第1回 H29. 7～9月	第2回 H30. 10～12月	第3回 R2. 1～3月	第4回 R2. 4～6月	合計
275	141	70	38	524

おおきさ 草2～3m、葉は長さ 20～50 cm・幅2～4 cmで細長い  
特徴 まとまって生えていることが多く、秋にホウキの  
ような形にこまかい花が多数つきます

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
調査員からの報告写真



ちくべつ かんきょうべつほうこくすう  
地区別・環境別報告数



- ・ツンドラをのぞく世界中の湿地や河川敷で見られる。
- ・越谷市内では街の中心部を除く広い範囲のどこにでも生えていて、越谷市がかつては広い範囲で湿地帯であったことをよく表している。
- ・ただし、調査結果を見ると、どこの地域も年々減少傾向にあり、これらの地域が開発によって市街地や住宅地となっていることを示している。
- ・よく似たセイバンモロコシとの違いは、セイバンモロコシはその名が示すように葉の中央にトウモロコシによく似た白く太い主脈が自立つがヨシでは主脈は自立しないことである。

（飯島 眞）

## 4 ミゾソバ (タデのなかま)

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい 2かい  
調査報告件数 (調査期間 第1・2回)

第1回 H29. 7~9月	第2回 H30. 10~12月	第3回 R2. 1~3月	第4回 R2. 4~6月	合計
13	42			55

おおきさ 草30~70 cm、花 約6 mm

特徴 7~10月に先端が紅紫色、根本が白色の花が咲きます  
葉が牛の顔の形に似ているため、「うしのひたい」とも呼ばれています

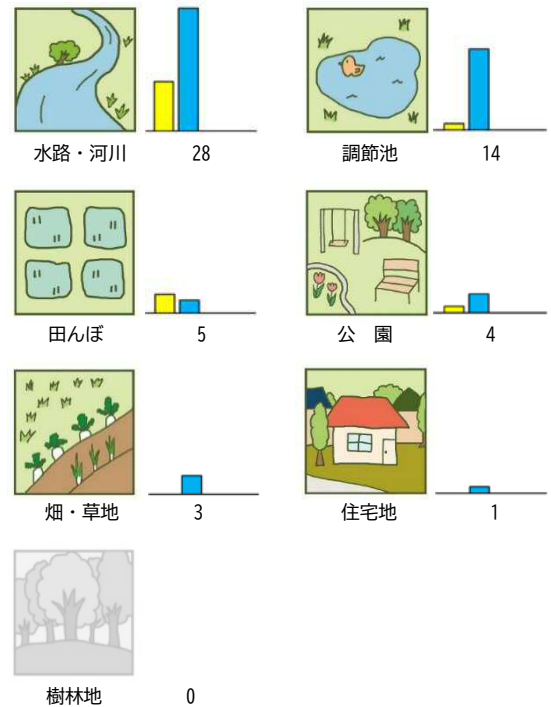
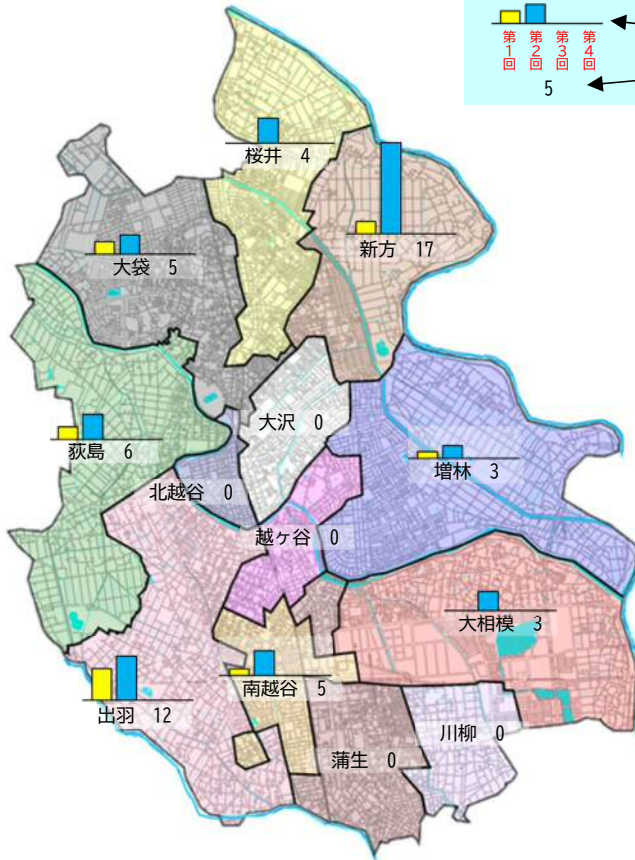
ちょうさいん ほうこくしゃしん  
調査員からの報告写真



ちくべつ かんきょうべつほうこくすう  
地区別・環境別報告数

グラフの見方 ※報告数が少ないため、グラフを長くしました(通常の5倍)

第1回 第2回 第3回 第4回  
5  
ちょうさきかん かい ほうこくすう  
調査期間(回) ごとの報告数  
ごうけいほうこくすう  
合計報告数



- ・その名のとおり、生態的に溝(河川や農用用水)のふちによく生えている。
- ・越谷市内では市中心部の市街地以外ではどこでも見られる。
- ・新方地区からとくに報告が多いのは広く田んぼが広がっているためと思われる。
- ・また、報告のなかった地域でも見られる。周りの草が茂ると見えにくくなるので今回報告数が少なかったのはおそらく季節的な影響だろう。
- ・見分けるポイントは、葉や花はソバによく似ていて水辺に生えていること。

(飯島 眞)

## 5 スミレのなかま

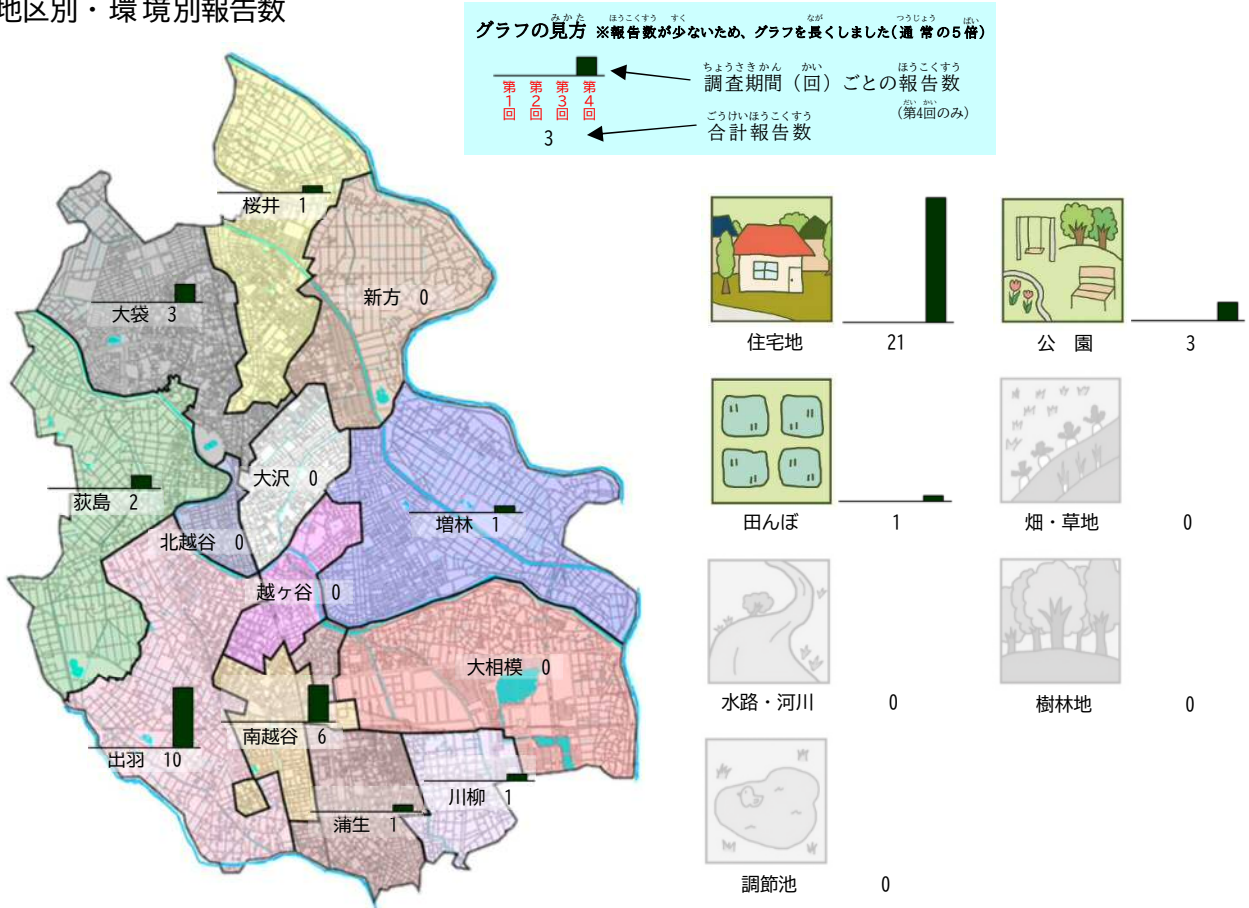
ちょうさほうこくけんすう (調査期間 第4回)				
第1回	第2回	第3回	第4回	合計
H29. 7~9月	H30. 10~12月	R2. 1~3月	R2. 4~6月	
			25	25

おほ 大きき 草7~11 cm 花2~2.5 cm  
 特徴 4~5月に濃い紫色の花をつけます  
 葉はすべて根元から生え、柄にはヒレのような翼(よく)がついています

### ちょうさいん ほうこくしゃしん 調査員からの報告写真



### ちくべつ かんきょうべつほうごすう 地区別・環境別報告数



- スミレ類は、生態的には一部の湿地性のものを除き比較的乾燥した日当たりの良い場所を好む種類が多く、越谷市内ではよく管理された河川の土手や田畑のあぜ道に生えていることが多い。出羽地区・南越谷地区・大袋地区などから報告があるが、全体としては少ない地域が多い。
- かつては広い範囲で見られたが、各地で土手に菜の花の種が撒かれるようになったため、日当たりを好むスミレが生息できなくなってしまった場所が多い。
- また、市販の園芸化されたスミレが逸脱して生えているものを見かける。
- 見分けるポイントは、語源となった「墨入れ」のような形をした花である。

(飯島 眞)

## 6 キタミソウ (オオバコのなかま)

ちょうさほうこくけんすう		ちょうさきかん		だい	かい
調査報告件数		(調査期間		第2・3回)	
第1回	第2回	第3回	第4回	合計	
H29.7~9月	H30.10~12月	R2.1~3月	R2.4~6月		
	23	25		48	

**希少種** 環境の変化などによって数が少なくなっているいきもの  
**大きさ** 草2~5cm 花1~2mm  
**特徴** 10月と3月ごろ白い花が咲きます  
 非常に小さな植物で、葉がスプーンのような形をしています

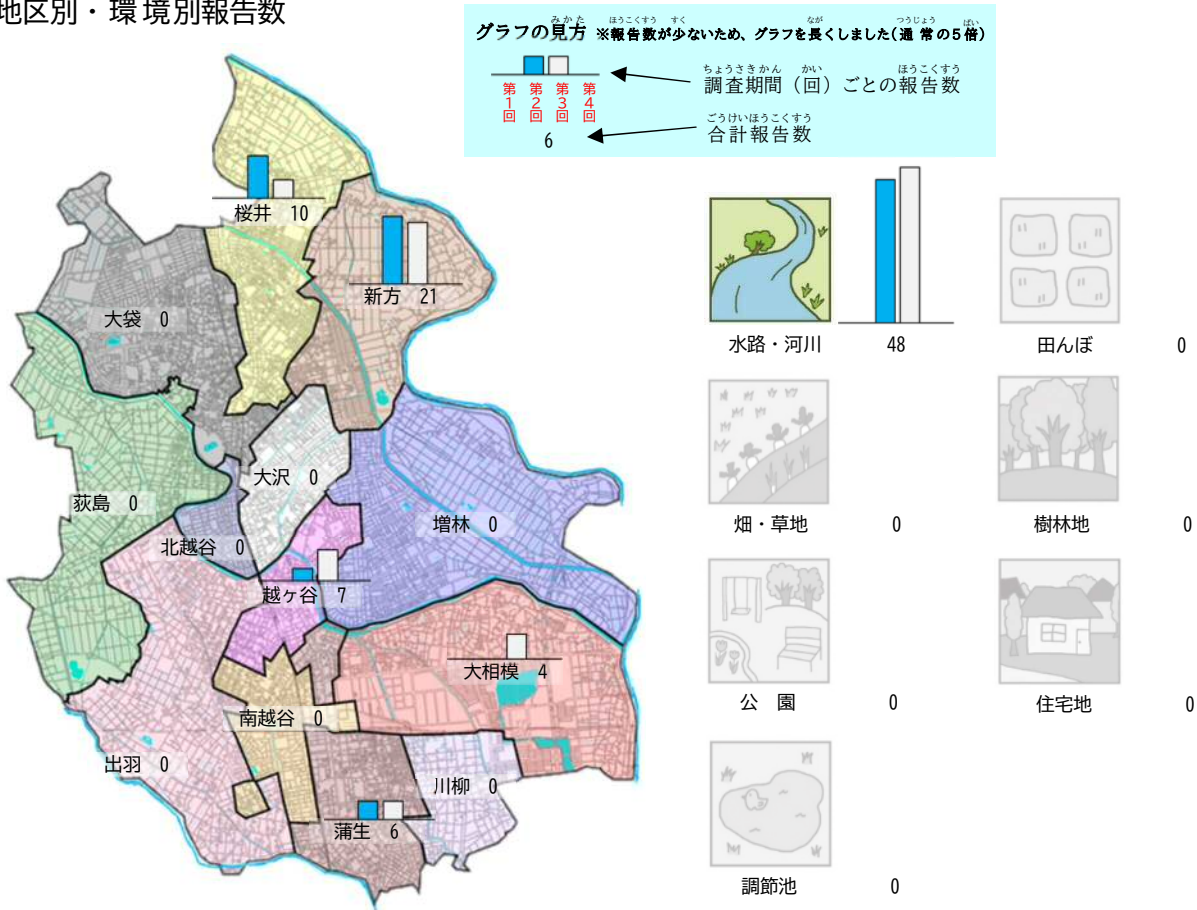
■埼玉県レッドリスト 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

■環境省レッドリスト 準絶滅危惧ⅠB類 (EN)

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
調査員からの報告写真



ちくべつ かんきょうべつほうこくすう  
地区別・環境別報告数



- 北半球の亜寒帯地域の湿地を中心に北極を取り巻くように自生している。温帯地域の越谷にある点で生態学上たいへん貴重な植物といえる。
- 調査結果では、主に桜井地区・新方地区の一級河川流域で見つかっている。もう一つの大きな自生地は大相模地区にある。
- 夏に水没する地域に自生しているのが特徴で、小さな植物なので見分けるのは難しい。観察会などで実物を見て覚えると良い。

(飯島 眞)



# 7 ムラサキサギゴケ (ゴマンノハグサのなかま)

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい かい  
調査報告件数 (調査期間 第4回)

第1回 H29. 7~9月	第2回 H30. 10~12月	第3回 R2. 1~3月	第4回 R2. 4~6月	合計
			3	3

おお ぐさ 5~10 cm ばな 1.5~2 cm  
特 徴 4~5月に紅紫色で唇形の花をつけます

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
調査員からの報告写真

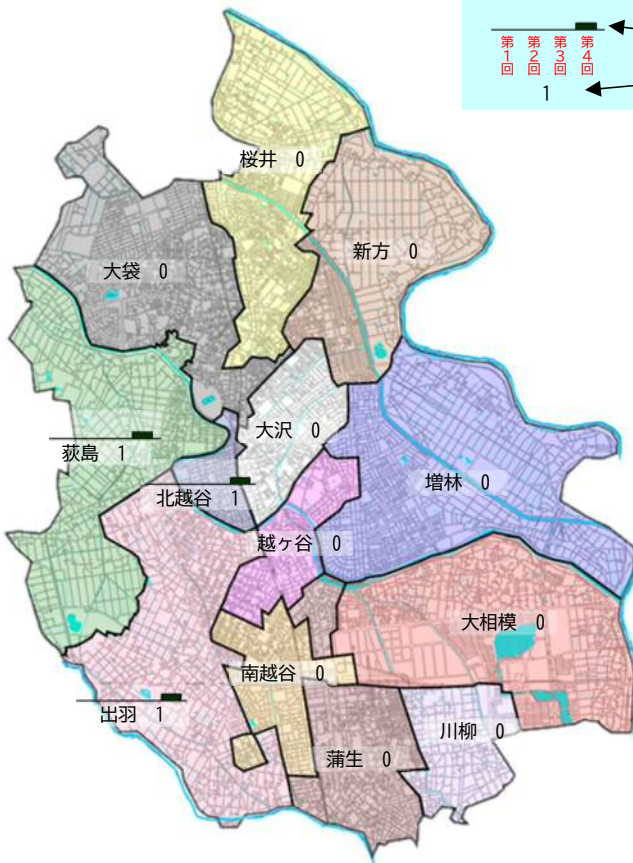


※調査期間外となりますが、調査員が市内で撮影した写真です

ちくべつ かんきょうべつほうこくすう  
地区別・環境別報告数

グラフの見方 ※報告数が少ないため、グラフを長くしました(通常の5倍)

第1回 第2回 第3回 第4回  
1 ← ちょうさきかん かい ほうこくすう  
調査期間 (回) ことの報告数  
ごうけいほうこくすう だい かい  
合計報告数 (第4回のみ)



- ・ スミレやタンポポとともに、田畑の畦に自生する代表的な人里の植物のひとつであるが、田んぼの縁などの比較的湿った日当たりの良い場所を好む。
- ・ 報告数が少ないが、春早くに花を咲かせ、その後は他の植物に埋もれて見えなくなってしまう。また、かつてどこにでも見られた田園風景が失われつつあることも示しているようだ。
- ・ 見分けるポイントは、薄紫でサギが羽を広げたように見える可愛い花にある。

(飯島 眞)

## 8 アレチウリ (ウリのなかま)

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい 1・2・4かい  
調査報告件数 (調査期間 第1・2・4回)

第1回 H29.7~9月	第2回 H30.10~12月	第3回 R2.1~3月	第4回 R2.4~6月	合計
122	68		18	208

とくていがいらいせいぶつ 人間生活や生態系へ被害を及ぼす外来生物として指定されたもの

おおきさ 草 (つる植物)、花 約1cm

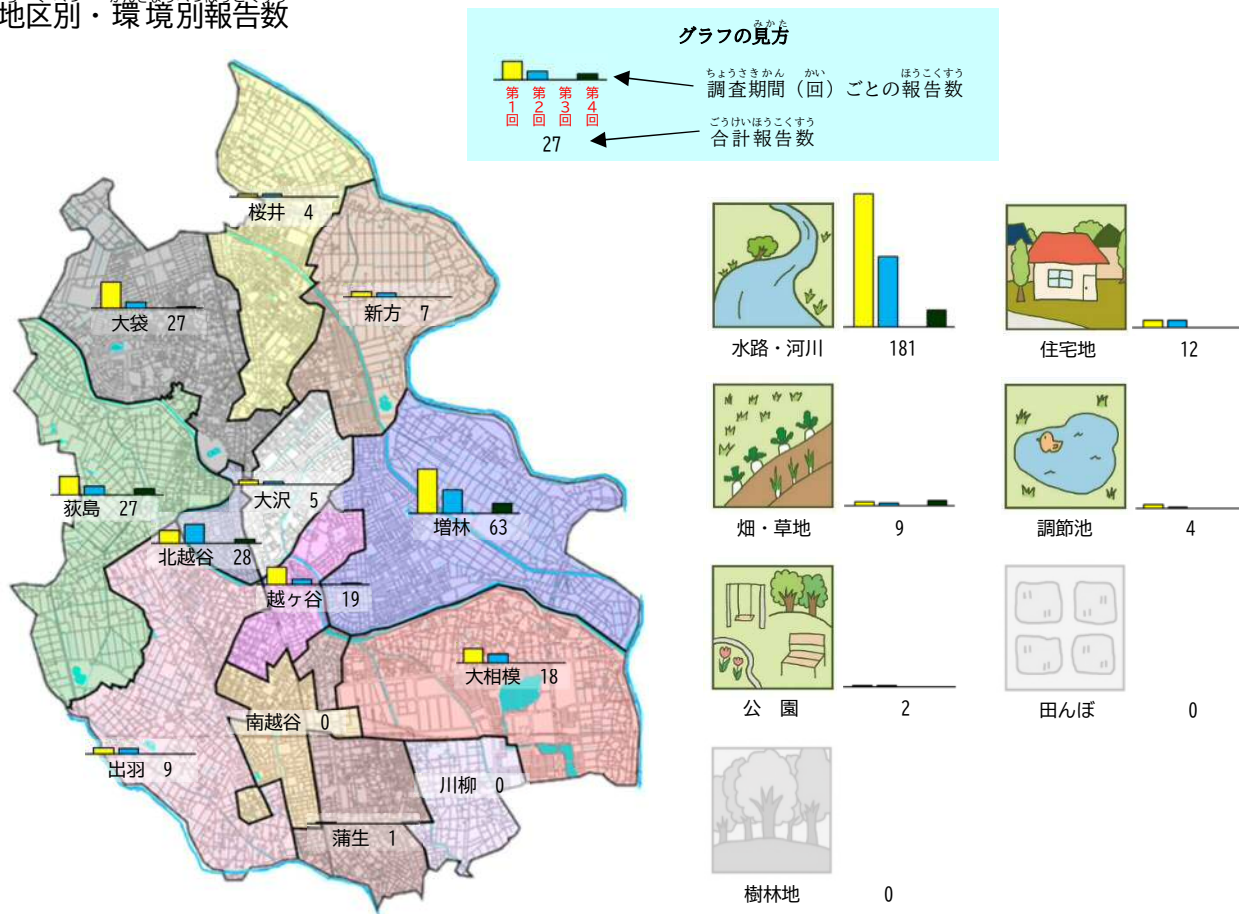
特徴 8~9月に黄白色の花をつけます

地面や他の植物をおおいつくすように生えています

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
調査員からの報告写真



ちくべつ かんきょうべつほうこくすう  
地区別・環境別報告数



- 生態的には土が掘り返され生態系が破壊された日当たりの良い荒れ地に多く自生し蔓延る代表的な帰化植物の一つである。
- 大袋地区、増林地区、荻島地区、越ヶ谷地区などで報告があるが、とくに、これらの地域で新たな開発が進んでいる場所があるものと思われる。市内のいたる所の開発地で見つけることができる。
- この植物は、ごく最近生態系が破壊された場所を示していることが多い。
- 見分けるポイントは、キュウリによく似た大きな葉があることで、キュウリに比べ果実は非常に小さい。

(飯島 眞)

## 9 カントウヨメナ(キクのなかま)

大きさ 草50 cm～1m、花 約3 cm

特徴 9～10月に淡い青紫色の花が咲きます

のぎくのなかまで、だ円形の葉のふちがギザギザになっています

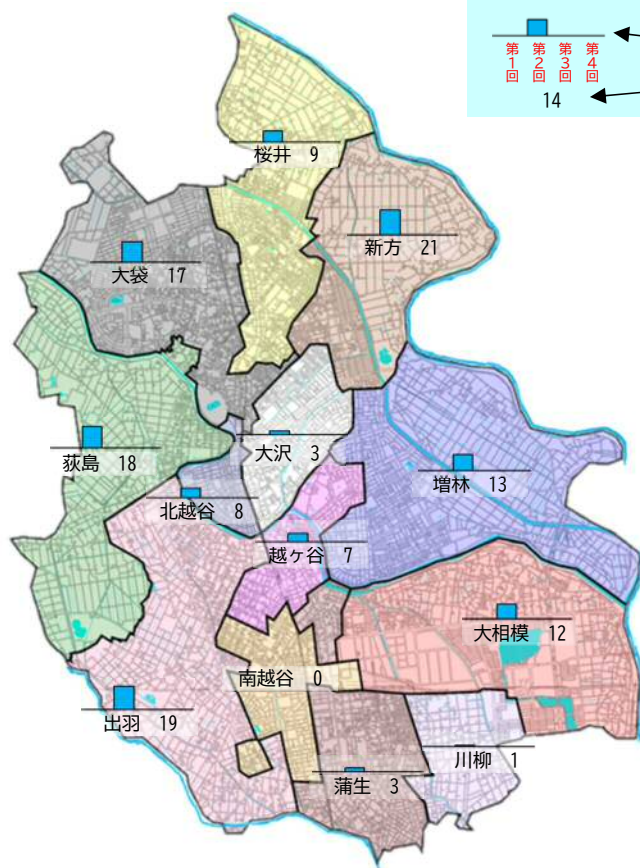
調査報告件数 (調査期間 第2回)

第1回 H29. 7～9月	第2回 H30. 10～12月	第3回 R2. 1～3月	第4回 R2. 4～6月	合計
	131			131

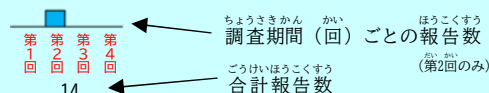
調査員からの報告写真



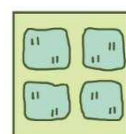
地区別・環境別報告数



グラフの見方



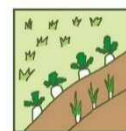
水路・河川 51



田んぼ 24



公園 19



畑・草地 14



調節池 12



住宅地 6



樹林地 5

- ・スマレ・タンポポ・ムラサキサギゴケ等と同様、生態的にはよく管理された畑の畦などに多く自生する代表的な人里植物のひとつである。
- ・市の中心部をのぞく広い範囲に見られる。
- ・この結果は、これらの地域が田園地帯で、この地域は今も畑が広がっていることをよく表している。
- ・ヨメナとカントウヨメナはよく似ているが、ヨメナは葉が厚く光沢がありカントウヨメナは薄い。ヨメナは主に中部地方以西に自生する。
- ・よく似たものにユウガギク・ノコンギクなどがある。

(飯島 眞)

# 10 在来タンポポ (キクのなかま)

調査報告件数 (調査期間)		第3・4回		合計
第1回 H29. 7~9月	第2回 H30. 10~12月	第3回 R2. 1~3月	第4回 R2. 4~6月	
		133	72	205

大きさ 草20~30 cm  
 特徴 3~5月に黄色い花をつけます  
 花弁を取り巻く総苞片が、セイヨウタンポポは反り返るよう  
 に下向きに対して、在来タンポポは上向きになっています

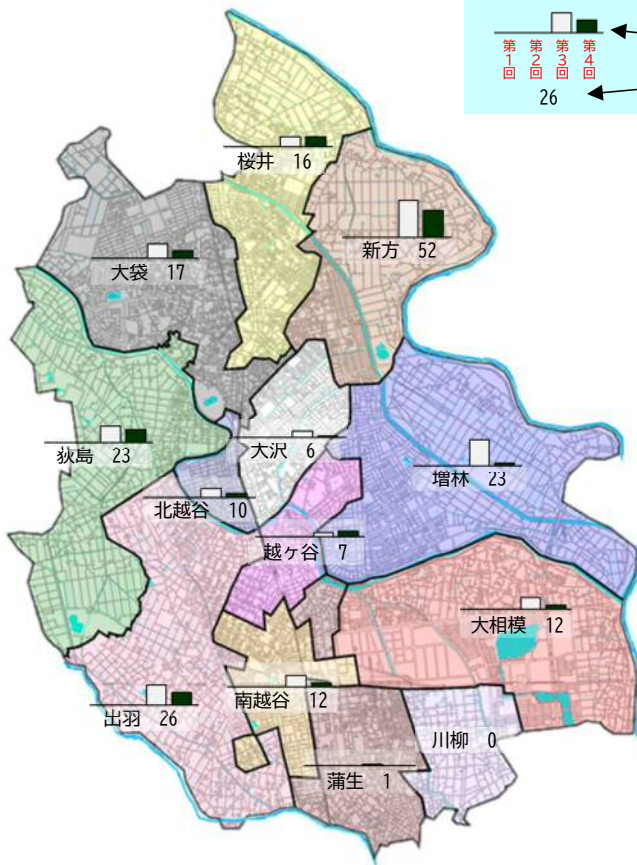
## 調査員からの報告写真

※セイヨウタンポポとの見分けが写真では難しく、はっきりと判別できたもののみ掲載しました



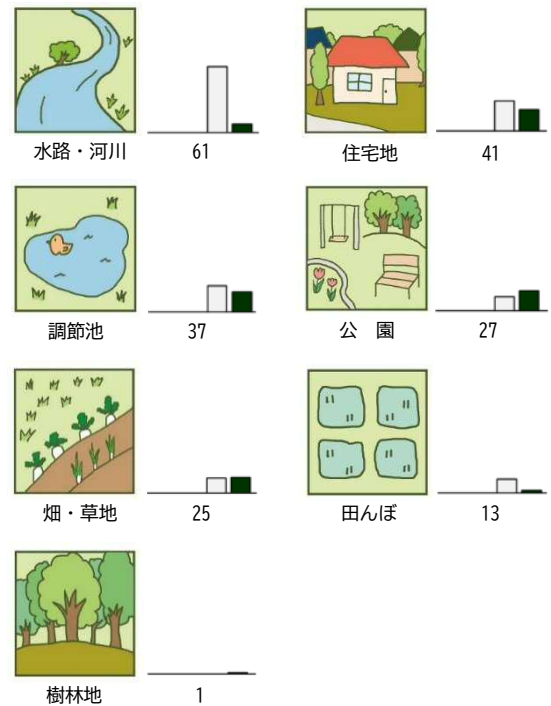
(参考) 専門委員が江戸川土手で撮影した写真です

## 地区別・環境別報告数



### グラフの見方

調査期間 (回) 1回 2回 3回 4回  
 報告数  
 合計報告数 26



- 日本原産のタンポポで、各地にさまざまな種類がある。生態的にはやや乾燥した日当たりの良い土手やあぜ道などの植物の背の低い草原に自生している。
- 越谷市内では、中心部をのぞく周辺地域で広く見られる。これらの自生地は殆どは河川の土手などで、スミレ類とともに土手が非常に大切な自生地となっていることがよく分かる。そのため、土手に牧草類や背の高い菜の花の種が撒かれるようになってから急激に減少している。
- セイヨウタンポポとの見分け方は花の集まりの周辺にある総苞片の違いによるが、セイヨウタンポポの中にも在来タンポポによく似た変異があり、見分けるのはとてもむずかしい。越谷周辺で在来タンポポが多く見られるのは江戸川土手で、実際に見られると違いが分かりやすい。(飯島 眞)

# 11 カルガモ (カモのなかま)

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい かいすべ  
**調査報告件数 (調査期間 第1~4回全て)**

第1回 H29. 7~9月	第2回 H30. 10~12月	第3回 R2. 1~3月	第4回 R2. 4~6月	合計
209	205	174	88	676

なごえ **鳴き声** グエツグエツ

おお **大きさ** オス 63 cm、メス 53 cm

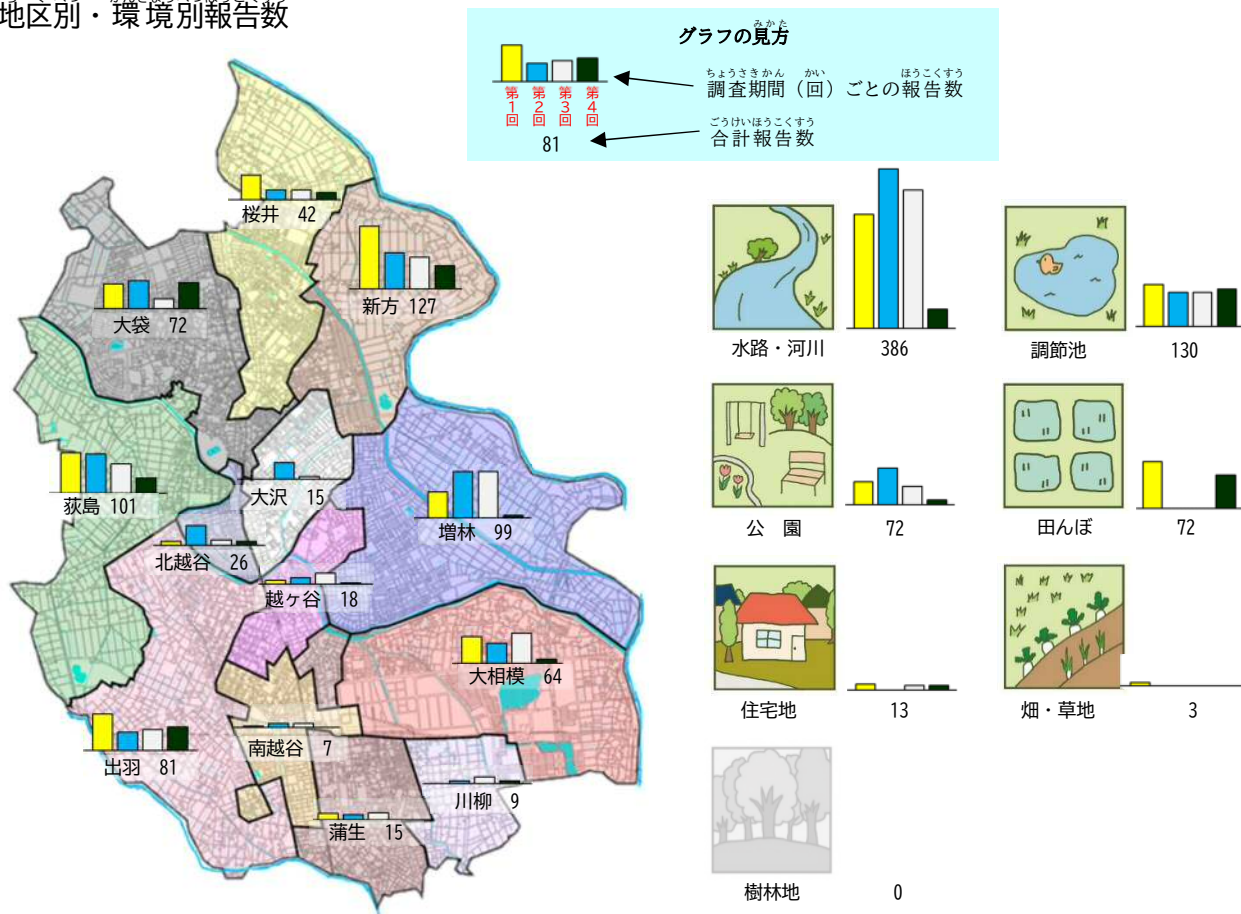
とく **特徴** 留鳥 (1年中日本にいます)

かお **顔**に2本の黒褐色の線があり、くちばしは黒色で先端は黄色です

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
**調査員からの報告写真**



ちくべつ かんきょうべつほうこくすう  
**地区別・環境別報告数**



- 日本のカモの多くは渡り鳥だが、カルガモは1年中日本にいて繁殖している水鳥。もちろん越谷でも繁殖しており、6月になると大吉調節池、健康福祉村の池、大相模調節池 (レイクタウンの池) などで「カルガモの親子」をよく見かける。
- しかし、近年は小さな水路や池でも子育てをしている。これは人目に付くことにより、天敵のカラスからヒナを護る作戦のようだ。桜井地区の大里では、3mにも満たない細い水路で2年続けて3家族の子育てがあった。また、花田苑では「コロナ禍で来園者が減ったら、ヒナたちがカラスに全てやられた」そうだ。
- 調査報告件数は圧倒的な1位。身近な野鳥であることが分かる。

(山部 直喜)

## 12 オナガガモ (カモのなかま)

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい かい 調査報告件数 (調査期間 第3回)				
第1回 H29.7~9月	第2回 H30.10~12月	第3回 R2.1~3月	第4回 R2.4~6月	合計
		8		8

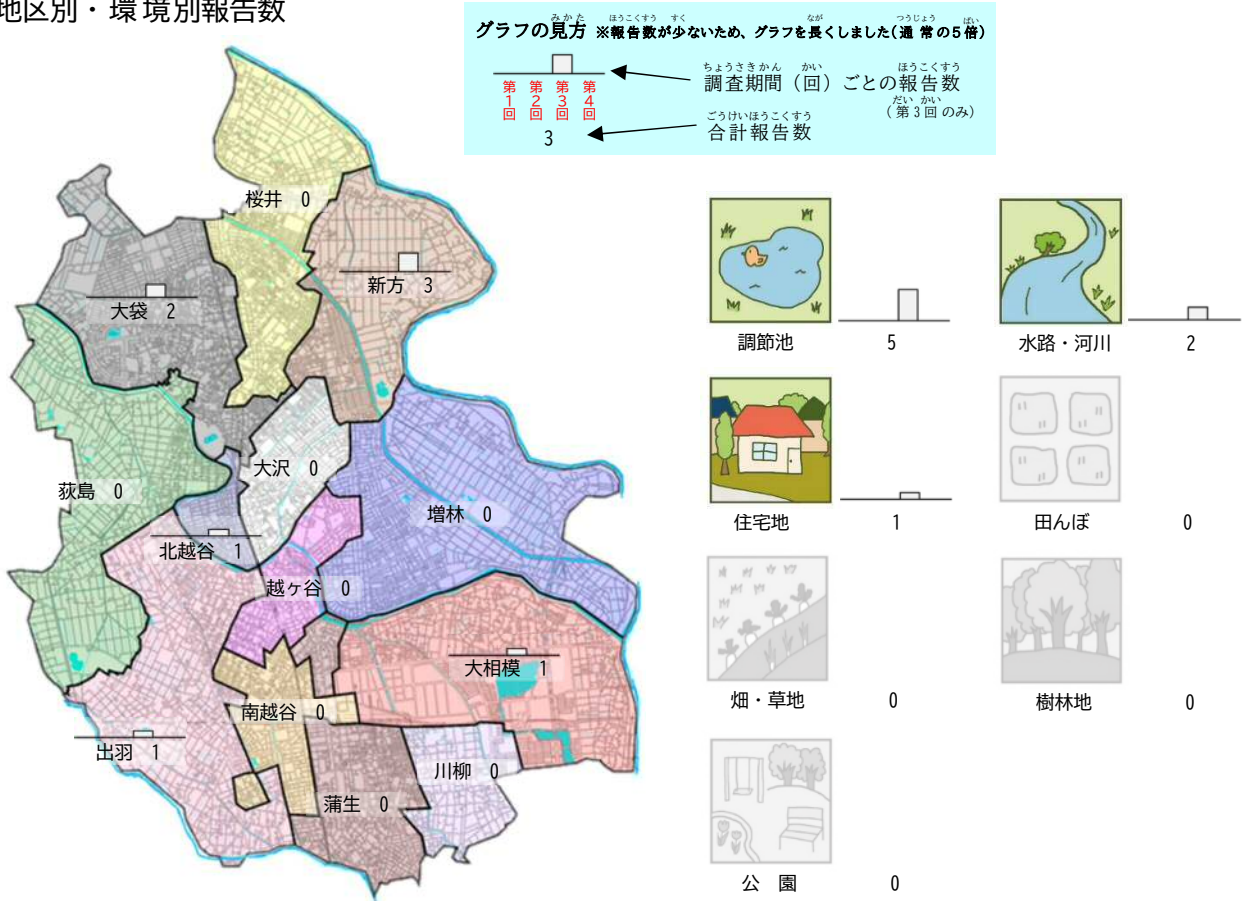
鳴き声 プリッ、プリッ  
 大きさ オス 75 cm、メス 53 cm  
 特徴 冬鳥  
 他のカモと比べて尾が長くなっています

### ちょうさいん ほうこくしゃしん 調査員からの報告写真



※調査期間外となりますが、調査員が市内で撮影した写真です

### ちくべつ かんきょうべつほうこくすう 地区別・環境別報告数



- 30年ほど前には、新方地区の向 畑の古利根川において、オナガガモだけで 1,000羽以上越冬していたことがある。その当時は新方地区に限らず、水辺で最も多いカモがオナガガモであった。その後は、徐々に確認数を減らし、今回の調査では報告件数はわずかに 5件。その激減ぶりに驚いている。
- 激減しているのは上野の不忍の池でも同様である。原因は、給餌の自粛が主な原因といわれている。実は、向 畑の対岸でも大量にパンくずを与えていたのだ。
- 採食するときは、首を水中に伸ばして逆立ちし、水草や根などを食べている。その姿は、お尻だけが見えていてユーモラスだ。

(山部 直喜)

### 13 アマサギ (サギのなかま)

ちょうさほうこくけんすう		ちょうさきかん		だい かい
調査報告件数 (調査期間 第4回)				
第1回	第2回	第3回	第4回	合計
H29. 7~9月	H30. 10~12月	R2. 1~3月	R2. 4~6月	
			5	5

なごえ グワァツ、グワァツ  
 鳴き声

おお 50 cm  
 大きさ

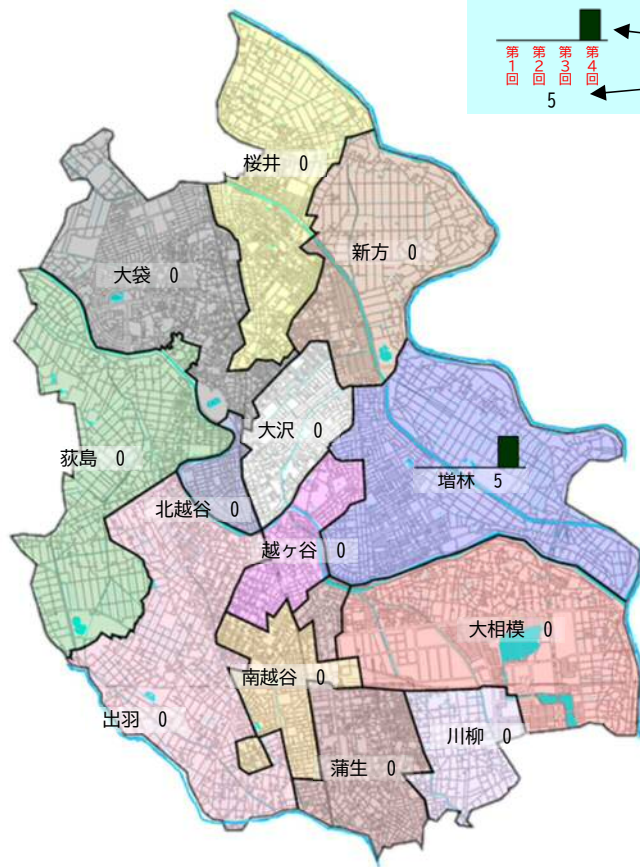
とく ちよう なつどり (あたたかい ちほう では 1 ねん ちゆう み られま す)  
 特徴 夏鳥 (あたたかい 地方では1年中見られます)  
 ふゆ ぜんたい はくしよく なつ あたま むね いろ  
 冬は全体が白色ですが、夏には頭から胸がだいたい色になります

■埼玉県レッドリスト 絶滅の恐れがある地域個体群 (LP)

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
 調査員からの報告写真



ちくべつ かんきょうべつ ほうこくすう  
 地区別・環境別報告数



グラフの見た方 ※報告数が少ないため、グラフを長くしました(通常の5倍)  
 第1回 第2回 第3回 第4回  
 5  
 ちょうさきかん かい ほうこくすう  
 調査期間 (回) 各回の報告数  
 ごうけいほうこくすう  
 合計報告数 (第4回のみ)



- ・増林地区の中島三丁目に、県内でも最大規模のサギのコロニー(※)がある。そこに集まるサギの中で最も遅く渡って来て、5月ごろから繁殖を始めるのがアマサギだ。報告数が少ないのは渡来数が少ないからである。
  - ・しかし、この時期特有の美しい橙色の羽毛はよく目立つ。ただ、アマサギの“アマ”は、飴色の“アメ”が転音したもので“亜麻”ではない。
  - ・また、繁殖期が過ぎるとこの羽毛は白くなり、いわゆる白鷺になる。
- ※コロニー：集団繁殖地。中島のコロニーでは、アオサギ、ダイサギ、チュウサギ、コサギ、アマサギ、ゴイサギが混在して繁殖している。(山部 直喜)

# 14 コサギ (サギのなかま)

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい かいすべ  
**調査報告件数 (調査期間 第1~4回全て)**

第1回 H29. 7~9月	第2回 H30. 10~12月	第3回 R2. 1~3月	第4回 R2. 4~6月	合計
201	112	114	47	474

なごえ ゴアーツ、ゴアーツ  
**鳴き声**

おお 61 cm  
**大きさ**

とく りゅうちょう ねんじゅうにほん  
**特徴** 留鳥 (1年中日本にいます)

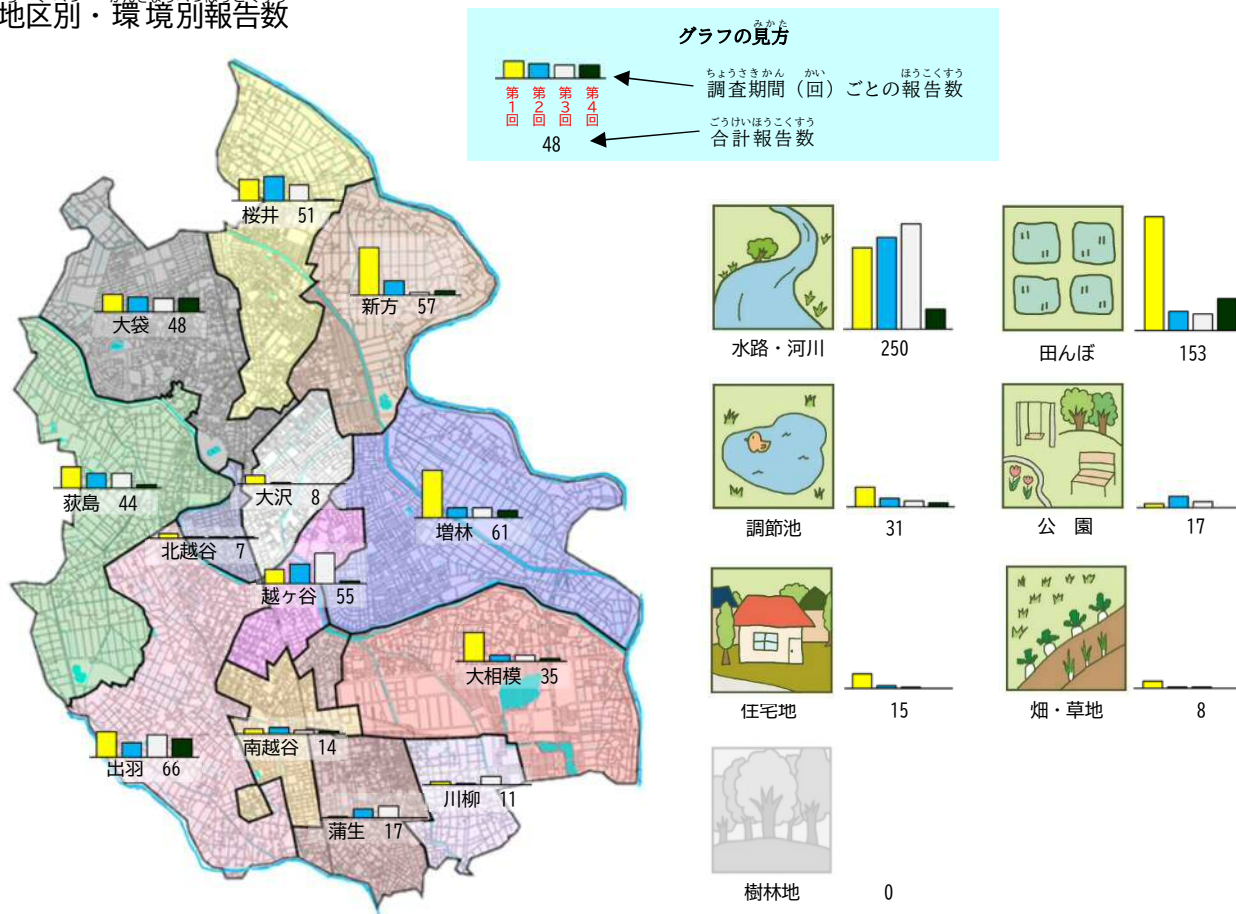
ぜんたい はくしよく あし こくしよく ゆび きいろ  
**全体が白色で、くちばしと足は黒色、指は黄色です**

■埼玉県レッドリスト 準絶滅危惧2型 (NT2)

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
**調査員からの報告写真**



ちくべつ かんきょうべつほうこくすう  
**地区別・環境別報告数**



- 年間を通じて越谷で生息しているが、3月末から4月上旬に増林地区の中島三丁目に集合して繁殖活動を始める。ここ数年の観察では4月3日頃には来ている。そして、この時期のこの場所に来るコサギは、いつもなら黄色い目先や足指が必ずとっていいほど婚姻色の赤みを帯びている。
- また、営巣の位置は、他のサギのそれよりも低い位置で行っていることが多い。
- 市内に繁殖地があるためか、報告件数でも上位3番目である。しかし、各地で減少傾向にあるという報告もあり、注意して記録を残しておく必要がある。

(山部 直喜)



# 15 オオバン (クイナのなかま)

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい かい  
調査報告件数 (調査期間 第2・3回)

第1回	第2回	第3回	第4回	合計
H29. 7~9月	H30. 10~12月	R2. 1~3月	R2. 4~6月	
	96	170		266

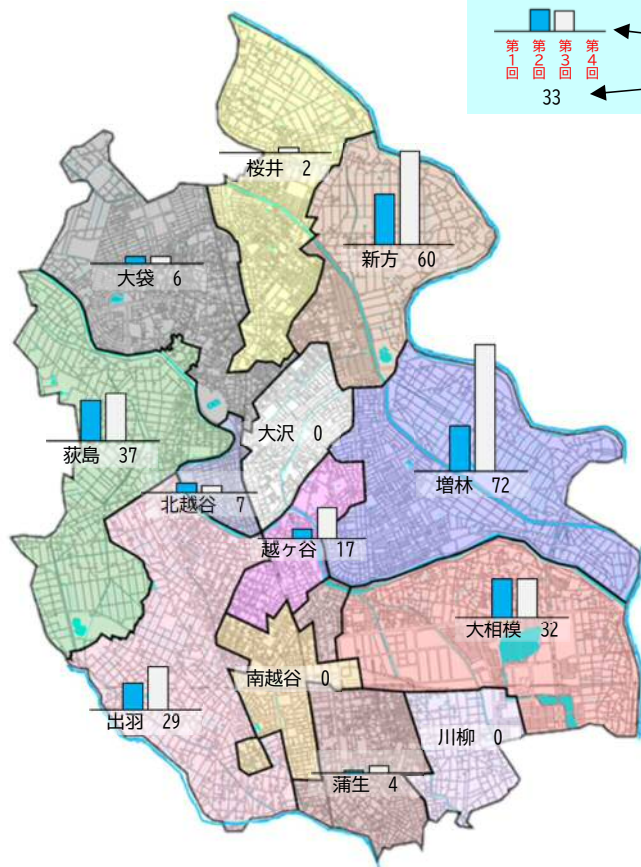
きしょうしゆ かんきょう へんか などによって 数が 少なくなっている いきもの  
 鳴き声 キョンキョン  
 おおきさ 39 cm  
 特徴 留鳥 (1年中日本にいます)  
 からだは 黒く、くちばしと 額が 白くなっています

■埼玉県レッドリスト 準絶滅危惧1型 (NT1)

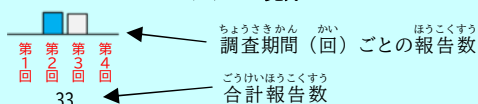
ちょうさいん ほうこくしゃしん  
調査員からの報告写真



## 地区別・環境別報告数



### グラフの見方



- 越谷では、冬季以外に観察されることはまずなく、冬鳥といってよい。
- 真っ黒で数十羽の単位で動いている姿はよく目立つ。大吉調節池や大相模調節池、そして平和橋からしらこぼと橋の間の中土手等で、陸に上がって採食している姿は多くの人が目にするところである。
- かつて県南東部では希少種であった。越谷市で初めて記録されたのは昭和の終わりごろである。場所は健康福祉村の池である (『平成元年度『越谷の自然、』越谷の自然を調べる会』、1989年12月号『しらこぼと』日本野鳥の会埼玉県支部)。

(山部 直喜)

## 16 ユリカモメ (カモメのなかま)

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい かい  
調査報告件数 (調査期間 第2・3回)

第1回 H29.7~9月	第2回 H30.10~12月	第3回 R2.1~3月	第4回 R2.4~6月	合計
	22	28		50

なごえ ギューイ、ギューイ  
鳴き声

おお 50 cm  
大きさ

とく ちゅう ふゆどり  
特徴 冬鳥

くちばしと足が赤く、全体に白っぽい体をしています

### ちょうさいん ほうこくしゃしん 調査員からの報告写真

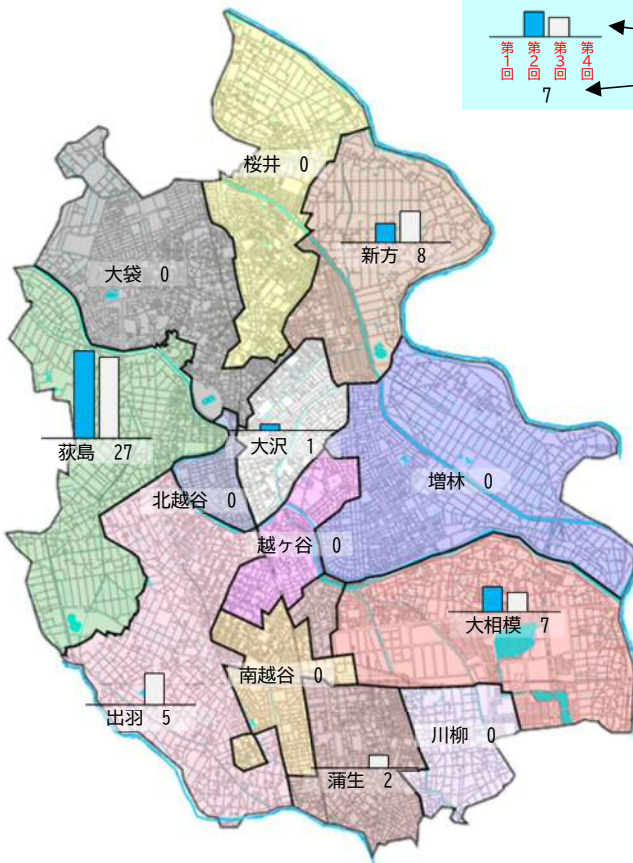


### ちくべつ かんきょうべつほうこくすう 地区別・環境別報告数

みかた ほうこくすう すく なが ふうじょう ばい  
グラフの見方 ※報告数が少ないため、グラフを長くしました(通常の5倍)

ちゅうさきかん かい ほうこくすう  
調査期間(回)ごとの報告数

ごうけいほうこくすう  
合計報告数



- 1990年代まで元荒川、吉利根川、中川、健康福祉村の池などでは、人が投げるパンなどによく集まってきたものだった。
- しかし、全国的に野鳥への給餌の自粛が進むようになり、以来少しずつ減少に転じ、本調査期間中は、大吉調節池、健康福祉村の池、大相模調節池で数羽から10羽ほどが観察されていたに留まる。筆者の観察では、第3回の調査中に1度だけ大相模調節池で100羽程度の群れが塹をとっていたのを目撃したことがあった。
- 減少はさらに続いており、2021年度の冬季には、筆者はその姿を市内で確認していない。

(山部 直喜)

# 17 コアジサシ (カモメのなかま)

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい かい  
調査報告件数 (調査期間 第1・4回)

第1回	第2回	第3回	第4回	合計
H29.7~9月	H30.10~12月	R2.1~3月	R2.4~6月	
19			30	49

きしょうしゆ かんきょう へんか などによって 数が 少なくなっている いきもの  
 鳴き声 キリッ、キリッ  
 おおきさ 28 cm  
 特徴 夏鳥 すいめんじょうくう を飛び回り、ホバリングやダイビングをして 魚を捕まえます

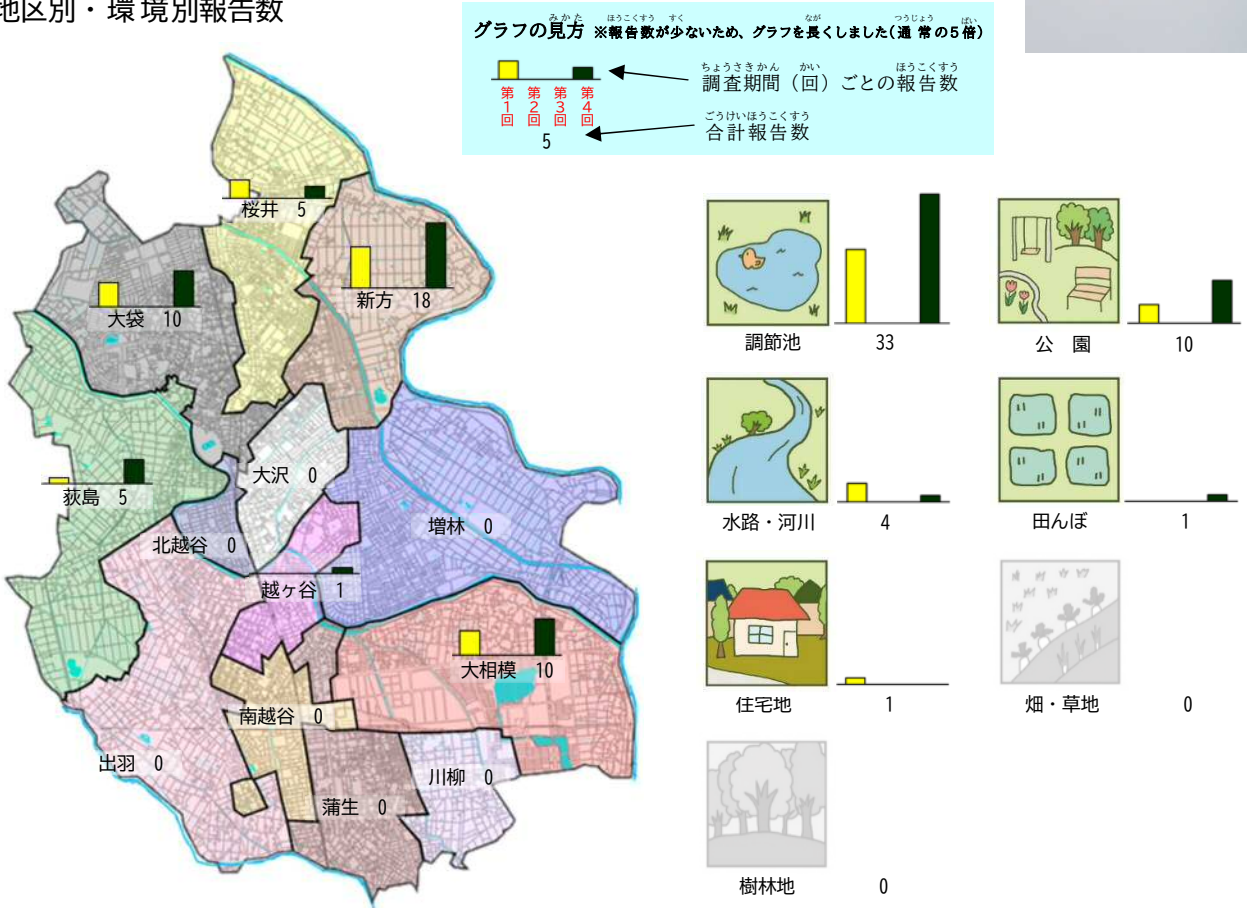
■埼玉県レッドリスト 絶滅危惧ⅠA類 (CR)

■環境省レッドリスト 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
調査員からの報告写真



ちくべつ かんきょうべつ ほうこくすう  
地区別・環境別報告数



- 越谷では代表的な夏鳥の一つである。大きな河川や調節池の上を飛び回り、採食の際は空中で停止し狙いを定め、ダイビングして小魚を獲っている。
- 市内での繁殖地は、砂利や小石が広がる大きな工事現場だ。だから、工事が終われば毎年のように繁殖地が変わっている。繁殖期に大きな工事が無い年は、その姿を確認できなかったこともある。
- 捕らえた小魚を運ぶ方向で繁殖地を見つけたことがある。そこは1,000m以上も離れた所にあり、フェンスの隙間からのぞき込んで繁殖を確認できた。しかし、次の年には大きな倉庫が完成していた。

(山部 直喜)

# 18 カワセミ

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい かいすべ  
**調査報告件数(調査期間 第1~4回全て)**

第1回	第2回	第3回	第4回	合計
H29. 7~9月	H30. 10~12月	R2. 1~3月	R2. 4~6月	
57	44	56	6	163

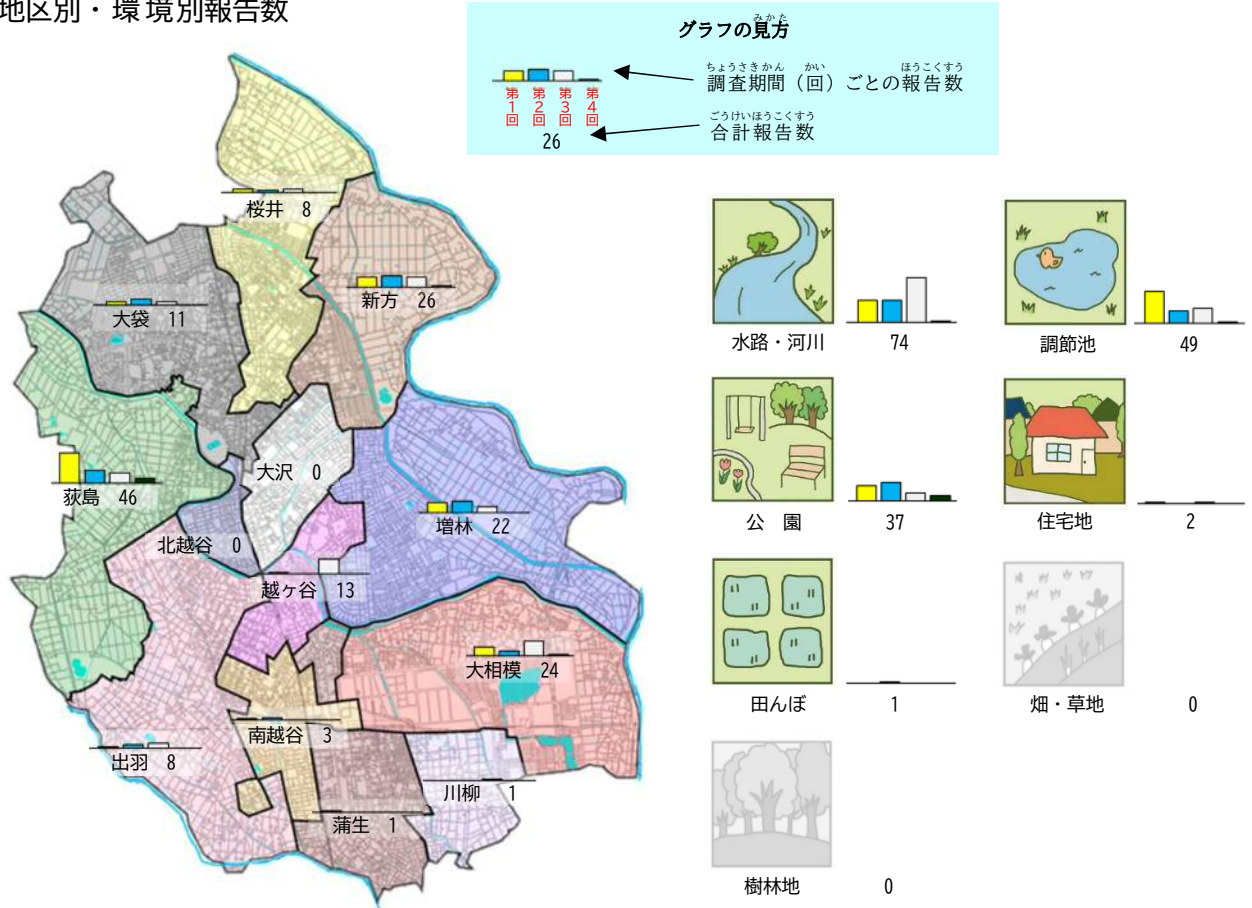
**鳴き声** チー  
**大きさ** 17 cm  
**特徴** 留鳥 (1年中日本にいます)  
 くちばしが長く、背中はコバルトブルー、翼と頭は緑色、胸から腹はだいたい色です

■埼玉県レッドリスト 地帯別危惧 (RT)

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
 調査員からの報告写真



ちくべつ かんきょうべつほうごうすう  
 地区別・環境別報告数



- 野鳥の中で人気ナンバー1。初めて見たときは、「こんなきれいな鳥が越谷にもいるんだ！」と感動する人が多い。何しろ翡翠の字をあててカワセミと読むほどだからだ。
- この美しさに魅せられて、カメラを始める人も多い。総合体育館前の池、しらこぼと橋近くの赤水門、健康福祉村の池等で望遠レンズが並んでいたら、必ずと言っていいほどその先にはカワセミがいる。撮影が一段落したら「何を撮っているのですか」と尋ねてみよう。きっと今写した作品を見せてくれるはずだ。
- 生息地を広げており、田んぼや住宅地の水路でもその姿を見かけることがある。

(山部 直喜)

## 19 コゲラ (キツツキのなかま)

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい かいすべ  
 調査報告件数(調査期間 第1~4回全て)

第1回 H29.7~9月	第2回 H30.10~12月	第3回 R2.1~3月	第4回 R2.4~6月	合計
27	47	26	8	108

なごえ ギーッ、ギーッ  
 鳴き声

おおきさ 15 cm  
 大きさ

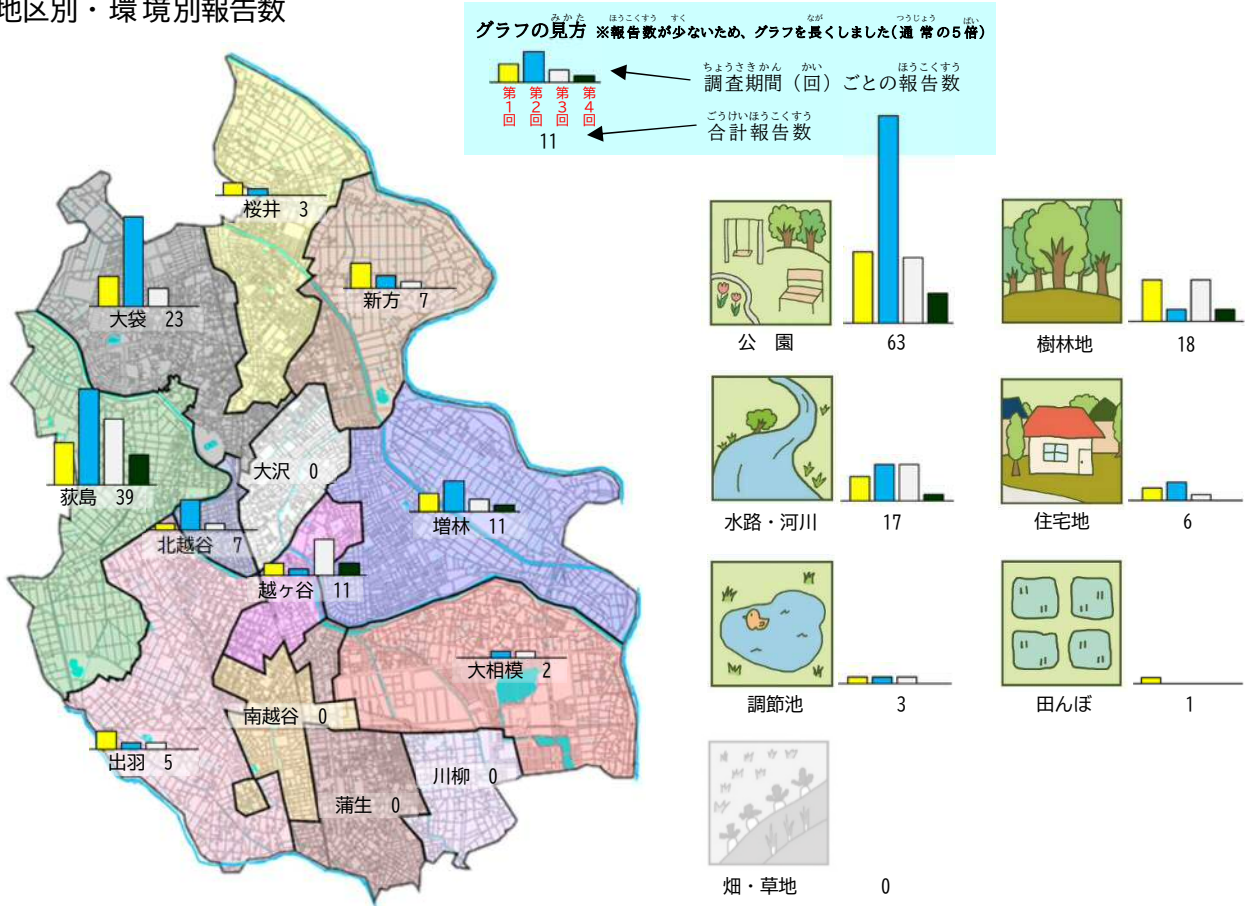
とく りゅうちょう ねんじゅうにほん  
 特徴 留鳥 (1年中日本にいます)

からだ かっしよく せなか つばき しろ よこ  
 体は褐色で背中と翼に白い横じまがあります

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
 調査員からの報告写真



ちくべつ かんきょうべつほうこくすう  
 地区別・環境別報告数



- コゲラを漢字で書くと小啄木鳥。日本のキツツキ(啄木鳥)の中では最も小さい。しかも地味。樹をつく音も小さい。森林性の野鳥でもある。だから、木の葉が生い茂っている時期は目立たない。樹の葉が落ちる時季の第2回の報告件数が多いのも納得できる。
- 報告件数は108で、前回平成24年度の調査と比べると約半分だが、外出規制のコロナ禍にあっては多い報告数と言える。
- また、カワセミと同様に都市部への進出が続いており、住宅地や公園でも見かけるようになった。今回の調査では、特に公園での報告が目立つ。

(山部 直喜)

# 20 モズ

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい かいすべ  
調査報告件数(調査期間 第1~4回全て)

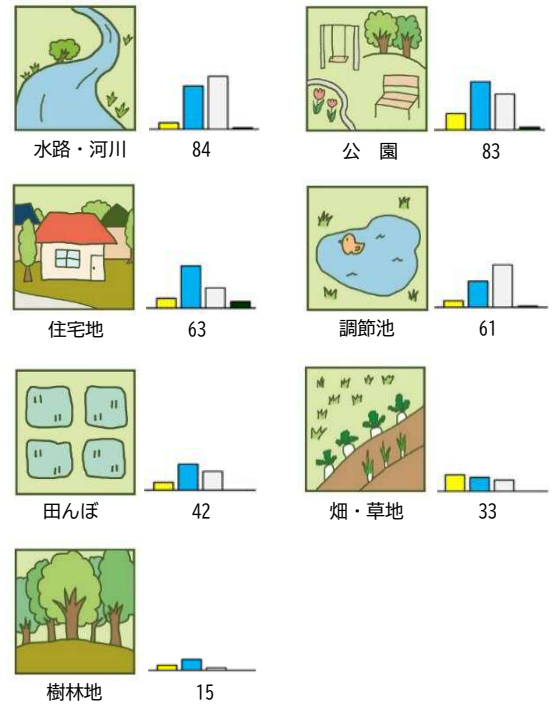
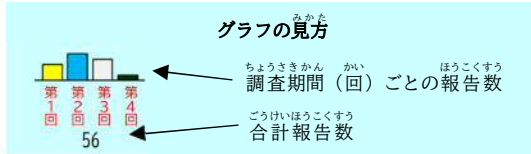
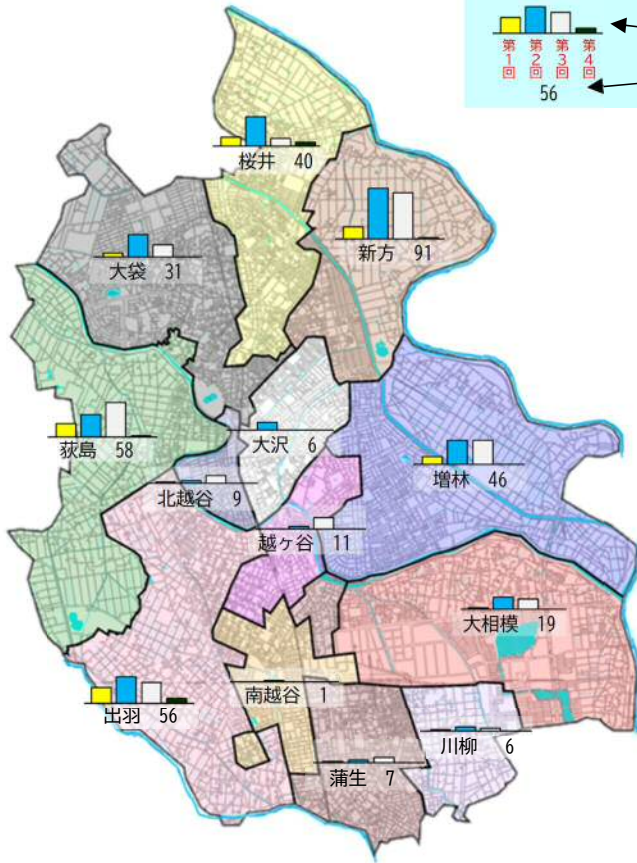
第1回 H29.7~9月	第2回 H30.10~12月	第3回 R2.1~3月	第4回 R2.4~6月	合計
54	170	148	9	381

なごえ キーキーまたはキョンキョン  
おお 大きさ 15 cm  
とく 特徴 留鳥(1年中日本にいます)  
むし 虫やトカゲなどの獲物を枝などに突き刺しておく  
「はやにえ」という習性があります

## ちょうさいん ほうこくしゃしん 調査員からの報告写真



## ちくべつ かんきょうべつほうこくすう 地区別・環境別報告数



- 以前は、夏季の越谷でその姿を見ることはまずなかった。多くの個体が高原などに移動し、秋の運動会のころになって戻ってくると思われていた。実際、秋になると電線や高いところでキキキキキと鋭く高鳴きし、よく目立つので確認しやすい。第2回の報告が最も多いのもそのためだ。
- しかし、今回の調査期間中は、年間を通して生息を確認する機会が増えたように感じている。このことは、報告件数が前回平成24年度の調査の4/5程度ではあるが、コロナ禍にあっての報告件数であることを考え合わせると、モズは増えていることを示唆しているかもしれない。

(山部 直喜)

## 21 シジュウカラ

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい かいすべ  
 調査報告件数(調査期間 第1~4回全て)

第1回 H29. 7~9月	第2回 H30. 10~12月	第3回 R2. 1~3月	第4回 R2. 4~6月	合計
131	151	161	38	481

な 鳴き声 ツーピーツーピーまたはツーチー、ジुकジुक

おお 大きさ 14.5 cm

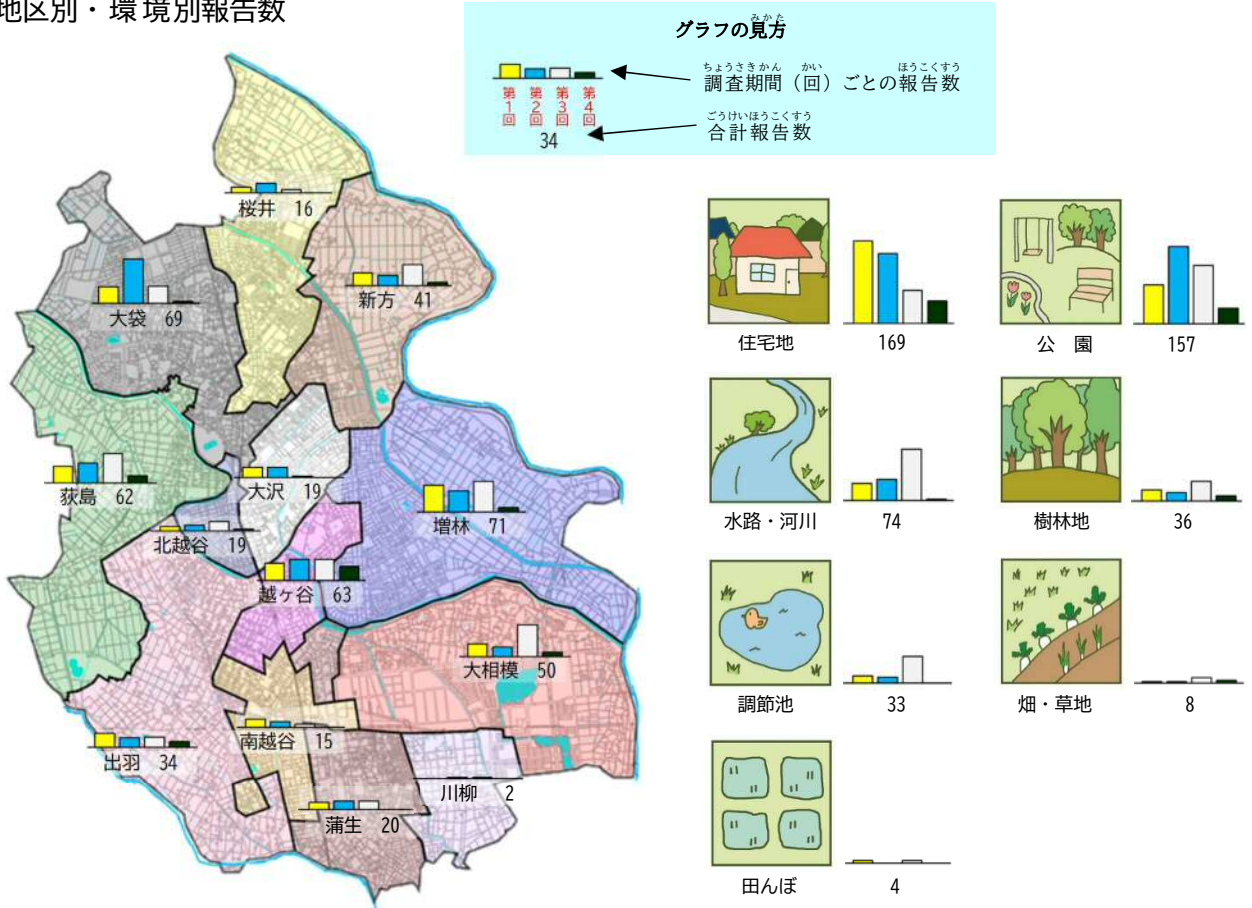
とく 特徴 留鳥 (1年中日本にいます)

ほほのあたりが白く、胸から腹までネクタイのような黒い線  
 があります

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
 調査員からの報告写真



ちくべつ かんきょうべつほうこくすう  
 地区別・環境別報告数



- 報告件数481はツバメと並んで第2位である。越谷でシジュウカラの繁殖を初めて確認したのは、1987年、昭和62年のことである(越谷市環境部環境保全課『ふるさといきもの調査資料編』平成10年)。
- それが今では、シラコバトとは反対に繁殖を広げ、森林性の鳥とはいえ住宅地でもよく確認されるようになった。すっかり身近な鳥となって、多くの人から識別されるようにまでなった証左だ。
- 巣箱をよく利用する。入ってもらうにはコツがいる。まず、巣穴の直径は27~28mm。それより大きいとスズメが入る。高さは地上から3m弱の幹に取り付ける。猫対策としてその位置まで横枝がないこと。巣穴は南東の方角に向け、少しかしぐのがよい。巣箱を掛ける時期は12~3月がよい。

(山部 直喜)

## 22 ヒバリ

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい かい  
調査報告件数 (調査期間 第3・4回)

第1回 H29.7~9月	第2回 H30.10~12月	第3回 R2.1~3月	第4回 R2.4~6月	合計
		15	20	35

なごえ ビルルッまたはビュルッ  
鳴き声

おお 大きさ 17 cm

とく ちよう りゆうちよう (ねんじゅうにほん)  
特徴 留鳥 (1年中日本にいます)

はる なつ そらたか  
春から夏にかけて空高くまいあがり、飛びながらさえずり  
ます

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
調査員からの報告写真



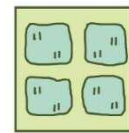
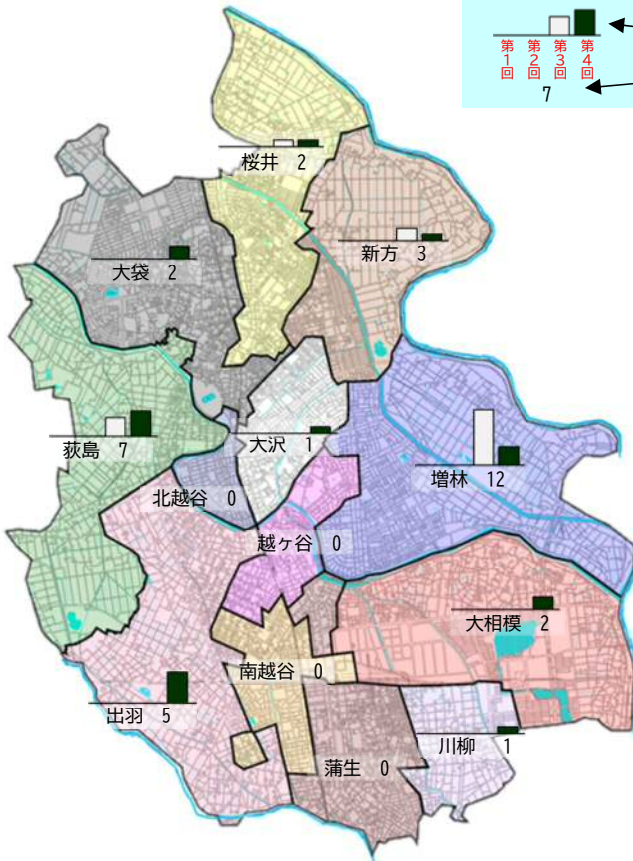
ちくべつ かんきょうべつほうこくすう  
地区別・環境別報告数

みかた ほうこくすう すく なが つうじょう ばい  
グラフの見方 ※報告数が少ないため、グラフを長くしました(通常の5倍)

ちょうさきかん かい ほうこくすう  
調査期間(回) ごとの報告数

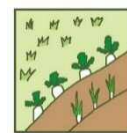
ごうけいほうこくすう  
合計報告数

7



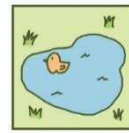
田んぼ

17



畑・草地

10



調節池

4



水路・河川

2



公園

2



樹林地

0



住宅地

0

- ・実は市内でも一年中、草原や河原、畑、田んぼで生息している。特に、冬の田んぼを歩くとビュルッ、ビュルッと低く鳴きながら集団で飛び立つ。姿や色も地味なので周りに同化してしまい目立たない。名前は有名なのに、報告件数が少ないのはそのためと思われる。
- ・春めいた日には、オスは空高く舞い上がり、空中停止してさえずり続ける。そのさえずりで人々はヒバリと気づく。雲雀(ひばり)と書いて、昔より親しまれているのはこのためか。しかし、地上や杭、草の先でもさえずることがある。

(山部 直喜)



## 23 ツバメ (ツバメの巣)

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい かい 調査報告件数 (調査期間 第1・3・4回)				
第1回 H29. 7~9月	第2回 H30. 10~12月	第3回 R2. 1~3月	第4回 R2. 4~6月	合計
270		27	109	406

なごえ ピチュピチチュピチュピリリ

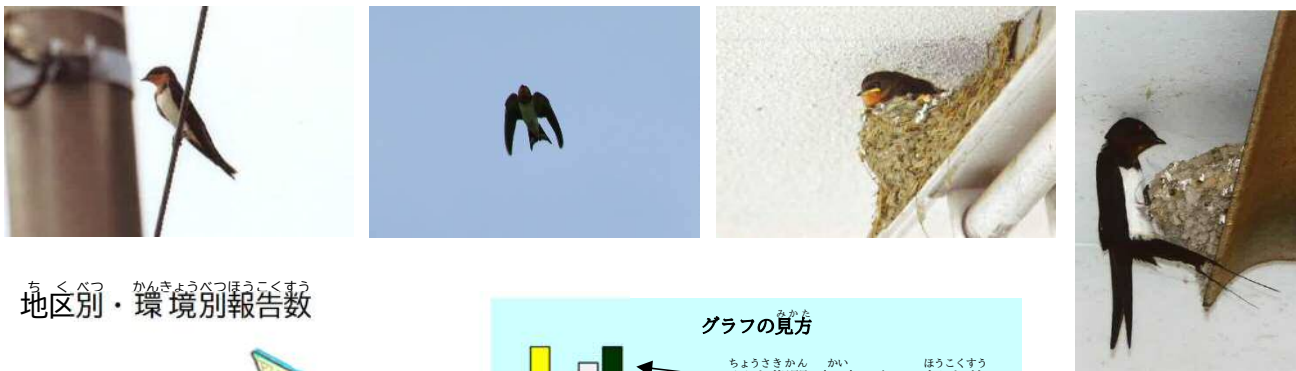
おお 大きさ 17 cm

とく ちよう なつどり  
特徴 夏鳥

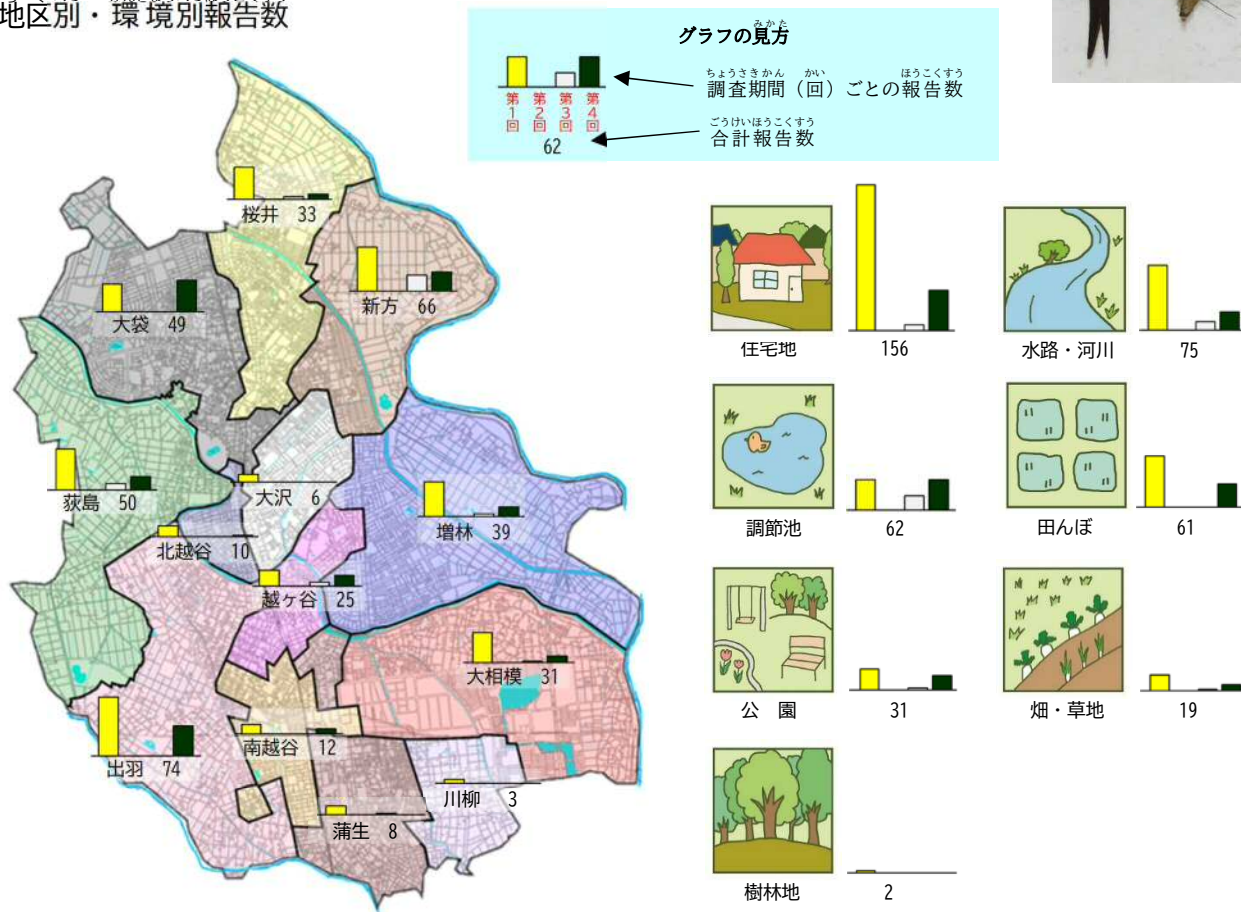
あたま せなか こくしよく お ほん わ  
頭と背中が黒色で、尾は2本に分かれています

す おわんがた つち か くき つく  
巣はおわん型で、土と枯れ草で作られています

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
調査員からの報告写真



ちくべつ かんきょうべつほうこくすう  
地区別・環境別報告数



- ・身近で最も代表的な夏鳥である。越谷には、3月の終わりごろに渡って来ている。渡って来た当初は、大吉調節池や健康福祉村の池、そして大相模調節池などの開けた水辺で確認されることが多い。
- ・生息数は全国的に減少傾向にあると言われている。今回の本報告件数406を、これまでの「越谷市ふるさといきもの調査」と比較すると、越谷市でも同じ傾向を示していることが分かる。
- ・筆者は、蒲生地区の商店街で5カ所の巣を確認した。いずれも玄関のひさしの内側に作っており、表からは見えない位置にあった。天敵のカラス対策である。

(山部 直喜)

## 24 メジロ

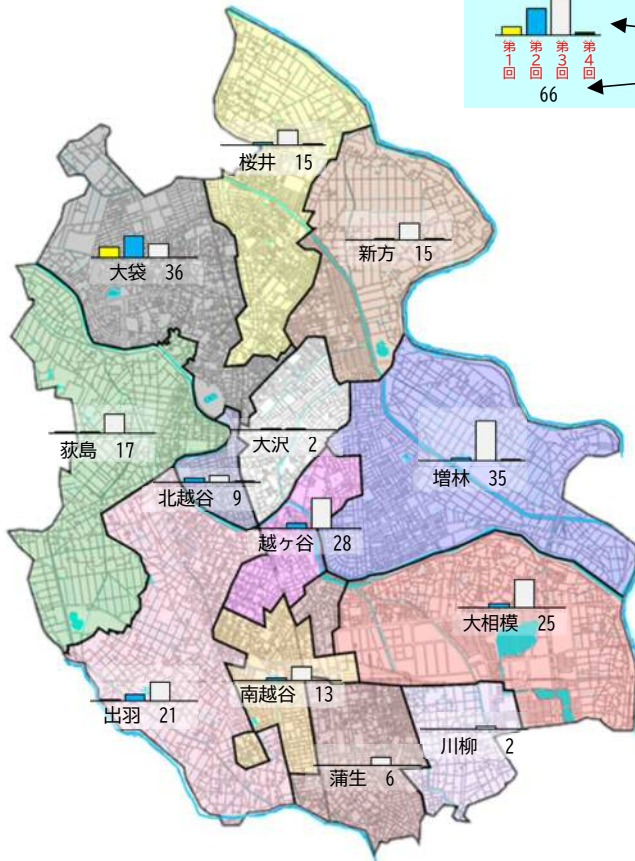
調査報告件数(調査期間 第1~4回全て)				
第1回 H29.7~9月	第2回 H30.10~12月	第3回 R2.1~3月	第4回 R2.4~6月	合計
10	41	169	4	224

**鳴き声** チーチーまたはチュルチュルチリッツルツル  
**大きさ** 11.5 cm  
**特徴** 留鳥 (1年中日本にいます)  
 黄緑色のちょっと太めの体形で、目のまわりが白くなっています

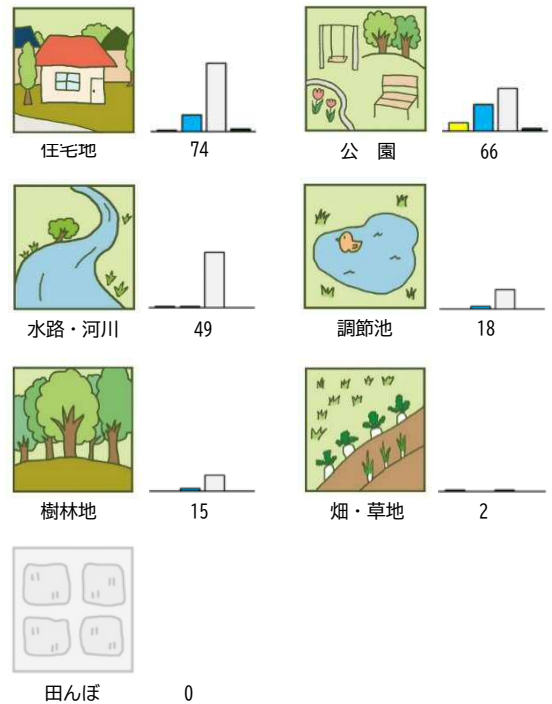
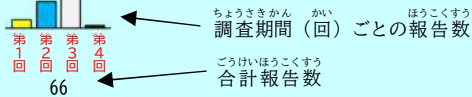
### 調査員からの報告写真



### 地区別・環境別報告数



#### グラフの見方



- 木の実や虫も食べるが甘いものが好きである。冬季にミカンの輪切りやジュースを用意するとすぐにやって来る。第3回の調査期間中に報告が多いのは、その時期に咲くツバキやウメの花の蜜を吸いに来る姿が目立つからである。
- ウメの蜜を吸っているとウグイスと間違われるが、ウグイスは花の蜜は吸わない。また、メジロの緑色を鶯色と混同されている場合がある。また、日本の花札には、「梅に鶯」という札があるが、筆者にはどう見ても「梅に目白(メジロ)」に思えて仕方がない。図鑑でメジロとウグイスを見比べると興味深い。

(山部 直喜)

# 25 オオヨシキリ (ヨシキリのなかま)

ちょうさほうこくけんすう		ちょうさきかん		だい	かい
調査報告件数 (調査期間 第1・4回)					
第1回	第2回	第3回	第4回	合計	
H29.7~9月	H30.10~12月	R2.1~3月	R2.4~6月		
28			32	60	

なごえ ギョギョシ、ギョギョシ  
おお 大きさ 18.5 cm  
とく 特徴 夏鳥

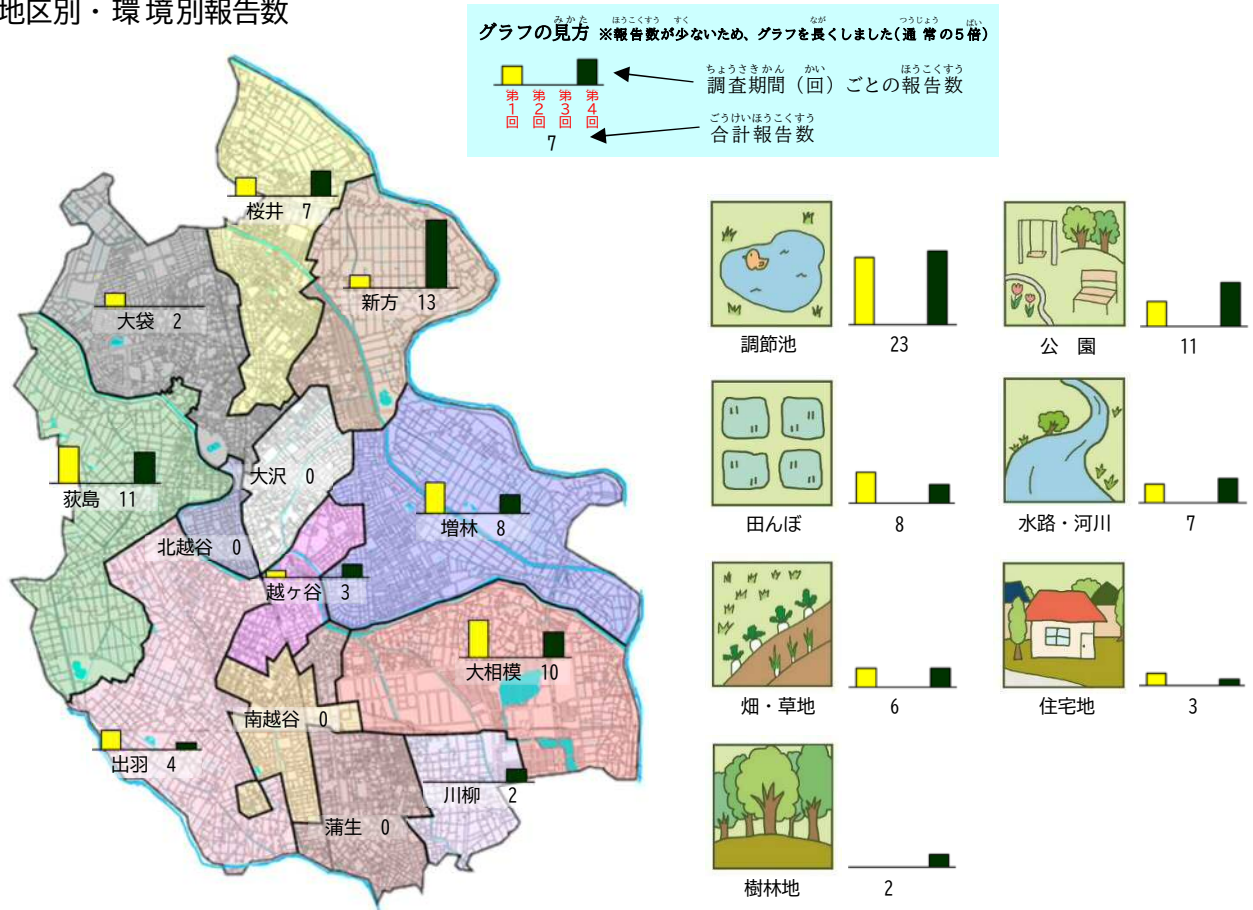
ズメより大きく、全身が薄い茶色で目立ちません

■埼玉県レッドリスト 準絶滅危惧2型 (NT2)

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
調査員からの報告写真



ちくべつ かんきょうべつほうこくすう  
地区別・環境別報告数



- 代表的な夏鳥である。越谷には4月ごろ渡来してヨシ原で繁殖する。従って、ヨシが広く残る休耕田や大吉調節池、県民健康福祉村の池、大相模調節池等で観察されている。ヨシの先に止まり、赤い口を天に向けて懸命にギョギョシ、ギョギョシと鳴きつづける姿は水郷越谷にふさわしい。一晩中鳴いている時もある。
- かつて、埼玉地区には、『よしきり』という文集があった。各小学校から寄せられた優れた作文や詩を掲載していた。この『よしきり』はオオヨシキリのことである。昔から、この鳥は埼玉地区全体の初夏の風物詩だったに違いない。

(山部 直喜)

## 26 ツグミ (ヒタキのなかま)

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい かい  
調査報告件数 (調査期間 第2・3回)

第1回 H29.7~9月	第2回 H30.10~12月	第3回 R2.1~3月	第4回 R2.4~6月	合計
	19	352		371

なごえ 鳴き声 クエツ、クエツまたはキィキィー

おお 大きさ 24 cm

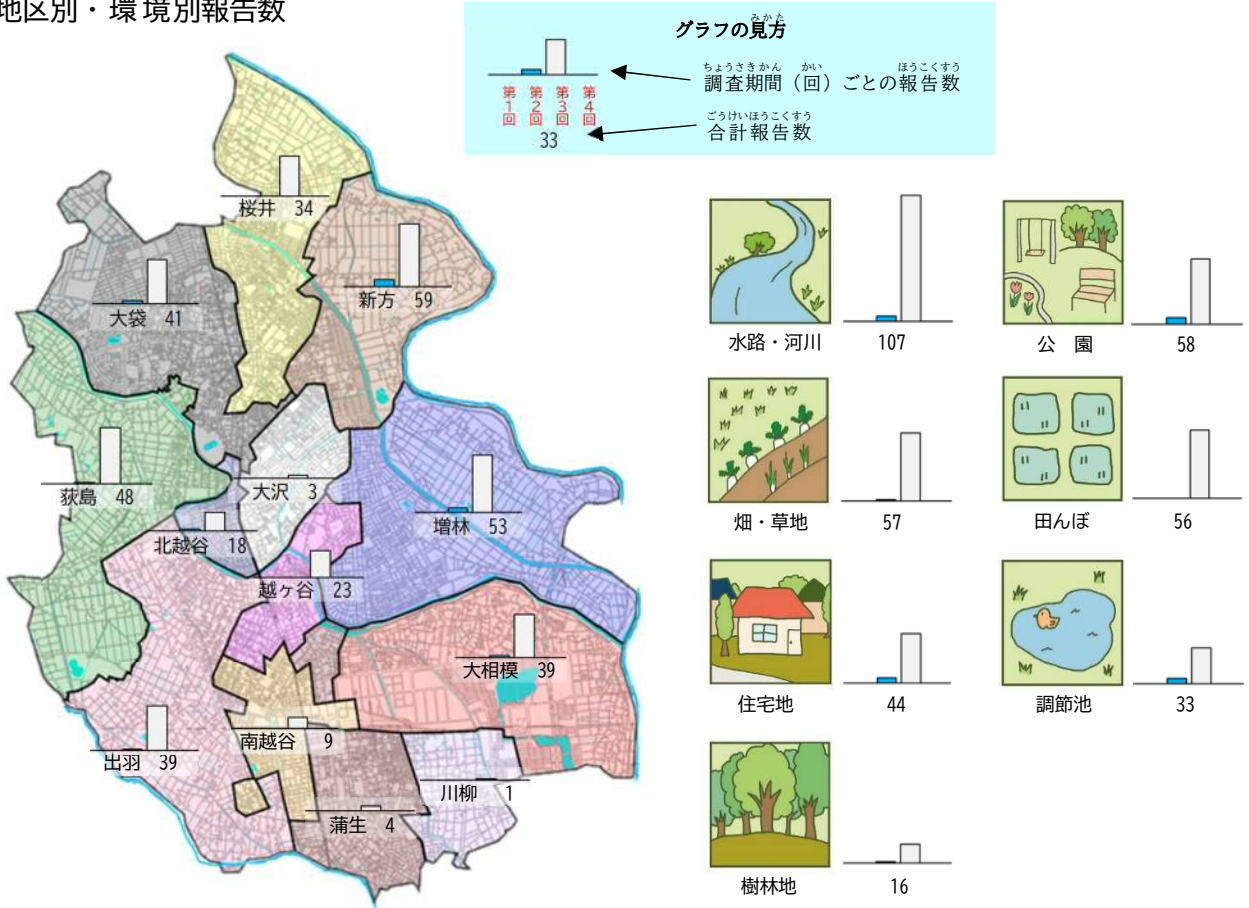
とく 特徴 冬鳥

いろ クリーム色のまゆ、胸に黒いポツポツがあり、つばきは栗色です

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
調査員からの報告写真



ちくべつ かんきょうべつほうこくすう  
地区別・環境別報告数



- ・越谷には12月ごろに渡ってくる冬鳥である。2月には、それぞれ市内のどこにでもいる。このことは、第3回調査の中で他の野鳥と比べても、群を抜いて報告件数が多いことからそれがよくわかる。
- ・地上で行動することが多く、頭を下げてツツツと急ぎ足で歩き、胸をそらして急停止する動きを繰り返す。ある探鳥会でそれを見た女子高生が「アッ、達磨さんが転んだをやっている」。「うまいこと言うなあ」と一同感心。
- ・冬鳥とはいえ滞在期間は結構長く、越谷では5月の連休中にも見ることもある。

(山部 直喜)

# 27 モンシロチョウ (シロチョウのなかま)

ちょうさほうこくけんすう		ちょうさきかん		だい	かい
調査報告件数		(調査期間)		第1・2・4回	
第1回	第2回	第3回	第4回	合計	
H29. 7~9月	H30. 10~12月	R2. 1~3月	R2. 4~6月		
318	163		187	668	

おお  
大きさ 2~3 cm

とく  
特 徴 成虫は3月から11月に見られます

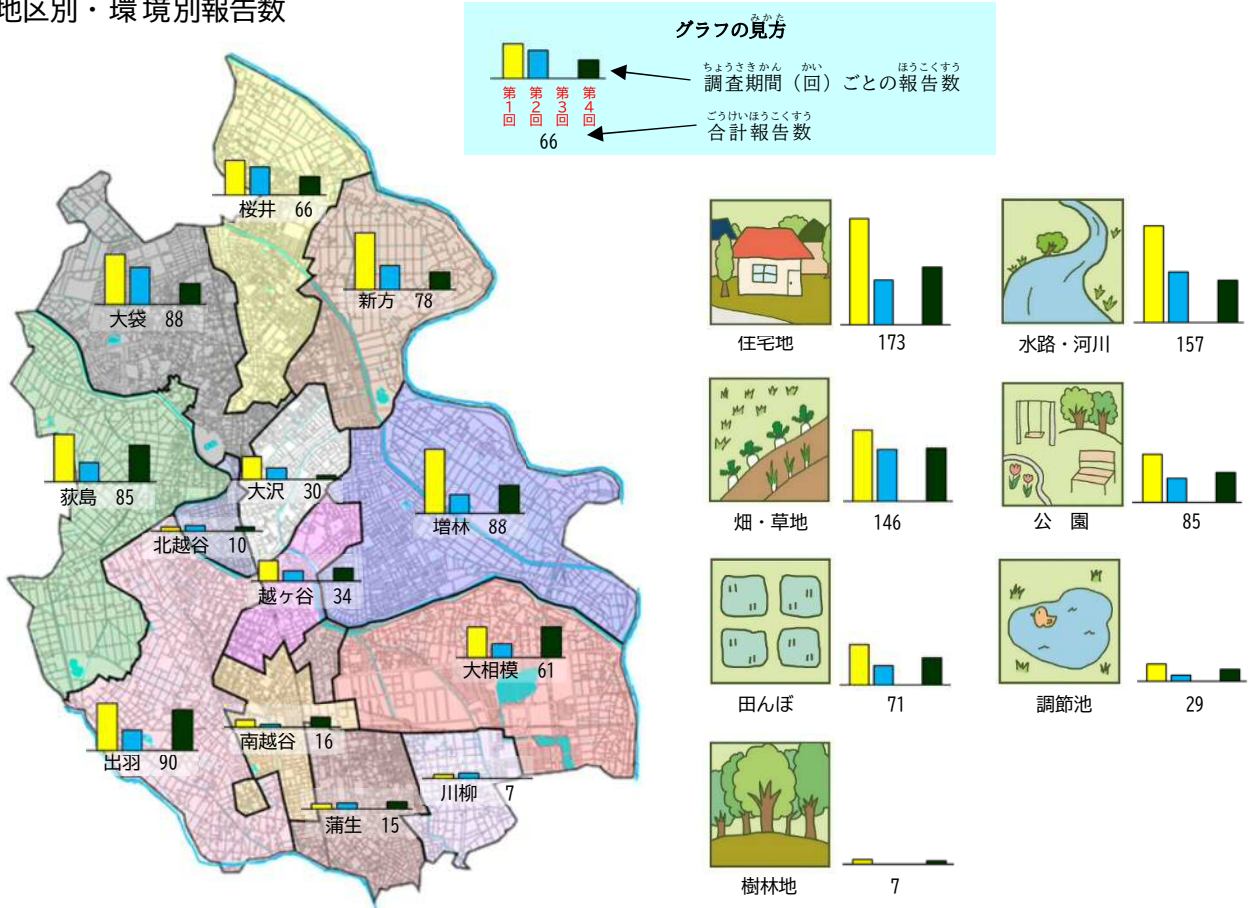
はねがしろく、くろいスジはあまりめだちません

しゅ  
主として日当たりのよい耕作地周辺に見られます

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
調査員からの報告写真



ちくべつ かんきょうべつほうこくすう  
地区別・環境別報告数



- 住宅地、水路・河川、畑・草地に多いことがわかる。これらの地域には、幼虫の食べ物である、アブラナ科植物の栽培種またはその野生化した植物が多いことが考えられる。
- 都市化している市の中心部と南部は少なく、周辺の農村部に多い。畑地や、河川敷にアブラナ科植物が多いことが考えられる。
- 冬を除いて、個体数が多い。特に春に多いのは、この季節よく目立つからと思われる。越谷市は田園が残っていることを示している。夏に少ないのは、暑さにあまり強い特徴による。
- アブラナ科植物の周りや花の周りをひらひらと飛ぶ。日本で一番おなじみな蝶である。

(内山 裕司)

# 28 スジグロシロチョウ (シロチョウのなかま)

ちょうさほうこくけんすう		ちょうさきかん		だい		かい	
調査報告件数 (調査期間 第1・2・4回)							
第1回	第2回	第3回	第4回	合計			
H29. 7~9月	H30. 10~12月	R2. 1~3月	R2. 4~6月				
11	6		5	22			

おお 大きさ 2.4~3.5 cm  
 とく 特徴 成虫は4月から10月に見られます  
 モンシロチョウと似ていますが、はねに黒いスジがあり、ひとまわり大きいです

## ちょうさいん ほうこくしゃしん 調査員からの報告写真

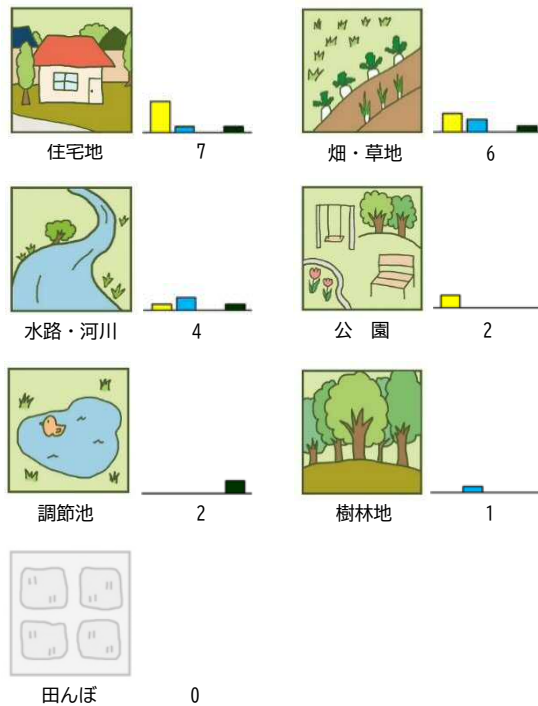
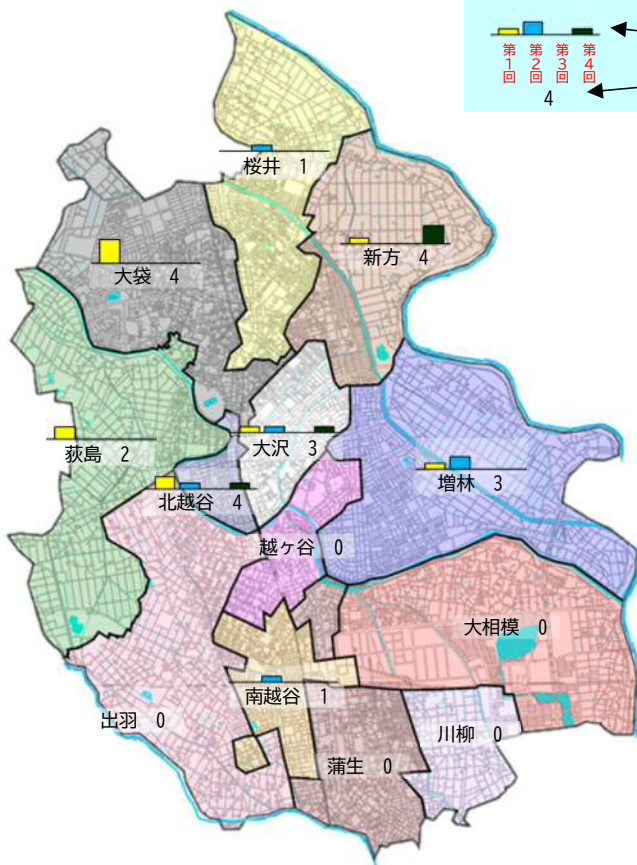
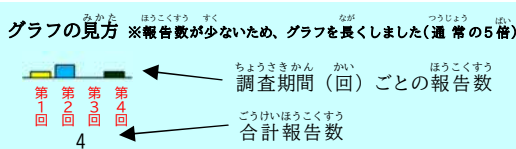


※「スジグロシロチョウではないか」と寄せられた写真が数点ありましたが、確認した結果、全てモンシロチョウでした。



(参考写真)

## ちくべつ かんきょうべつほうごうすう 地区別・環境別報告数



- 住宅地、畑・草地で少し見られ、田んぼを除いた環境でも少し見られた。幼虫はイヌガラシなど野生のアブラナ科植物を食べる。
  - 市の北部に細々と生息しているようである。これらの地域には、人があまり手を加えない環境が残っていると考えられる。
  - 生息数が少ないことから、今後、益々減少することが考えられる。
  - 樹林地の周りや、樹木の多い公園や河川敷を丁寧に探すと見つけれられる。
- ※ スジグロシロチョウはモンシロチョウとの区別が難しいので、写真に撮って調べることを勧めます。  
 今回の報告にもモンシロチョウと混同しているのもあると思われる。(内山 裕司)

## 29 アオスジアゲハ (アゲハチョウのなかま)

ちょうさほうこくけんすう		ちょうさきかん		だい	かい
調査報告件数 (調査期間 第1・4回)					
第1回	第2回	第3回	第4回	合計	
H29.7~9月	H30.10~12月	R2.1~3月	R2.4~6月		
349			30	379	

おお  
大きさ 3.2~4.5 cm

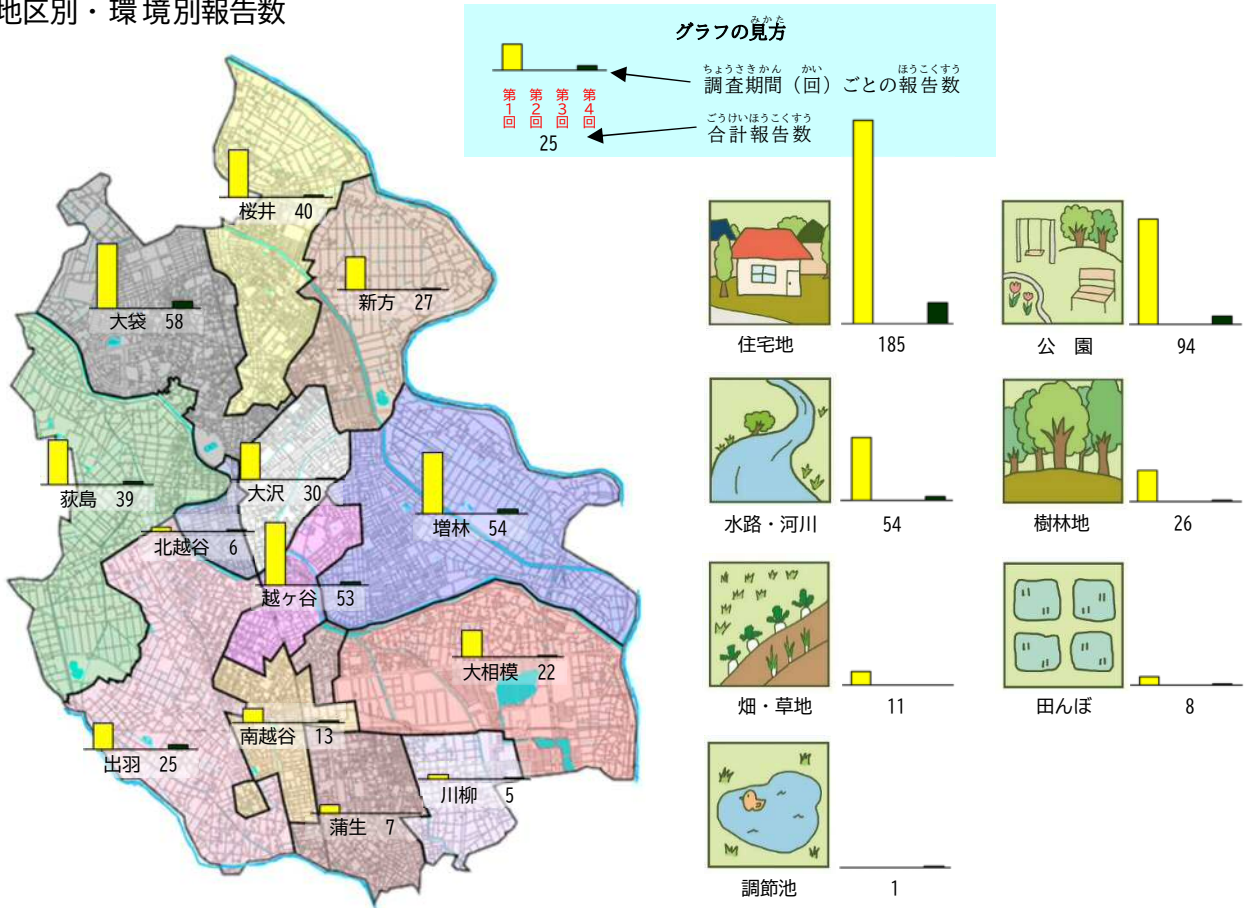
とく  
特徴 成虫は4月から9月に見られます

せいちゆう  
成虫は年3~4回発生し、幼虫はクスノキ・タブノキ・ヤブニッケイなどの葉を食べ、蛹で冬を越します

### ちょうさいん 調査員からの報告写真



### ちくべつ 地区別・環境別報告数



- 住宅地や公園が圧倒的に多い。街路樹や公園に幼虫の食べるクスノキが多く植えられていることによると思われる。
- 越ヶ谷地区や大沢地区などの中心部からも報告が多い。緑化にクスノキが利用されていることがわかる。
- 市内全域から報告があり、しかも多い。クスノキが切られることはあまりないので、今後も増えると予想される。
- 飛ぶのが速いが、羽の青いラインで目立つ。クスノキの周りや、成虫の好むヤブカラシの花に集まっていることが多い。

(内山 裕司)

# 30 ナガサキアゲハ (アゲハチョウのなかま)

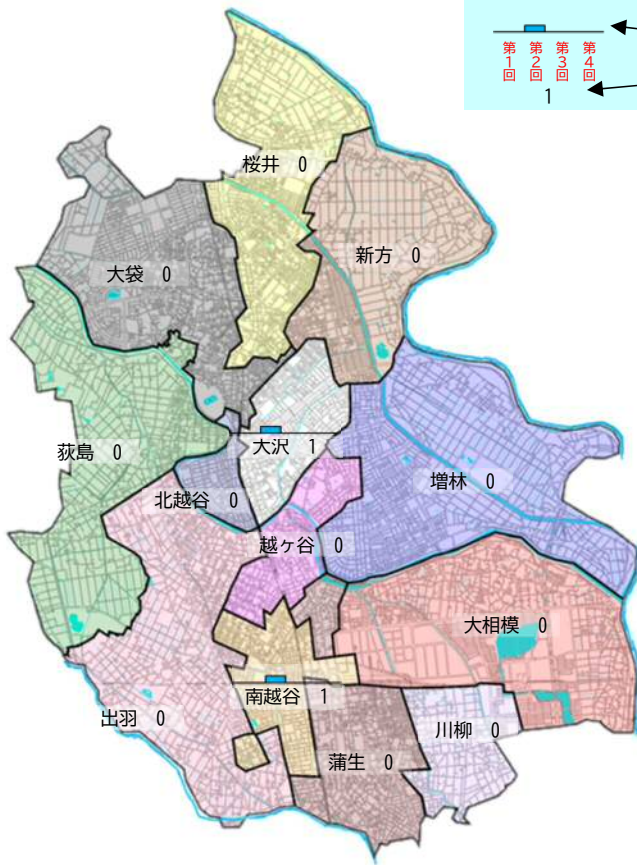
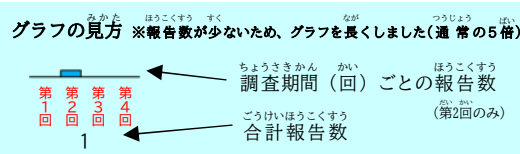
調査報告件数 (調査期間 第2回)				
第1回	第2回	第3回	第4回	合計
H29. 7~9月	H30. 10~12月	R2. 1~3月	R2. 4~6月	
	2			2

温暖化指標 越谷でも見られるようになった暖かい地域のいきもの  
 大きさ 11~12.5 cm  
 特徴 成虫は5月から8月に見られます  
 クロアゲハと似ていますが、はねのつけ根に赤い斑紋があります

## 調査員からの報告写真



## 地区別・環境別報告数



- ・少ないが、住宅地から報告されている。幼虫が庭に植えられたミカン類の葉を好んで食べるので、都市部でも見られたのだと思われる。南方系の種であるが、近年北上し関東でも増えている。
- ・自然環境というより、ミカンの木の有りなしが大きく関わる。
- ・現在は少ないが、今後更に増えると予想される。
- ・クロアゲハに似ているが、少し大きく、羽の根元が赤い。尾状突起がない。雌は後翅に白色の紋があるので目立つ。林の周りなど、やや暗いところを飛ぶ。ヤブカラシの花に集まる。

(内山 裕司)



# 31 ツマグロヒョウモン (タテハチョウのなかま)

調査報告件数 (調査期間 第2回)		だい かい		合計
第1回 H29. 7~9月	第2回 H30. 10~12月	第3回 R2. 1~3月	第4回 R2. 4~6月	
	98			98

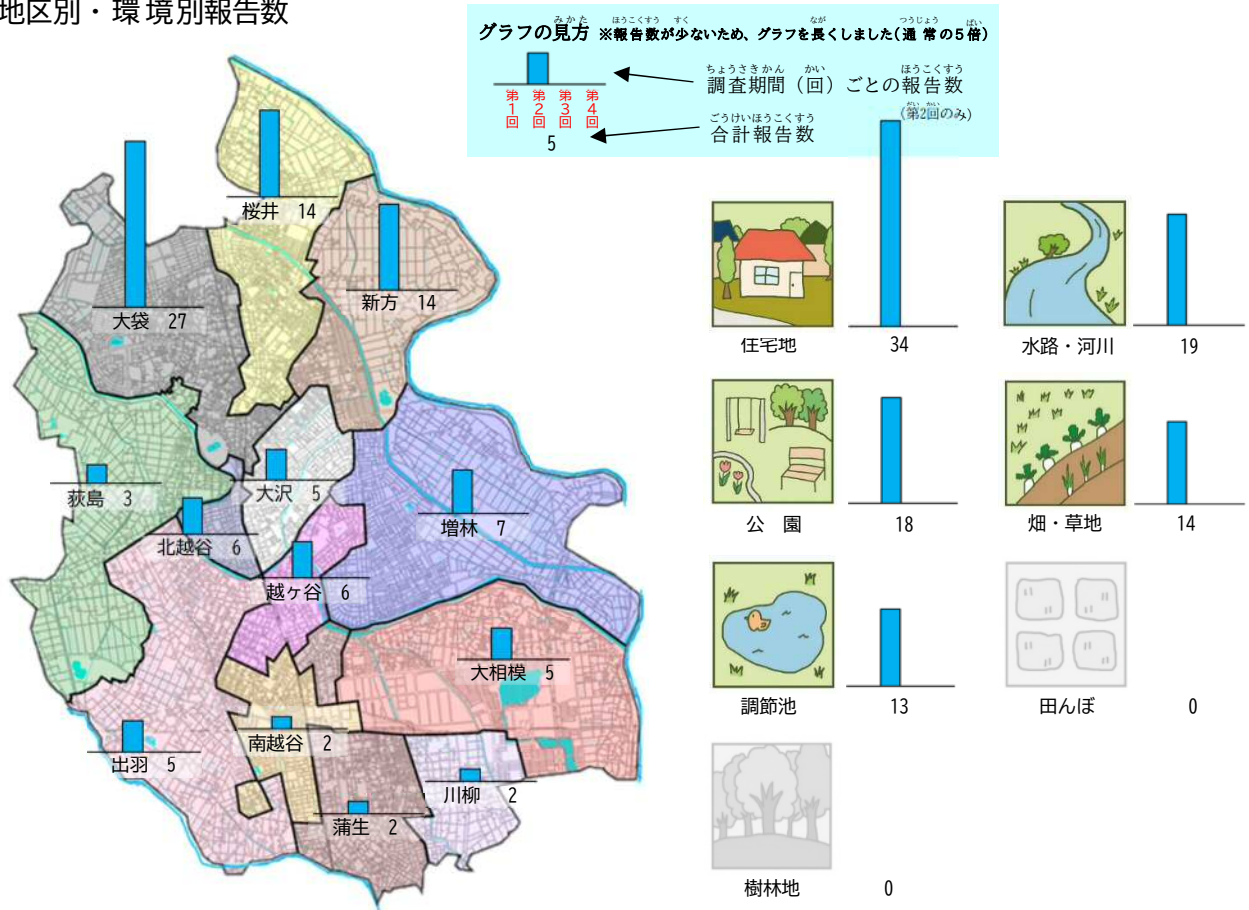
温暖化指標 越谷でも見られるようになった 暖かい地域のいきもの  
 大きさ 2.7~3.6 cm  
 特徴 成虫は4月から11月に見られます  
 幼虫はパンジーなどスミレ科の植物を食べます

調査員からの報告写真



まちがえやすいもの

## 地区別・環境別報告数



- 田んぼ、樹林地以外の報告が多い。住宅地が飛び抜けて多い原因は庭に幼虫の食べ物であるパンジーが植えられていることが考えられる。公園に多いのも同じ原因と思われる。南方系の蝶であるが、近年爆発的に増えた。年に何度も世代を繰り返す。
  - 市の北部から報告が多いが、都市部からの報告も少なくない。幼虫の食べるパンジーの有るなしに左右される。
  - 住宅地や公園など、パンジーの多い地域では、消毒がなければこれからも増えると思われる。
  - 雄はオレンジ色の地に黒い斑紋が多数ある。雌は前羽の先に黒と白の模様がある。各種花によく来る。幼虫は毛虫に見える。
- (内山 裕司)

### 33 コクワガタ (クワガタムシのなかま)

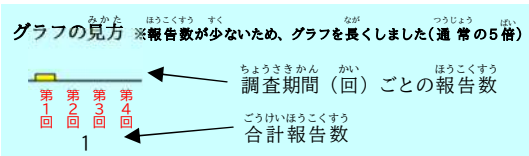
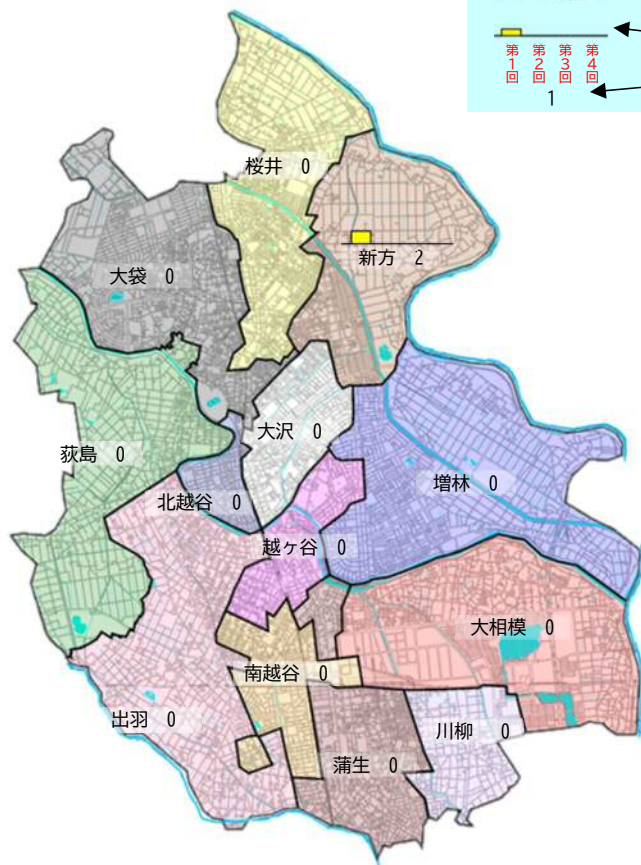
ちょうさほうこくけんすう		ちょうさきかん		だい	かい
調査報告件数		(調査期間		第1・4回)	
第1回	第2回	第3回	第4回	合計	
H29. 7~9月	H30. 10~12月	R2. 1~3月	R2. 4~6月		
2			0	2	

おお 大きき 2~4.5 cm  
 特 徴 成虫は6月から9月に見られます  
 オスは立派な角(大あご)を持っています  
 夜行性なので、昼間は木のくぼみや根元にひそんでいます  
 また、街灯にも飛んできます

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
 調査員からの報告写真



ちくべつ かんきょうべつほうこくすう  
 地区別・環境別報告数



- 報告数が少なかった。クヌギやヤナギなど、樹液の出る木が一本でもあれば見つかる可能性がある。夜行性で、樹皮の割れ目などにて自立たない。
- 新方地区はまだ樹林が残っていることがわかる。
- 発見数は少なかったが、樹液の出る木の残っている越谷市ではまだ見つかる可能性がある。
- 夜行性だが、樹皮の割れ目を探すと見つかる。小さい個体もいるので見逃しやすい。

(内山 裕司)

# 34 ヒグラシ (セミのなかま)

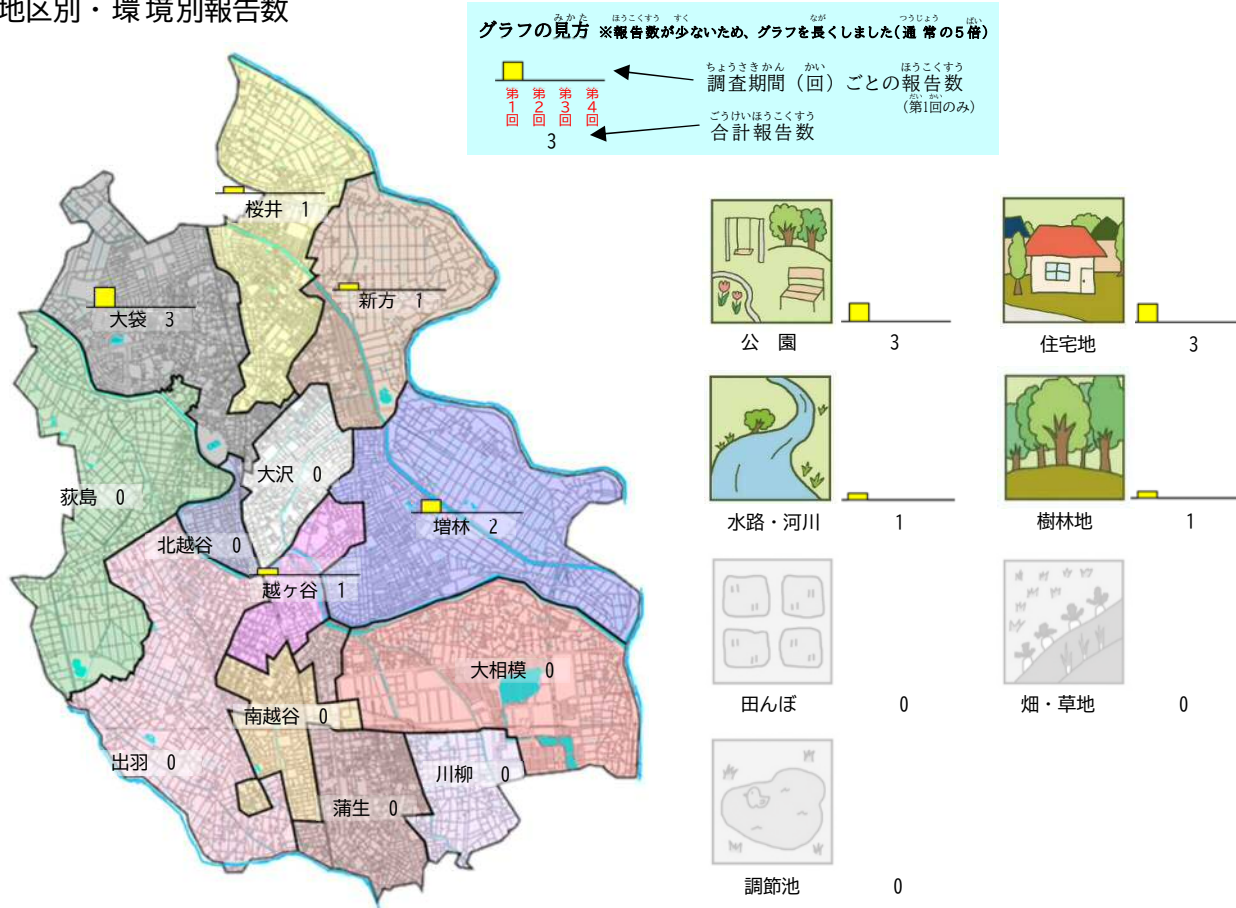
調査報告件数 (調査期間 第1回)				
第1回 H29.7~9月	第2回 H30.10~12月	第3回 R2.1~3月	第4回 R2.4~6月	合計
8				8

**大きさ** (はねの先まで) 4.5~6.2 cm  
**特徴** 成虫は7月から9月に見られます  
 明け方や夕方の気温の低い時間に「カナカナ」と鳴きます

## 調査員からの報告写真



## 地区別・環境別報告数



- ・住宅地と公園からの報告が多い。林や森があり、日陰が出来て地面が湿っている環境を好む。
- ・増林や大袋地区を始め、市の北部には屋敷林や社寺林などの樹林が残っていると思われる。越ヶ谷地区にも大きな樹林があると思われる。
- ・報告数は少ないが、未だに生息しているのは越ヶ谷市のような大都市では貴重である。生息環境をこれからも残していくことが望まれる。地面が乾燥すると生息が危うい。
- ・朝、夕の時間帯に樹林の近くで鳴き声を探すのがポイントである。

(内山 裕司)

# 35 クマゼミ (セミのなかま)

調査報告件数 (調査期間 第1回)				
第1回 H29. 7~9月	第2回 H30. 10~12月	第3回 R2. 1~3月	第4回 R2. 4~6月	合計
36				36

温暖化指標 越谷でも見られるようになった 暖かい地域のいきもの  
**大きさ** (はねの先まで) 6~6.5 cm  
**特徴** 成虫は7月から9月に見られます  
 午前中だけ「シャーシャー」という機械のような大きな声で鳴きます

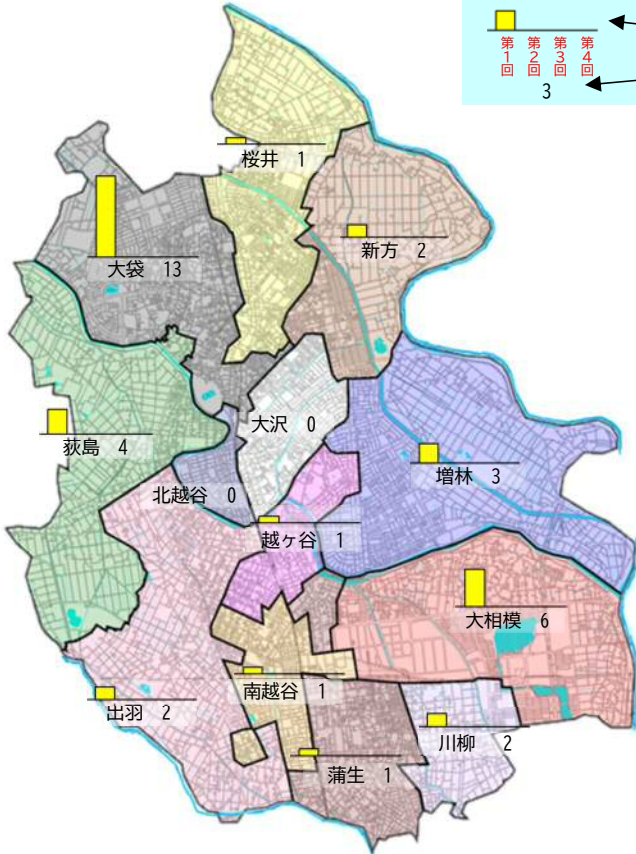
調査員からの報告写真  
 報告写真なし

※「クマゼミではないか」と寄せられた写真が数点ありましたが、確認した結果、全てクマゼミ以外のセミでした。



## 地区別・環境別報告数

グラフの見方 ※報告数が少ないため、グラフを長くしました(通常の5倍)  
 第1回 第2回 第3回 第4回  
 3 ← 合計報告数



- 公園が一番多い。ヒグラシに比べると、乾燥した樹林を好むので、大きな木の植林地などでも発生する。
- 周辺の農村部から報告が多いが、中心部からも少なからず報告がある。街なかでも大きな木があることが考えられる。
- 以前は関東地方には生息していなかった種である。乾燥化の進む都市部においては増えていくことが考えられる。
- 街なかでも大きな木のある公園などに、午前中探しに行くと声が聞ける可能性がある。クマゼミ自体を見つけるのは難しいが、鳴き声はよく通る。体が黒い。

(内山 裕司)

# 36 カマキリのなかま

ちょうさほうこくけんすう ちょうさきかん だい かい 調査報告件数 (調査期間 第1・2・3回)				
第1回 H29. 7~9月	第2回 H30. 10~12月	第3回 R2. 1~3月	第4回 R2. 4~6月	合計
93	49	132		274

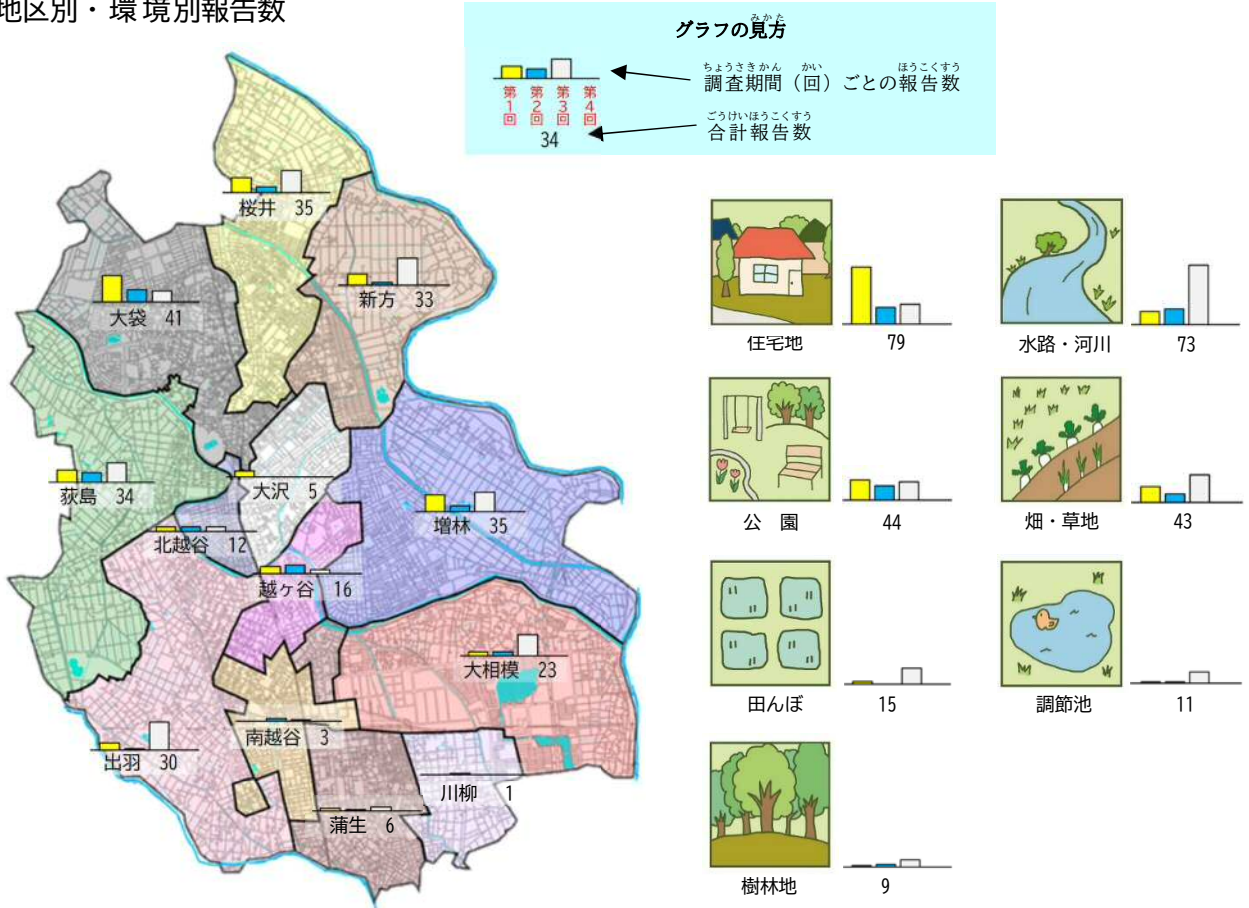
市内で見つけられるカマキリは、おもに次の4種類です  
**チョウセンカマキリ** うしろばねの根もとにうすい褐色のまだらがあります  
**オオカマキリ** 緑色で薄茶色を帯びることもある大型 (7~9 cm) のカマキリ  
**ハラビロカマキリ** 中型で腹の幅が広く、はねの半程に白い斑点があります  
**ココマキリ** 小型で前あしの内側に白黒の点のもようがあります

## ちょうさいん ほうこくしゃしん 調査員からの報告写真

※ 卵の報告写真もあります (ココマキリ 卵は報告写真なしのため参考写真です)



## ちくべつ かんきょうべつほうこくすう 地区別・環境別報告数



- ・いろいろな環境から報告されている。代表的なこの4種は生息環境が少し異なるので、いろいろな環境から見つかったものと思われる。
  - ・都市部から農村部までいろいろな地区から報告されている。肉食なので、越谷市は全域に渡って、餌となるいろいろな昆虫が生息していると思われる。
  - ・肉食なので、特定の植物に依存しているわけではない。餌となる昆虫が減らない限り数は減らないと思われる。
  - ・今回冬の報告が多い。種により卵しょうの形に特徴があり、卵しょうのある場所も種によって好みがあるので、環境を見つけて探すとよい。
- (内山 裕司)

# 37 シオカラトンボ (トンボのなかま)

調査報告件数 (調査期間 第1回)		調査報告件数 (調査期間 第1回)		調査報告件数 (調査期間 第1回)	
第1回	第2回	第3回	第4回	合計	
H29. 7~9月	H30. 10~12月	R2. 1~3月	R2. 4~6月		
315				315	

おお  
大きさ 5~5.5 cm

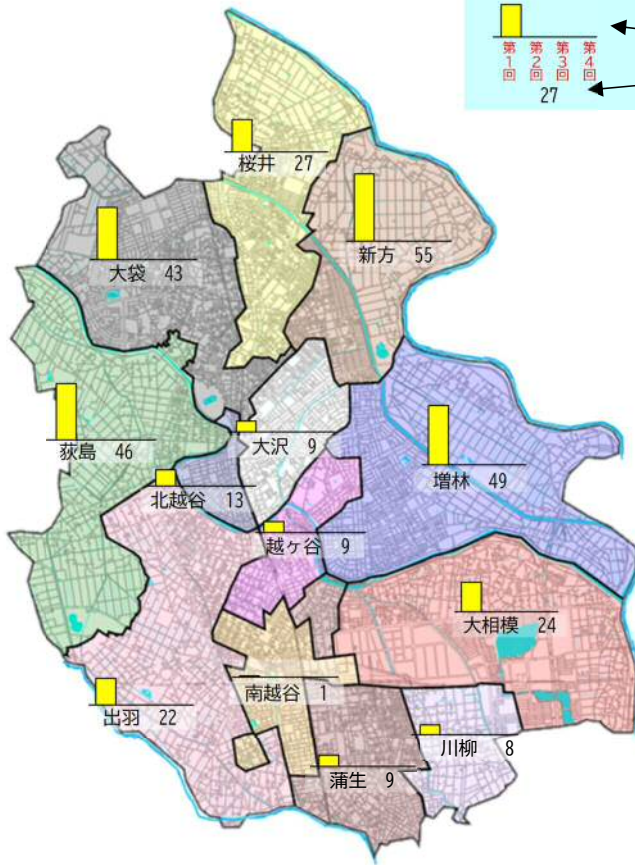
とく 徴 成虫は4月から10月に見られます

オスは黒くなり白い粉をふきますが、メスは黄緑色で「ムギワラトンボ」と呼ばれます

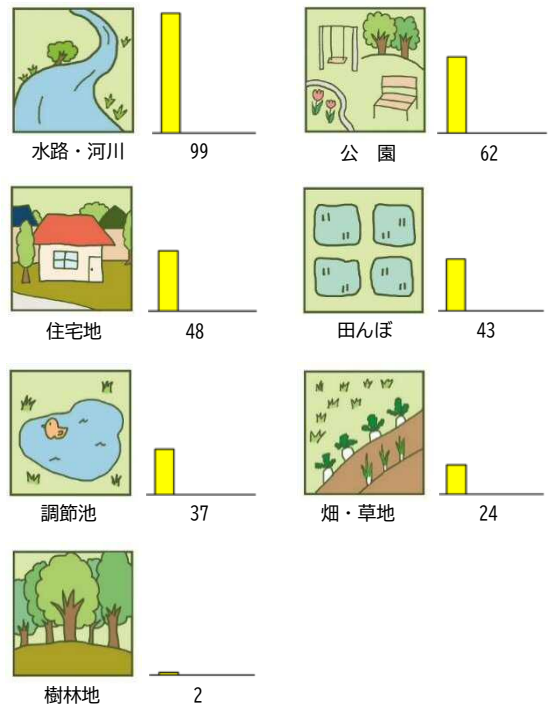
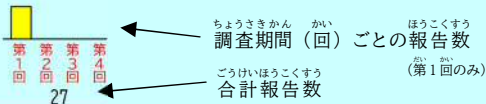
## 調査員からの報告写真



## 地区別・環境別報告数



### グラフの見方



- ・幼虫が水中で育つことから、水の有ることが絶対条件である。水路・河川からの報告が多いが、その他の場所にも生息環境があることが考えられる。
- ・周辺部からの報告が多いが、都市部でも少なからず報告がある。池などの環境があると思われる。
- ・市内には、水のきれいな環境がたくさんあることがわかる。水質を維持していくことがシオカラトンボにとって大切だと考えられる。
- ・水面をよく飛ぶので、発見は難しい。雌は茶色い。

(内山 裕司)

# 38 ハグロトンボ (カワトンボのなかま)

ちょうさほうこくけんすう		ちょうさきかん		だい	かい
調査報告件数 (調査期間 第1・4回)					
第1回 H29. 7~9月	第2回 H30. 10~12月	第3回 R2. 1~3月	第4回 R2. 4~6月	合計	
90			5	95	

おお 大きさ 4~5.2 cm

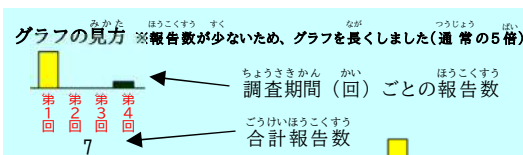
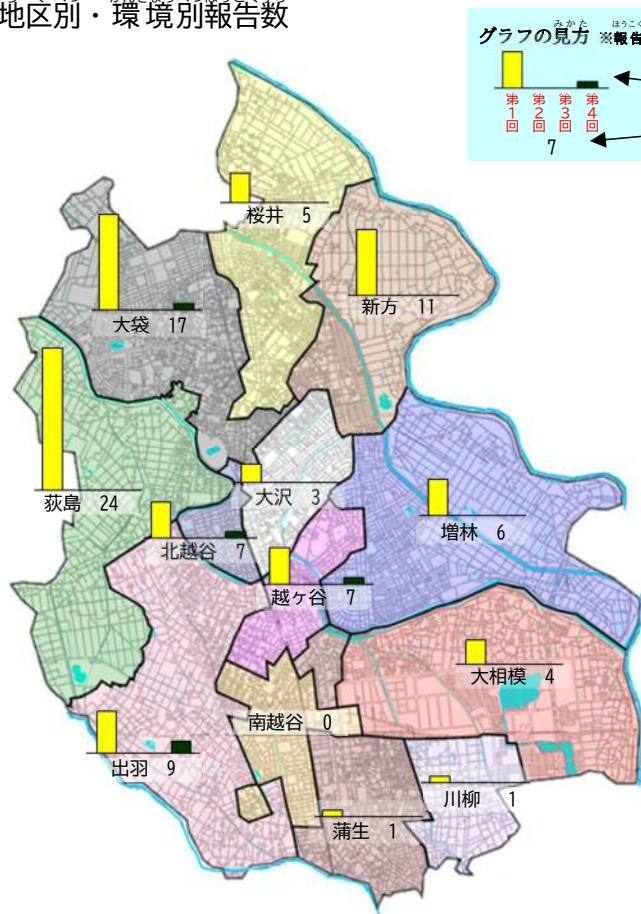
とく 特徴 成虫は5月から10月に見られます

メスは体色が黒褐色ですが、オスは黒緑色で金属光沢があります

## ちょうさいん ほうこくしゃしん 調査員からの報告写真



## ちくべつ かんきょうべつほうこくすう 地区別・環境別報告数



水路・河川 34



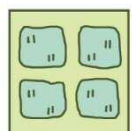
公園 31



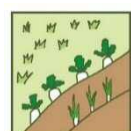
住宅地 11



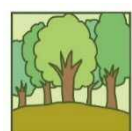
調節池 9



田んぼ 4



畑・草地 3



樹林地 3

- トンボなので水路・河川から報告が多いが、いろいろな環境から報告があるのはシオカラトンボと同様にいろいろな環境に水があると考えられる。シオカラトンボが明るいところを好むのに対し、木のある日陰を好む。
- 周辺部に多数生息しているが、中央の都市部からの報告もある。きれいな水の環境があると思われる。
- 水があり、樹林などの日陰で湿った環境を好む。水だけでなく植物も大切に守っていく必要がある。
- 水辺で木の多い湿った環境を探すと、下草に止まっている。ひらひらと飛ぶので見つけやすい。

(内山 裕司)

### 39 イナゴのなかま

ちょうさほうこくけんすう		ちょうさきかん		だい	かい
調査報告件数 (調査期間					第1・2回)
第1回	第2回	第3回	第4回	合計	
H29. 7~9月	H30. 10~12月	R2. 1~3月	R2. 4~6月		
58	76			134	

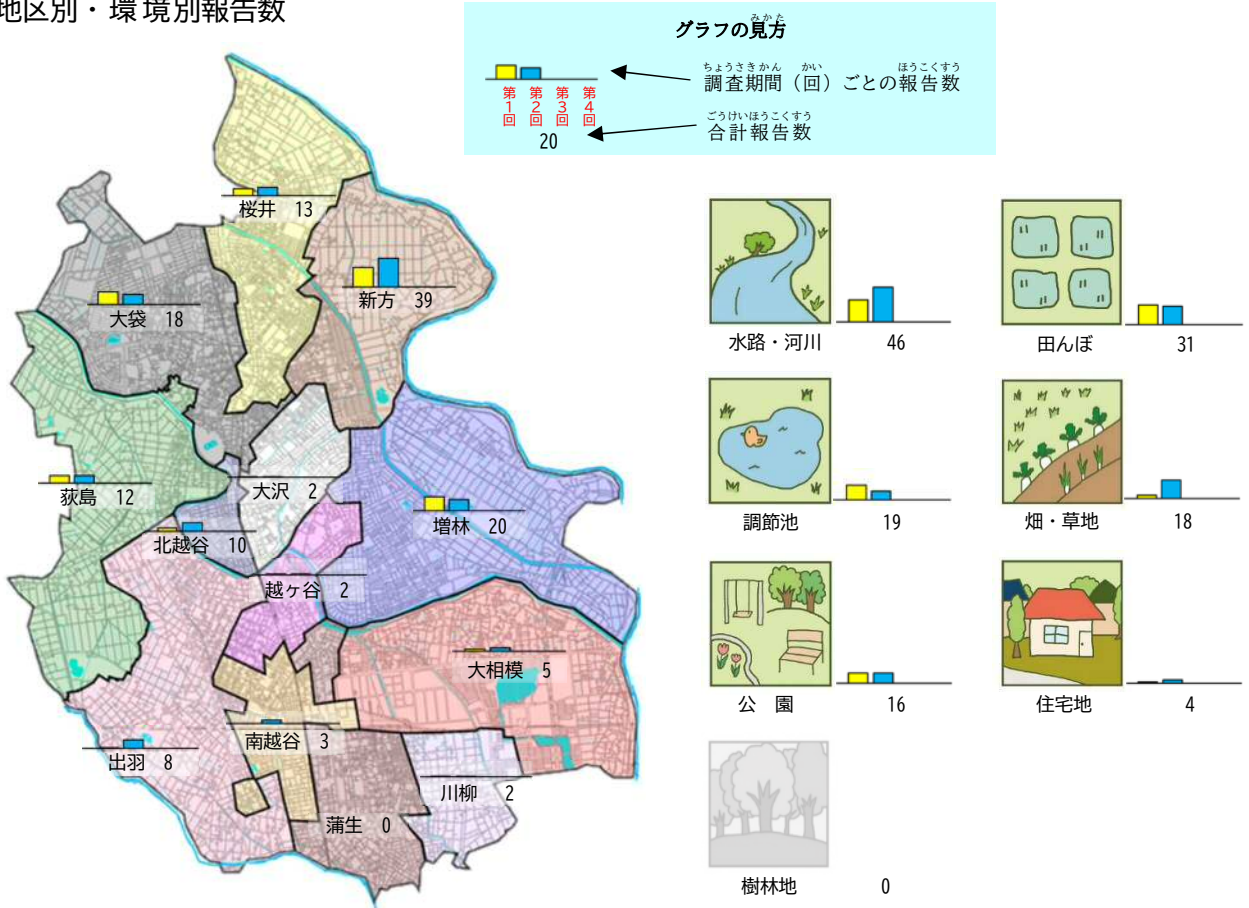
おお 大きさ 2.8~4 cm (コバネイナゴ)  
3~4 cm (ハネナガイナゴ)  
とく 特徴 8月から11月に見られます  
コバネイナゴは水田やヨシのしげった湿地などでよく見かけます

■埼玉県レッドリスト 準絶滅危惧1型 (NT1) ※ハネナガイナゴ

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
調査員からの報告写真



ちくべつ かんきょうべつほうこくすう  
地区別・環境別報告数



- 水路・河川、田んぼは食べ物の草が多いので報告が多い。田んぼより水路・河川が多いのは農薬の影響と思われる。
- 田や畑の多い市の周辺部からの報告が多い。草地は周辺に多いことが考えられる。
- 市の中心部を除いて広く報告があるが個体数が意外と少ない。かつては稲の大害虫であったが、農薬の影響で数が少なくなっていることが考えられる。
- 河川の草地を探すとびよんびよんと飛ぶので見つけやすい。

(内山 裕司)



# 40 ショウリョウバッタ (バッタのなかま)

大きさ オス 4.5 cm メス 7.5 cm

特徴 7月から10月に見られます

オスは飛ぶときに「チキチキ」と音を出すので「チキチキバッタ」とも呼ばれます

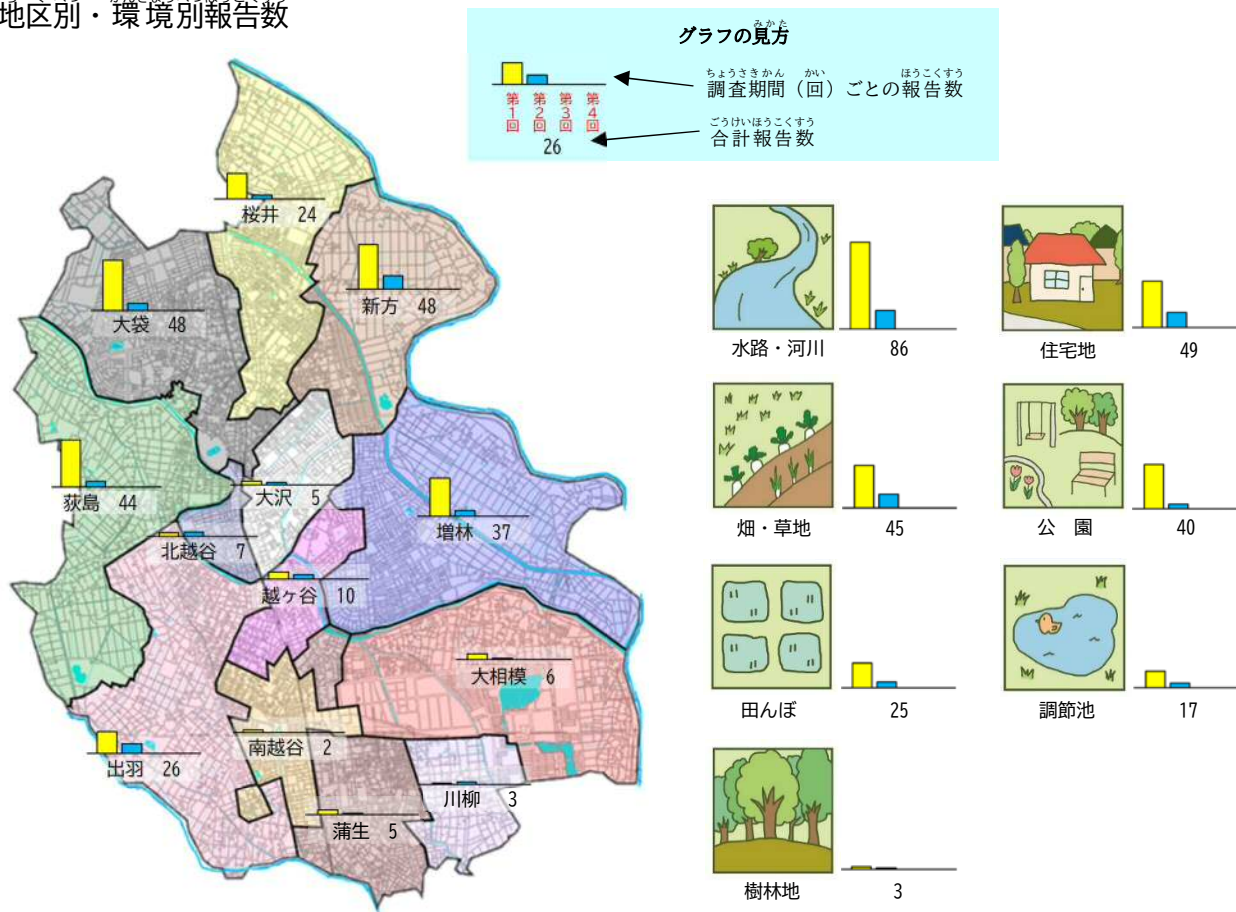
調査報告件数 (調査期間 第1・2回)

第1回 H29. 7~9月	第2回 H30. 10~12月	第3回 R2. 1~3月	第4回 R2. 4~6月	合計
213	52			265

調査員からの報告写真



地区別・環境別報告数



- 水路・河川が多いが、住宅地、畑・草地、公園でも多い。広い草地があり、餌となる植物が多いと思われる。
- 市の中心部にも草地が意外と多いと思われるが、やはり周辺部に草地が多いと思われる。
- 市周辺部では報告数が多い。河川敷などが生息地になっている可能性がある。
- ちょっとした草原でも発生する。雌は大きさが雄の2倍近くあり、あまり飛ばない。体色が緑色と茶色がある。

(内山 裕司)

# 41 トノサマバッタ (バッタのなかま)

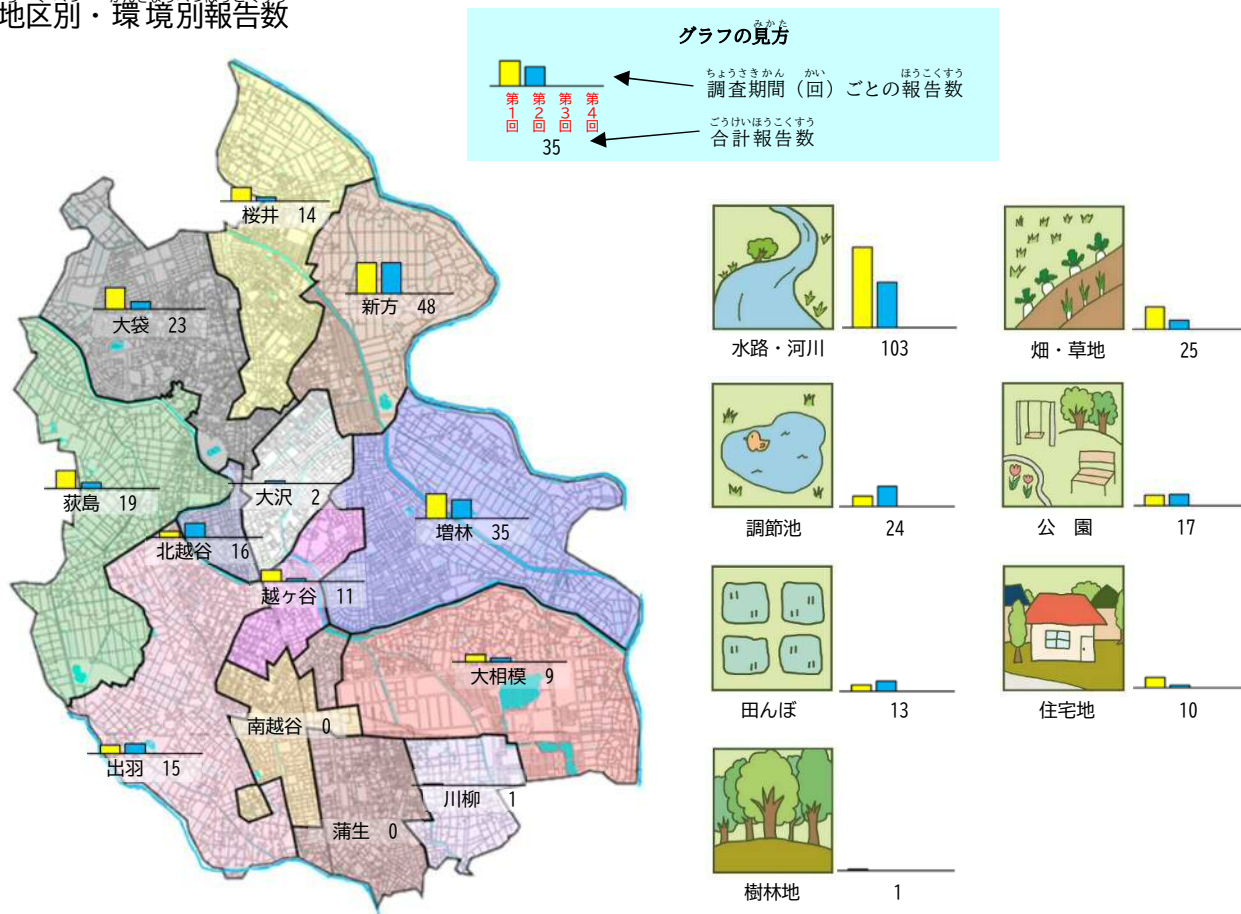
おお  
**大きさ** 3.5~6.0 cm  
**特徴** 夏から秋に見られます  
 おおがた  
 大型のバッタでよく飛びます

ちょうさほうこくけんすう		ちょうさきかん		だい	かい
調査報告件数		(調査期間		第1・2回)	
第1回 H29. 7~9月	第2回 H30. 10~12月	第3回 R2. 1~3月	第4回 R2. 4~6月		合計
114	79				193

## ちょうさいん ほうこくしゃしん 調査員からの報告写真



## ちくべつ かんきょうべつほうこくすう 地区別・環境別報告数



- 水路・河川、畑・草地、調節池、公園など広い草地があるところから報告が多い。
- 新方地区、増林地区には広い河川敷があり、格好の生息地になっていると思われる。
- 市の北部では報告数が多い。生息には広い草地が必要であるので、これらの地には貴重な草地がまだ残っていると考えられる。今後開発などによって減ることが危惧される。
- 日の当たるところを好むので、草原の中の道沿いにいることが多い。飛んだとき、後羽が淡黄色で模様がないので、他種のクルマバッタモドキなどと区別しやすい。

(内山 裕司)

## 42 クビキリギス (キリギリスのなかま)

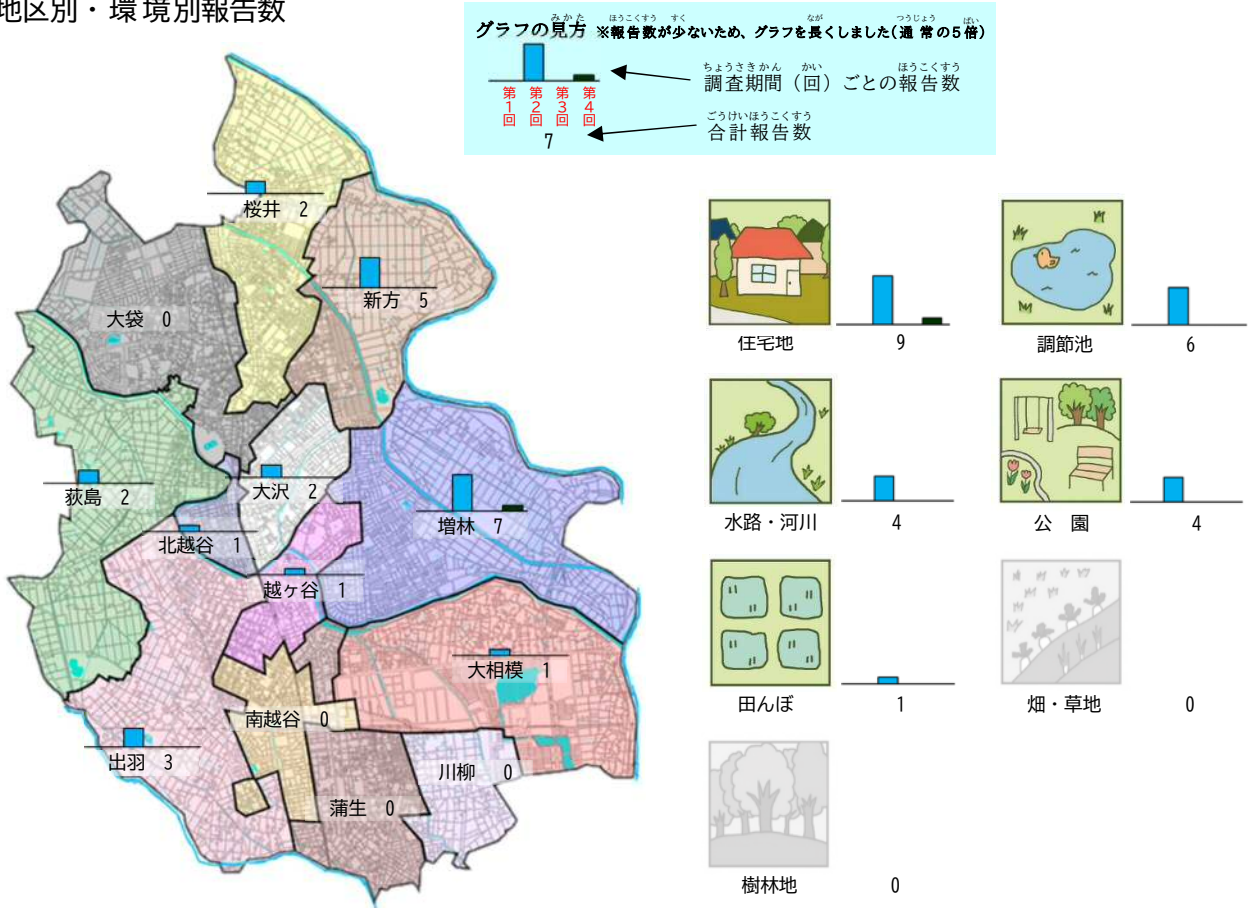
調査報告件数 (調査期間)		第2・4回		合計
第1回 H29. 7~9月	第2回 H30. 10~12月	第3回 R2. 1~3月	第4回 R2. 4~6月	
	23		1	24

おお  
大きさ 5.7~6.5 cm  
とく  
特徴 成虫は10月から翌年6月に見られます  
がつよくとしがつ  
5月頃の蒸し暑い夜、草の上で「ジーン」と鳴き続けます

### 調査員からの報告写真



### 地区別・環境別報告数



- 住宅地からの報告が多い。都市部の宅地の庭なども生息地としている可能性がある。
- 南部を除いて、小さくても緑地が残っていることが考えられる。
- 周辺部だけでなく、都市部にもうまく適応していると考えられる。
- 初夏に鳴き声で確認できる。他のバッタ類が減る秋に成虫になるので意外と見つけやすい。成虫で冬をこす。あまり飛ぶことはない。体の色が緑色と薄茶色の個体があり、ごく稀にピンク色の個体が現れる。

(内山 裕司)

がいらい かくだい  
**コラム 外来カミキリムシの拡大**

クビアカツヤカミキリとは

クビアカツヤカミキリの成虫(図1)は、胸の辺りが明赤色、他は光沢のある黒色で、側面には頑丈なとげ状のこぶを持っている体長2.5~4cmほどの昆虫です。中国が原産で特定外来生物に指定されています。

サクラ、モモ、ウメなどの主にバラ科の樹木に卵を産み、幼虫が樹木を食べることで弱らせたり枯らせたりし、倒木などの被害をもたらすこともあります。幼虫は木を食べる際に木くずとフンが混ざったフラス(図2)を排出します。



図1 出典: 埼玉県環境科学国際センター



サクラの木の根元に落ちたフラス

**越谷での被害**

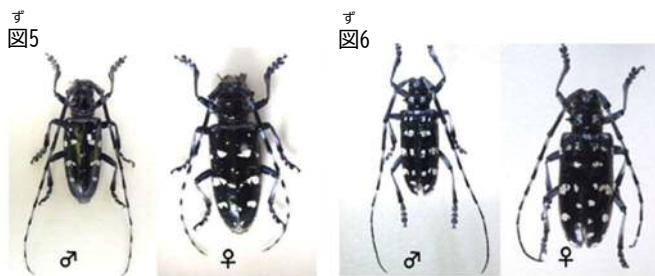
越谷市では初めて発見された平成29年度に2匹を捕殺して以来、平成30年度には9匹、令和元年度には43匹、令和2年度には16匹を捕殺しています。その他にフラスだけが発見された場所も含めて、比較的同じ場所で発見されています。(図3)。発見した場合にはその場で捕殺し情報提供いただけるよう呼び掛けています。

被害の拡大を防ぐため、フラスが発見された樹木については薬剤の注入やネットを巻き付けるなど対策をしています。令和2年度には40本もの樹木に対策を行いました。さらに被害が著しい樹木については伐採を実施しています。越谷市内では平成29年に2本、平成30年に1本のサクラの木を伐採しており、伐採をした木は粉碎や焼却し処分します。



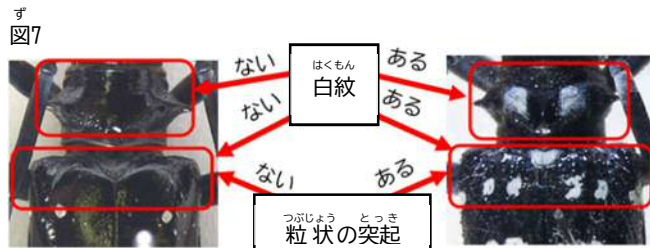
市内の発見場所 (重複場所を含む)

**新たな外来カミキリムシ**



ツヤハダゴマダラカミキリ

ゴマダラカミキリ



出典: 林野庁森林整備部研究指導課

ツヤハダゴマダラカミキリ(図5)は、光沢のある黒色で、背面に約20個の白色の斑紋のある体長3.5cmの昆虫です。在来のゴマダラカミキリ(図6)に似ていますが、白紋の有無や粒状の突起等で見分けられます(図7)。クビアカツヤカミキリと同様に幼虫の摂食によって樹木に被害を与えます。

国内では平成14年に神奈川県で初めて発見され、その後、茨城県、兵庫県、福島県などでも発見されています。埼玉県内でも令和3年に初めて白岡市で1匹発見されました。今のところ県内での拡がりには確認されていませんが、クビアカツヤカミキリ同様に警戒が必要です。

# 43 ヘビのなかま

調査報告件数 (調査期間)		第1・2・4回		合計
第1回	第2回	第3回	第4回	
H29. 7~9月	H30. 10~12月	R2. 1~3月	R2. 4~6月	
14	1		2	17

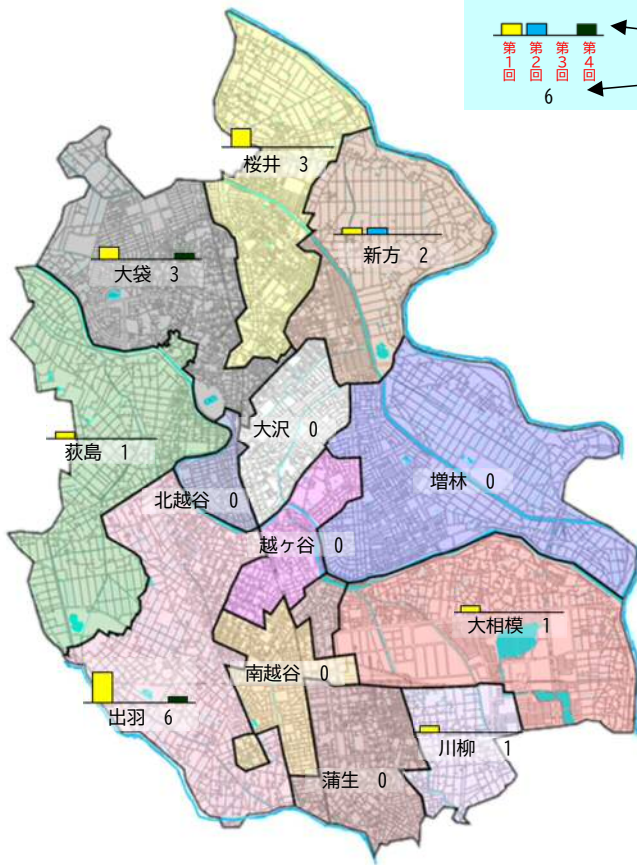
市内ではアオダイショウがよく見られ、シマヘビ、ヤマカガシ、ヒバカリはあまり見られなくなっています  
 また、マムシも最近ほとんど発見されていません  
 大きさ アオダイショウ 1~2.5m シマヘビ 1~1.5m  
 ヤマカガシ 1~1.2m ヒバカリ 0.4~0.6m ニホンマムシ 0.4~0.8m

■埼玉県レッドリスト アオダイショウ 準絶滅危惧2型 (NT 2)、シマヘビ 絶滅危惧II類 (VU)  
 ヤマカガシ・ヒバカリ 準絶滅危惧1型 (NT 1)、ニホンマムシ 準絶滅危惧2型 (NT 2)

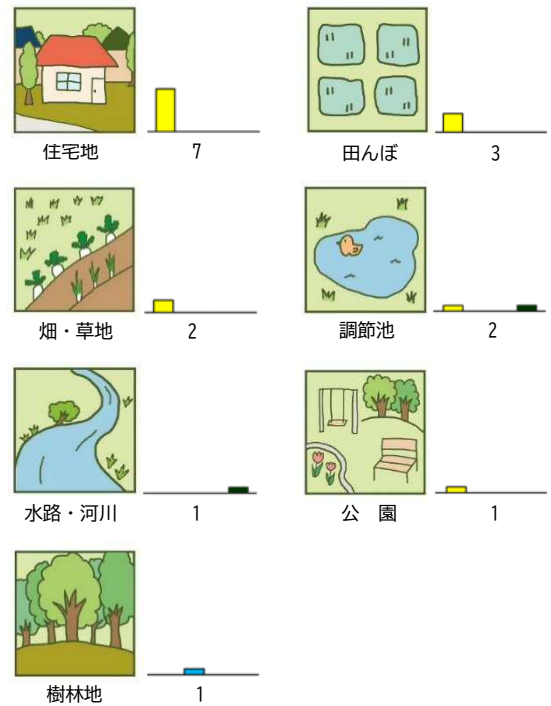
調査員からの報告写真



## 地区別・環境別報告数



グラフの見方 ※報告数が少ないため、グラフを長くしました(通常の5倍)  
 色分け: 第1回(黄), 第2回(青), 第3回(緑), 第4回(赤)  
 高さ: 各調査期間ごとの報告数  
 長さ: 合計報告数



・おもに農地と住宅が混在する地域から、アオダイショウ、シマヘビ、ヒバカリの報告がありました。全体の報告数からするとほんのわずかです。5年ごとに行われてきた「越谷ふるさといきもの調査」では、ヘビ類は調査対象種になっていなかったため比較はできませんが、私の感覚では、ヘビ類は10年前と比べても出会う機会がめっきり減ったと感じる生きものの一つです。もともと探そうと思ってすぐに見つかる生きものではありません。庭の木に巻きついていたり、道路やあぜ道を横断していたり、ブロック塀で日向ぼっこしていたりと、意外な出会い方をする生きものです。減ってしまった理由としては、生息地の樹林地や屋敷林、やぶや茂みの減少、道路やコンクリート水路による生息地の分断などもあるでしょう。エサとなるカエル等小動物の減少も大きな要因になっていると思います。(古谷 愛子)

# 44 カメのなかま

調査報告件数 (調査期間 第1・2回)				合計
第1回 H29.7~9月	第2回 H30.10~12月	第3回 R2.1~3月	第4回 R2.4~6月	
87	30			117

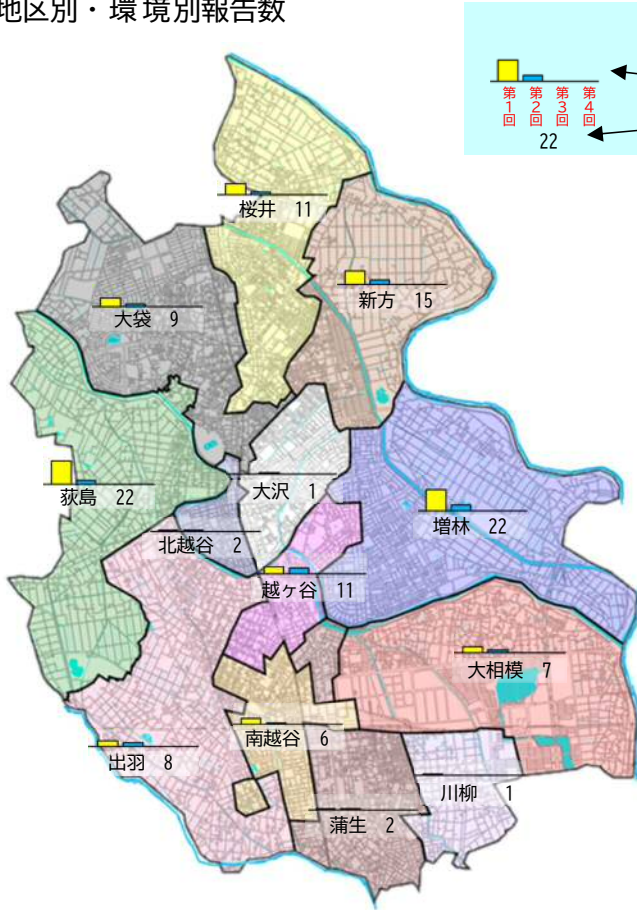
ニホンイシガメ、クサガメ、ニホンスッポンがよく知られていますが、最近ではミドリガメと呼ばれるミシシippアカミガメやカミツキガメなどの北アメリカからやってきた外来種が、市内でも多く見られるようになってきました

■埼玉県レッドリスト ニホンイシガメ 情報不足 (DD)、ニホンスッポン 情報不足 (DD)

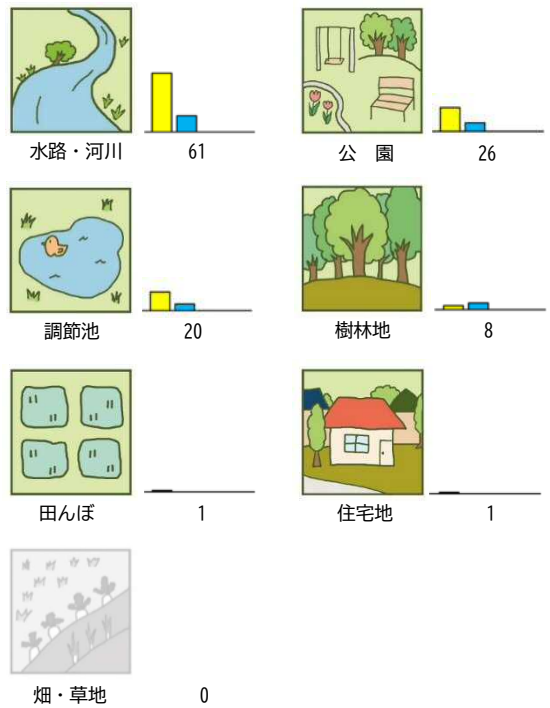
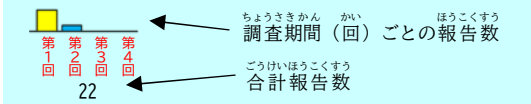
調査員からの報告写真



地区別・環境別報告数



グラフの見方



全地区からの報告がありますが、報告の大部分がミシシippアカミガメで、一部クサガメでした。水路・河川、調節池のほか、公園や樹林地でも確認されています。報告のあった公園や樹林地にも、池や水路などの水辺があったのだと思います。外来種のカメが多いのは残念ではありますが、カメ類が生息できるのは、水面と陸地の連続性が確保されている環境です。そうした連続性のある水辺には、ヨシやヤナギなどの水辺植物が生育し、カモやサギなどの水鳥や水生昆虫、魚類などほかの生きものの生息地としても重要で、今後も大切にしたい環境です。

今回の調査報告にはありませんでしたが、近年、カミツキガメの生息も越谷市内では確認されています。  
(古谷 愛子)

# 45 トウキョウダルマガエル (アカガエルのなかま)

調査報告件数 (調査期間 第1・4回)				
第1回 H29. 7~9月	第2回 H30. 10~12月	第3回 R2. 1~3月	第4回 R2. 4~6月	合計
17			4	21

大きさ 6~9 cm

特徴 トノサマガエルに似ていますが、越谷に生息しているのはトウキョウダルマガエルです

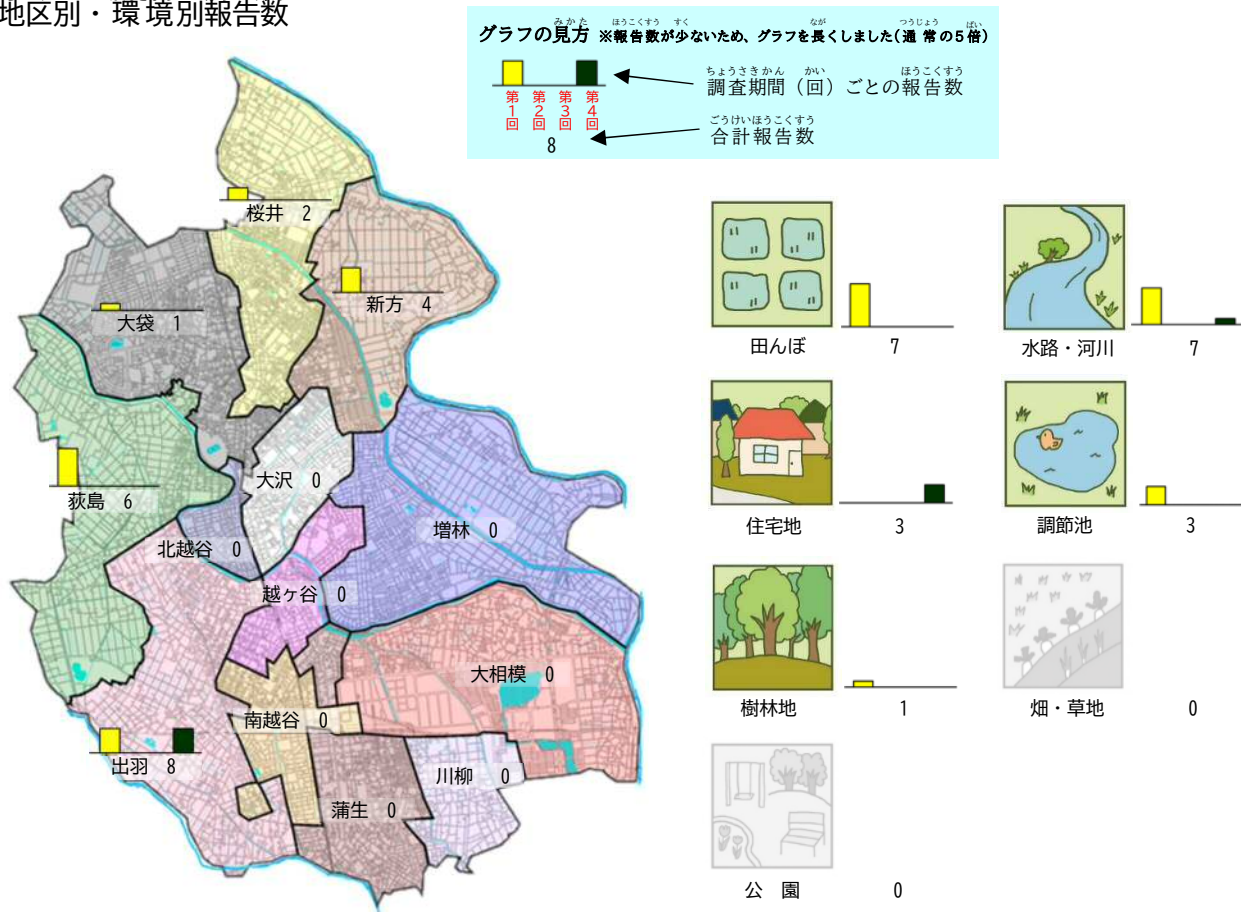
指先に吸盤がないので、コンクリートの水路に落ちると出られません

■埼玉県レッドリスト 準絶滅危惧1型 (NT1) ■環境省レッドリスト 準絶滅危惧 (NT)

調査員からの報告写真



地区別・環境別報告数



かつてはアマガエルと並び越谷の田んぼではどこでも見られたカエルですが、報告数はわずかでした。トウキョウダルマガエルがかつてより少なくなっていることは、私も実感しています。とくにこの10年で激減した生きものの代表ともいえます。トウキョウダルマガエルは準絶滅危惧種になっています。越谷の田んぼは年々減少し、水路の多くは、管理の省力化や都市化等のためにコンクリートになってしまいました。指先に吸盤のないトウキョウダルマガエルは壁面が垂直なコンクリート水路に落ちると出られません。落下せずに移動できるよう水路にフタをかけた、自由に入り出ることができるような傾斜のある水路構造にするなど、トウキョウダルマガエルが生息できる環境づくりが急務です。越谷から、田んぼをこれ以上減らさないことも重要です。

(古谷 愛子)

# 46 ニホンアマガエル (アマガエルのなかま)

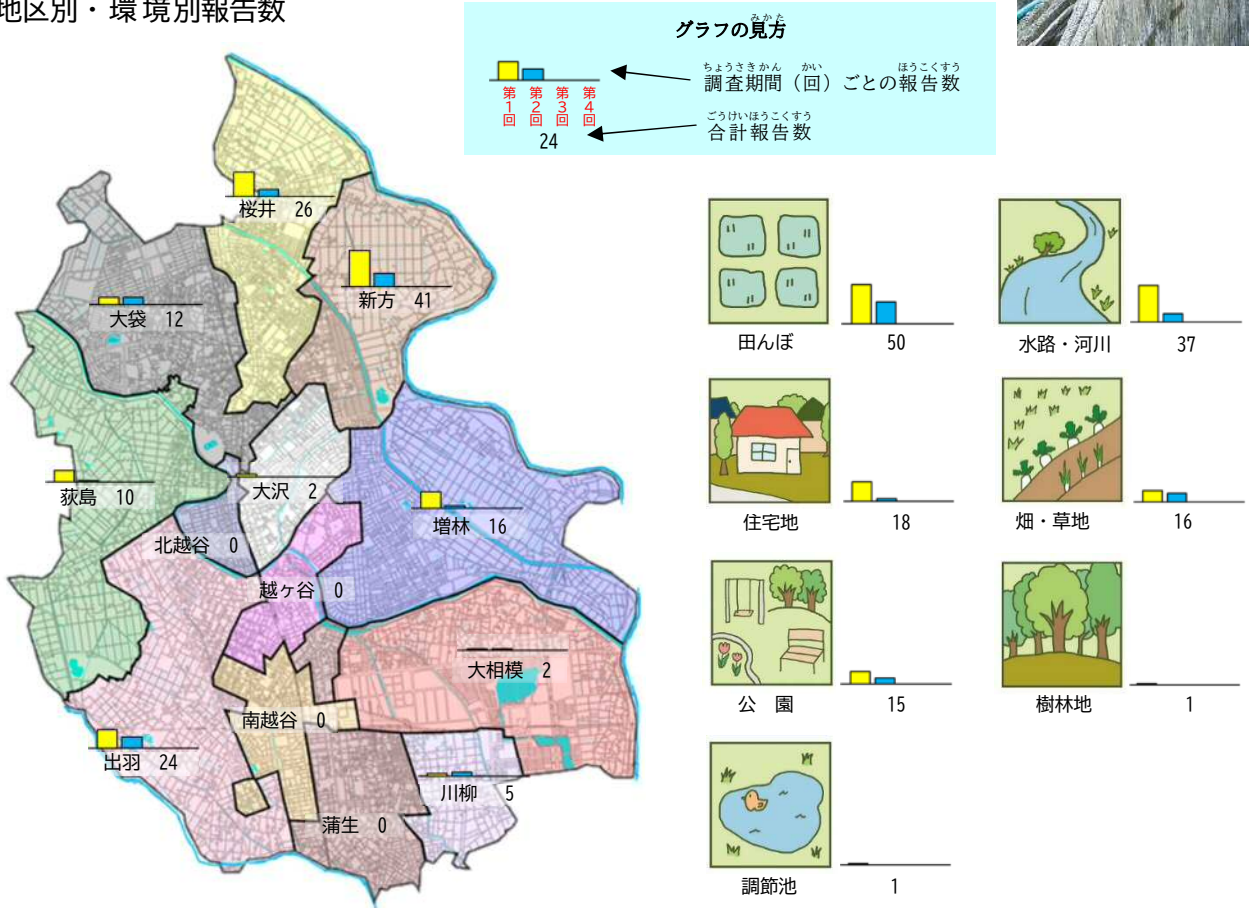
調査報告件数 (調査期間)		第1・2回		合計
第1回 H29. 7~9月	第2回 H30. 10~12月	第3回 R2. 1~3月	第4回 R2. 4~6月	
99	39			138

おお 大きさ 3~4 cm  
 とく 特徴 低木や草の上でハエ・カ・クモなどを食べます  
 からだ 体の色をまわりに合わせ黄緑色・灰色・茶色に変えます

## 調査員からの報告写真



## 地区別・環境別報告数



- 田んぼのある地域を中心に多くの報告がありました。身近な場所で見られるかわいいカエルです。草地や畑などで冬眠から覚めたカエルたちは、春、田植えの準備で水が張られた田んぼに産卵に集まります。おたまじゃくしは1か月ほどで後足、前足が出てカエルになり、その後は田んぼだけでなく、周辺の草地や畑、公園や住宅地等にも移動して生活します。ニホンアマガエルの生息には、おたまじゃくしが育つ田んぼが最も重要ですが、カエルになった後に生活する草地の存在も欠かせません。庭や畑、公園や学校のちょっとした草むらも、カエルたちのすみかとして、大切にしたいと思っています。
- 田んぼは、お米の生産とともに、カエルをはじめ多くの生きものを育む重要な役割があります。そんな田んぼの一面にも、ぜひ注目していただきたいと思っています。(古谷 愛子)



# 47 アズマヒキガエル (ヒキガエルのなかま)

調査報告件数 (調査期間 第3・4回)		だい かい		合計
第1回 H29.7~9月	第2回 H30.10~12月	第3回 R2.1~3月	第4回 R2.4~6月	
		2	1	3

おお 大きさ 4~16.5 cm  
 とく 特徴 体の色は灰褐色で、ずんぐりとした体形をしています  
 がつ がつごろ いけ しょう たまご う 3月から4月頃、池などにひも状の卵を産みます

■埼玉県レッドリスト 準絶滅危惧1型 (NT1)

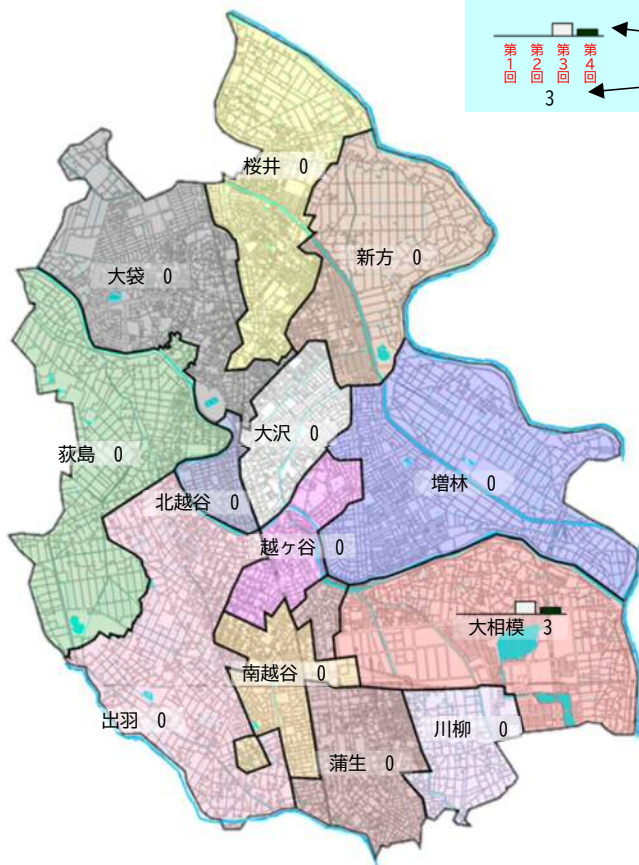
ちょうさいん ほうこくしゃしん  
 調査員からの報告写真



※調査期間中に、専門委員が市内で撮影した写真です (報告対象外)

ちくべつ かんきょうべつほうごうすう  
 地区別・環境別報告数

グラフの見方 ※報告数が少ないため、グラフを長くしました(通常の5倍)  
 第1回 第2回 第3回 第4回  
 3  
 ちょうさきかん かい ほうこくすう  
 調査期間 (回) ごとの報告数  
 ごうけいほうこくすう  
 合計報告数



樹林地

2



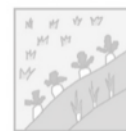
住宅地

1



田んぼ

0



畑・草地

0



水路・河川

0



公園

0



調節池

0

・大相模地区のみで、報告がありました。大相模地区の私を知る小さな池では、毎年春、たくさんのヒキガエルが繁殖のために集まり、いわゆるカエル合戦の様子が観察できます。ヒキガエルは、越谷ではかつてどこでも普通に見られたカエルで、20年前には平方の我が家の庭にも生息していました。産卵が3月から4月と早いで、その時期に流れのない浅い池などの水辺が必要です。ヒキガエルは、繁殖期とおたまじゃくしの期間以外は水辺から離れてくらし、何キロも離れた場所からでも産卵場所に集まると言われていますが、その移動途中にコンクリートの水路に落下して出られなくなったり、道路でひかれてしまうことがあり、数を減らす大きな要因のひとつになっています。

(古谷 愛子)

## 49 タニシのなかま

ちょうさほうこくけんすう		ちょうさきかん		だい かい	
調査報告件数 (調査期間 第4回)					
第1回	第2回	第3回	第4回	合計	
H29. 7~9月	H30. 10~12月	R2. 1~3月	R2. 4~6月		
			16	16	

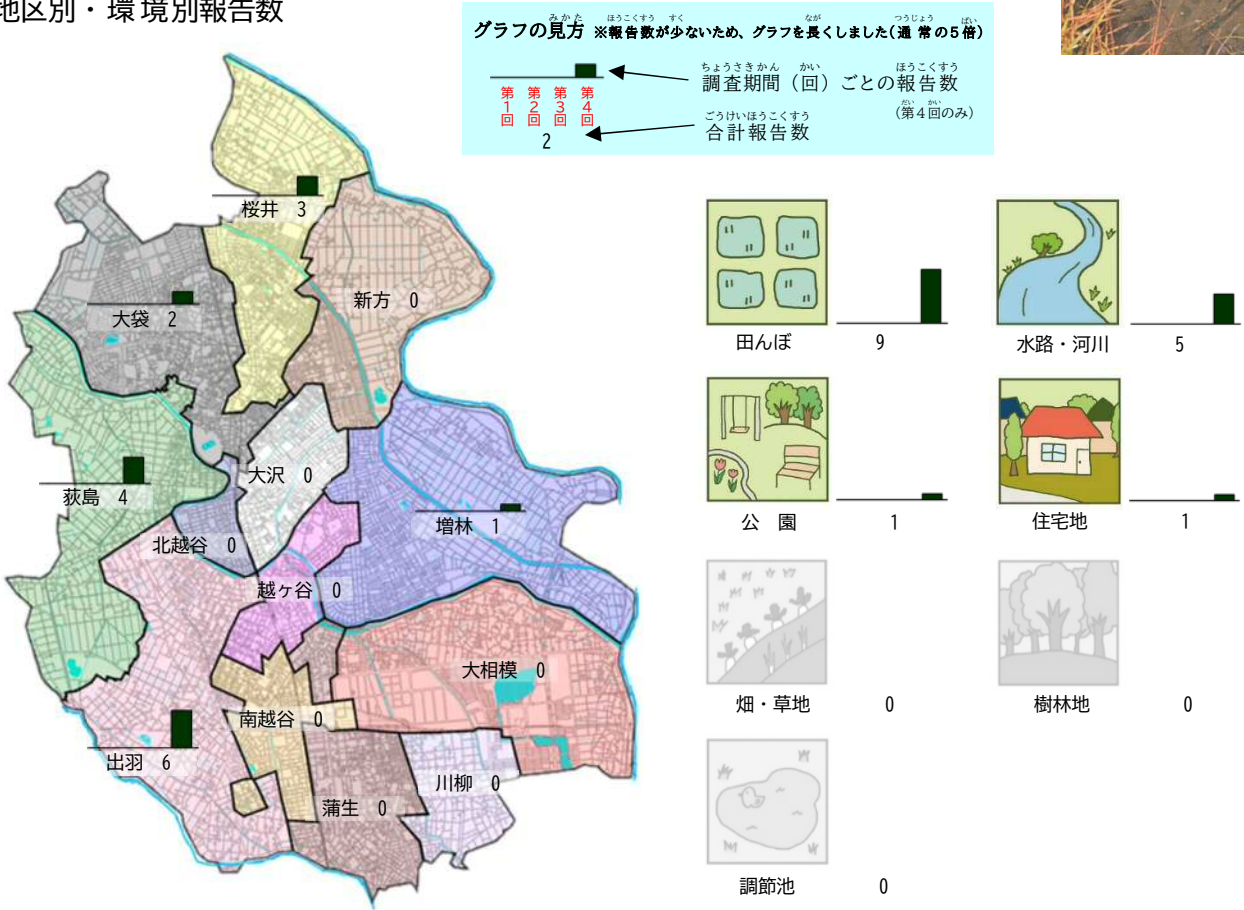
市内で見られるタニシのなかまは、マルタニシ、ヒメタニシなどで、タニシに似たものにヒメモノアラガイとサカマキガイなどがいます  
 タニシのなかまにはフタがあり、モノアラガイやサカマキガイなどにはフタがありません

### ■埼玉県レッドリスト マルタニシ 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

ちょうさいん ほうこくしゃしん  
 調査員からの報告写真



### 地区別・環境別報告数



- 越谷に生息する可能性のあるタニシは、ヒメタニシとマルタニシと思われませんが、今回の調査ではマルタニシの報告はありませんでした。ヒメタニシは、乾いた田んぼや水路の土の中でも越冬することができますが、マルタニシは湿った田んぼでないと越冬出来ないようなので、乾田化が進んだ越谷では生息が難しいのかもしれませんが。
- 今後、気を付けて観察してほしい巻貝が、ジャンボタニシとも呼ばれる南米原産で特定外来生物のスクミリングガイです。近年、隣接市や千葉県、茨城県等の各地でも確認が相次ぎ、稲の苗を食害するなどの影響を及ぼしています。侵入すると急速に広がり駆除が困難です。

(古谷 愛子)

## 50 タヌキなど

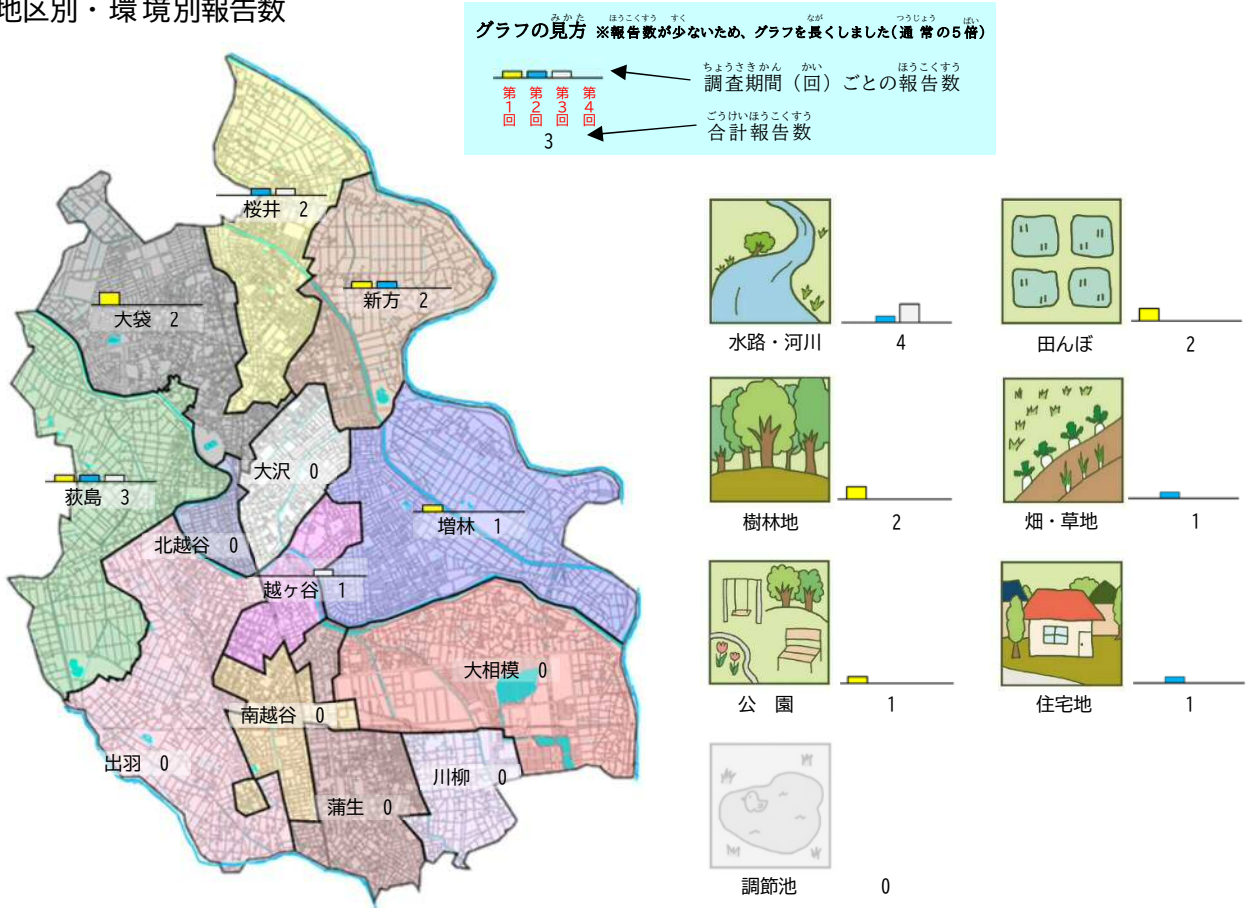
調査報告件数(調査期間 第1~4回全て)				
第1回 H29. 7~9月	第2回 H30. 10~12月	第3回 R2. 1~3月	第4回 R2. 4~6月	合計
5	3	3	0	11

タヌキはもともと日本にすんでいた動物で、市内の河川や住宅地などでも発見されています  
 アライグマは外国産ですが、ペットとして飼われていたものが野生化しています  
 また、ハクビシンも外来生物と考えられています

調査員からの報告写真 ※調査期間内の報告写真のうち、掲載できるものはありませんでした



### 地区別・環境別報告数



- ・タヌキとイタチ、アライグマ、マスカラットの報告がありました。アライグマは足跡による確認報告です。調査報告数はとても少ないのですが、タヌキやアライグマなど哺乳類の多くは夜行性のため、日中、目にする事ができないのは無理もないかと思います。
- ・ハクビシンやアライグマは外来種で、近年市内で増えています。いきもの調査の報告数よりも越谷市による捕獲数のほうがずっと多くあるようです。我が家のブドウや柿も、ハクビシンが食べに来るようになりましたし、田んぼや河川水辺では、アライグマの足跡があちこちで見られるようになりました。
- ・一方、在来のイタチやタヌキは出会う機会がめっきり減少し、寂しい限りです。

(古谷 愛子)

# コラム アライグマが急増しています！！

アライグマとは？

アライグマは、特定外来生物に指定されています。河川や水路付近にある神社・お寺・住宅の屋根裏・空き家等をねぐらにして、畑・家庭菜園・果樹やごみ置場等を餌場としています。そのため、家屋被害や農作物・果樹等の被害が多発しています。



環境省が作成した「アライグマの防除の手引き」では、年に1回の繁殖で平均3～4頭出産（4月～6月頃）します。また、都市部の生息密度は約5頭/km<sup>2</sup>と言われており、越谷市でも潜在的には約300頭が生息していると考えられます。

県内や市内で激増しています！

埼玉県では、平成20年の約1,800頭から令和2年では、約8,000頭と約4倍捕獲されています。

市内でもアライグマの捕獲数が急激に増加しており、令和2年度では77頭となっています(図1)。

また、捕獲位置(図2)も、平成26年度は主に市内西部でしたが、令和2年度では市内全域に拡大しています。

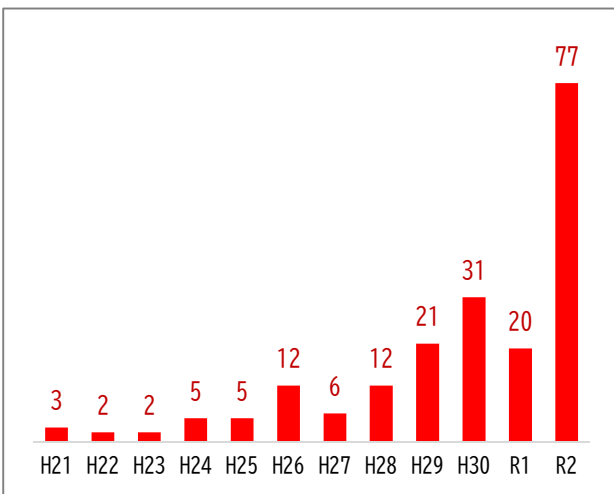


図1 市内のアライグマ捕獲数

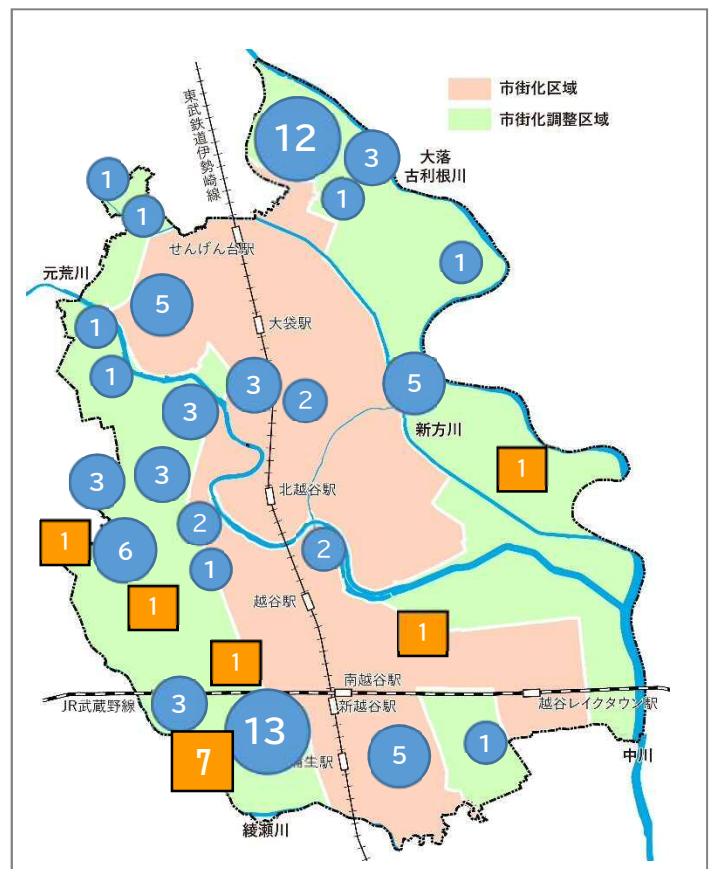


図2 平成26年度 (■) と令和2年度 (●) の捕獲位置と数 (記号内の数字)

これ以上増やさないために・・・

越谷市環境政策課では、被害にあった市民の方に箱ワナを貸出し、捕獲された個体の処分を行っています。

また以下のような対策をすることも、数を減らすために有効とされています。

- ・木になった果物等は全て取る
- ・売り物にならない、食べられない作物を屋外に放置しない
- ・ごみ置場では、ネットからごみのはみ出さないように包み込むようにして捨てる など被害を抑えるためにも「無自覚な餌付けストップ」にご協力をお願いします。



## 32 ミドリシジミ (シジミチョウのなかま)



ちょうさきかん だい かい (R2.4~6月)  
調査期間 第4回

きしょうしゆ かんきょう の へんか など によつて 数が 少なくなつて いる いきもの  
希少種 環境の変化などによって数が少なくなっている生きもの  
おほ 大き さ 3.7~3.8 cm  
とく 徴 せいぢゆう は がつ 6月 から がつ 8月 に 見られ ます  
特 徴 成虫は6月から8月に見られます  
さいたまけん けん ちやう さいてい  
埼玉県の「県の蝶」に指定されています

■埼玉県レッドリスト 準絶滅危惧1型 (NT2)

- ていち いなきく さか しがやし いね ほ た まわ ようちゆう えき  
・低地で稲作の盛んであった越谷市では、稲を干すために田の周りに幼虫の餌となるハンノキが植えられた  
ことから、以前はたくさん生息していたと思われる。今でも河川敷や屋敷林にハンノキが残っていれば、  
まだ生息していると思われる。
- し ほくぶ  
・市の北部にはまだハンノキが見られる。
- こんかい はっけん ざんねん  
・今回発見できなかったのは残念である。
- けん ちやう おす はね ひょうめん みどりいろ かがや めす たけい こつかつしよく かた せいしよくもん あらわ かた せきしよくもん  
・県の蝶であり、雄の翅の表面は緑色に輝く。雌は多型で黒褐色の型、青色紋を現す型、赤色紋を  
あらわ かた りやうほう あらわ かた ゆうがたさか かつどう おす せんゆうせい しめ た はげし ついひ  
現す型、その両方を現す型がある。夕方盛んに活動する。雄は占有性を示し、他を激しく追飛する。  
ようちゆう は いと つづ なか せいちゆう めだ はな きゆうみつ  
幼虫は葉を糸で綴り中にあるので目立つ。成虫はクリ、アカメガシワなどの花で吸蜜する。

(内山 裕司)

## 48 メダカ



ちょうさきかん だい かい (R2.4~6月)  
調査期間 第4回

きしょうしゆ かんきょう の へんか など によつて 数が 少なくなつて いる いきもの  
希少種 環境の変化などによって数が少なくなっている生きもの  
おほ 大き さ 2~4 cm  
とく 徴 にほんさん たんすいぎよるい なか いちばんちい さかな  
特 徴 日本産の淡水魚類の中で一番小さい魚です  
めす は おす より 少すこ おお 大き く、めす には せ びれの き こみ  
メスはオスより少し大きく、メスには背びれの切れ込み  
がないが、オスにはあります  
さいたまけん さいらい  
埼玉県の在来メダカは、ミナミメダカとされています

■埼玉県レッドリスト 準絶滅危惧2型 (NT2) ■環境省レッドリスト 絶滅危惧II類 (VU) ※いずれもミナミメダカ

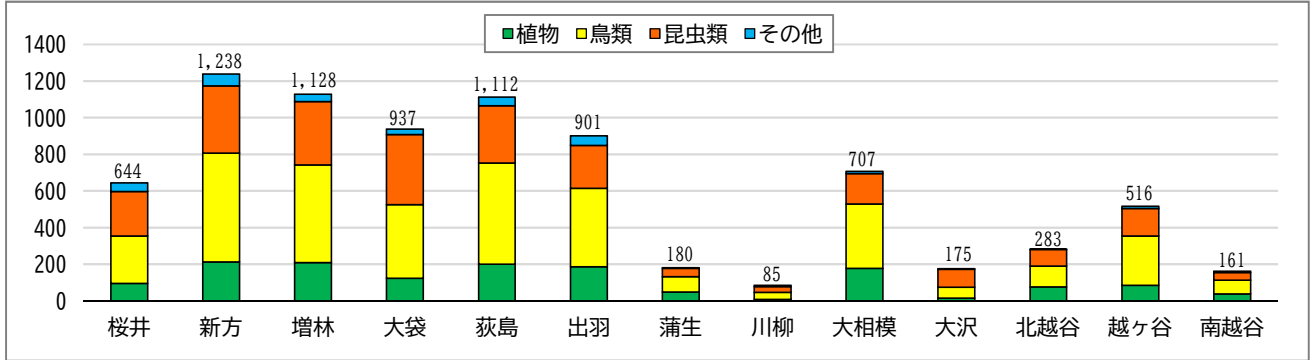
- だれ し みちか かな ほうこく ざんねん しがやし すぼ のうぎやう  
・誰もが知る身近であるはずの魚が、報告ゼロというのはとても残念です。かつて越谷には、素掘りの農業  
水路や、水路につながるたんぼに、たくさんのメダカが泳いでいました。こうした場所は子供でも気軽に  
すいろ 水路につながら たんぼに、た くさんのメダカが 泳いで いました。こう した 場所 は 子供 でも 気軽 に  
みずべ い せつ で き ぼしよ  
水辺の生きものに接することが出来た場所です。でも今は、素掘りの水路の多くがコンクリート三面張り  
となり、メダカが泳げるゆるやかな流れも、産卵するための水草も、冬越しのための水路のよどみもほと  
んどなくなってしまいました。
- しぜんゆた みずべかんきやう あんぜん みずべ い ふ あ ぼ そうしゆつ こころ  
・メダカがすめる自然豊かな水辺環境づくりと、安全に水辺の生きものと触れ合える場の創出を、心から  
ねが 願っています。

(古谷 愛子)

# ちくべつ かんきょうべつけっか 地区別・環境別結果から

この調査では、50種類の生きものを、見つけた地区別・環境別に報告して頂きました(2ページ参照)。地区別・環境別報告の集計結果から、各地区の環境や、生きものが暮らす環境について考えました。

## 地区別結果について

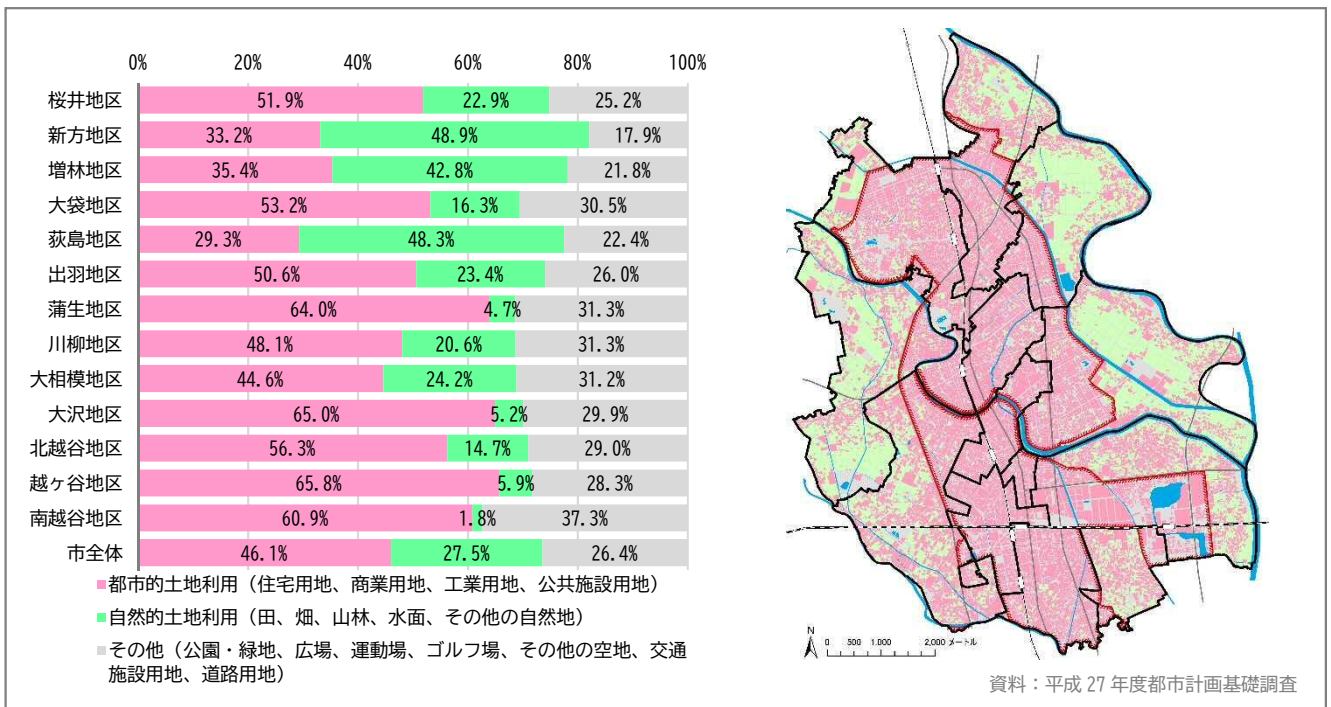


(図1) 地区別報告件数合計

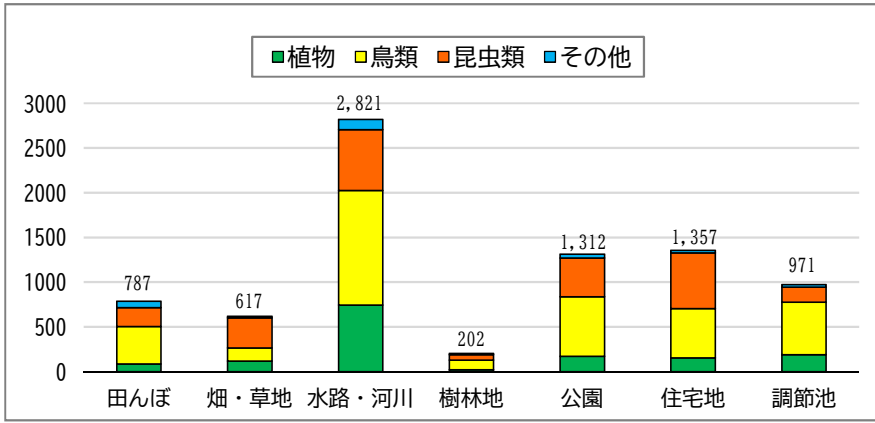
地区別土地利用割合(図2)を見ると、自然的土地利用(田、畑、山林、水面、その他の自然地)の割合が4割以上と多い、新方・増林・荻島の3地区が、報告件数合計(図1)の上位3地区となっています。また、次に自然的土地利用の多い、桜井、出羽、大相模の3地区の報告件数もそれに続いています。

この調査の報告件数は、「指標生物」について、「調査員が任意に調査した」ものなので、この結果が、地区の生きものの豊かさを直接示すものではありませんが、自然的土地利用の多い地区では、身近にみられる生きものが多いといえます。

また、大袋・越ヶ谷地区は、前に挙げた6地区よりは、自然的土地利用が低いにもかかわらず、報告件数は比較的多くなっています。これは、各地区に、宮内庁埼玉鴨場周辺(面積約17.8ha)と、越ヶ谷久伊豆神社周辺(面積約8.5ha)の、環境保全区域があることが影響していると考えられます。自然的土地利用が少ない地域でも、環境保全区域のようにまとまった緑地があることによって、生きものが暮らしやすい地域になっていると考えられます。



(図2) 地区別土地利用割合 出典：越ヶ谷市都市計画マスタープラン(令和3年3月)



(図3) 環境別報告件数合計

次に報告が多かった環境は、「住宅地」でした。今回の調査では「住宅地」に学校・公共施設・街路樹なども含めましたが、鳥類や昆虫類は「普通の住宅地」でも多く発見されており、人間が生活している環境のすぐ近くにも、多くの生きものが生育・生息していることがわかります。

「公園」も、報告が多かった環境の一つです。市内には、規模が大きく、緑豊かな公園が多く、特に越谷総合公園、県民健康福祉村、しらこぼと公園、出羽公園、越谷梅林公園などからの報告が目立ちました。

「調節池」では、市内に大吉、大相模の調節池や、東越谷、西大袋の調整池などがあります。図3のグラフから、主に鳥類の生息場所となっていることがわかります。

「田んぼ」、「畑・草地」の農地なども、生きものが暮らす場所として重要ですが、令和2年の市内の地目別面積割合では、田が15.0%、畑が6.4%と、農地が減少しつつあります。今回農地が、公園や住宅地より少ない報告件数であったことは、市内の農地の割合が少なくなった事も影響していると考えられます。

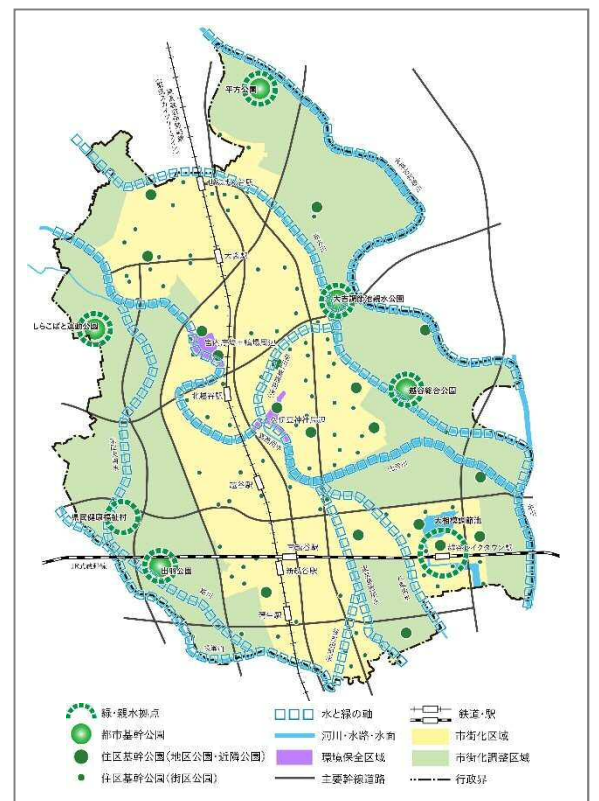
「樹林地」は、今回の7種類の環境のうち、最も少ない報告件数でした。屋敷林や雑木林、神社やお寺の林、工業団地の緑地帯なども、生きものには貴重な環境です。このような樹林地も、開発や、近隣からの要望、管理負担などの原因により年々減少しています。この報告件数は、市内に残された樹林地が少ないことと関係していると考えられます。

### 生きものも暮らしやすい環境を守るために

越谷市内で、水路・河川は、生きものの生育・生息の場であると同時に、市内全域に広がっていることから、生きものの移動経路（ネットワーク）にもなっています。また、環境保全区域や大規模公園、調節池などは生育・生息場所の核となります。さらに、農地や、点在する樹林地を守ったり、緑あふれる住宅地を形成したりすることで、生きもののネットワークが充実されます。

将来に向けて、豊かな生態系を保全・回復するためには、生きものの生育・生息場所を守りながらまちづくりを進めるとともに、水路・河川、調節池、住宅地、公園、農地、樹林地など、それぞれの環境や、地区の実情に応じて、生きものに配慮した管理や整備に努めていく必要があります。

(図4) 水と緑の方針図 出典：越谷市都市計画マスタープラン（令和3年3月）



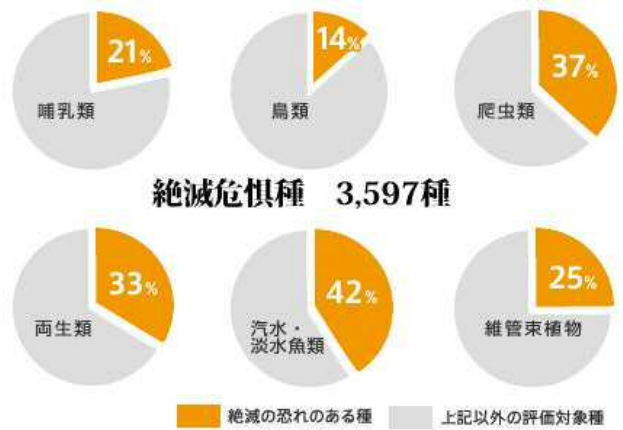
環境別では、「水路・河川」の報告件数が飛び抜けて多い結果となりました。指標生物の選び方が影響したかもしれませんが、水路・河川が、越谷の生きものの生育・生息に大きな役割を果たしていると考えられます。なお、水路・河川の報告は、古利根川、新方川、元荒川、中川、綾瀬川をはじめ、葛西用水、末田大用水、八条用水、東京葛西用水などから多く寄せられています。

生物多様性とは？

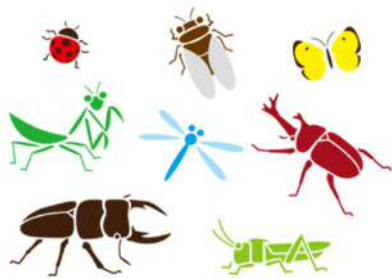
皆さんは、「生物多様性」という言葉を聞いたことがあるでしょうか？生物多様性とは、「生きものたちの豊かな個性とつながり」のことです。地球上には3,000万種ともいわれる多様な生きものが支えあって生きています。私たちの暮らしも、多様な生物が関わりあう生態系からの恵みによって支えられています。

日本では、野生動植物の約3割が絶滅の危機に瀕しています。その要因は、開発や乱獲、里地里山などの手入れ不足、外来種などの持ち込みによる生態系

かく乱、地球温暖化による環境の変化と言われています。もちろん越谷市も例外ではありません。



環境省ホームページ「生物多様性に迫る危機」より



「希少種」について

このような要因によって、数が少なくなってしまった生きものを希少種と呼び、今回の調査種であるキタミソウ、オオバン、コアジサシ、ミドリシジミ、トウキョウダルマガエル、メダカも希少種に当たります。しかし、いくつかの種は今回発見報告がなく、このままだと多くの生きものが、越谷市内からいなくなってしまう恐れがあります。

「野生絶滅種」コシガヤホシクサ

発見地にちなんで越谷の名がついた「コシガヤホシクサ」は、越谷市内では見られなくなりました。最後に生育が確認された茨城県下妻市でも、野生のものはいなくなり、コシガヤホシクサは、今、「野生絶滅」という状態にあります。

越谷市の葛西用水や下妻市の砂沼では、コシガヤホシクサを野生復帰させる取り組みを行っていますが、まだ、復帰できていません。一度いなくなった種を復活させるのは大変難しいのです。



コシガヤホシクサ



生物多様性を保全し、回復させるために

まず、理解することです。身近な緑や生きものが人間の生活とどのような関係性があるか、これらを保全することの意義や重要性について知ってください。生物多様性が豊かなことで、私たちの生活や経済活動、災害を軽減する効果、健康などさまざまな利益が生まれているのです。

つぎに、「自分ゴト」化することです。身のまわりにどんな生態や特徴をもった動植物が生息・生育しているかを知り、そして自分たちの生活の仕方や活動の大きさによっては、生きものたちの絶滅スピードを加速化させる可能性があることを実感してください。

そして、今日から行動へつなぐことです。SDGs（地球上のほぼすべての国が採択した、2030年までに達成すべき17の目標）でも、15番目に「陸の豊かさを守ろう」が掲げられています。未来のすべての生きものために、生物多様性の保全・回復を目指しましょう。



多くのご感想を頂戴しましたが、都合により全ては掲載できず、また一部を修正させていただいています。

- 平方に毎年ムナグロが飛来しますが、その数が減少している。ハウネンエビ、カプトエビの見られる（発生する）田んぼが減少。以上は調査種にありませんが。平方地区では、住宅の建設が多く田畑や高い樹木が減少、調査種の野鳥や昆虫が減少しています。
- シジミチョウをたくさんつかまえて、たのしかったです。
- 調査に参加させて頂き、ありがとうございました。仕事の都合や調査への知識がなく、ほとんど報告もできませんでした。一人では、なかなか続かず、調査期間中に検討会のようなものを開いてアドバイスして頂ければ良かったかもしれません。報告書の完成・発行を楽しみにしています。
- 前回と違って封書で送る、発見した物を知らせるというやり方でなくなった為、指標のものに限る、ネットで送るは難しかったです。
- 2017年7～9月に参加したと思います。越谷で多くの野鳥に出会えました。久伊豆神社でカワセミを見た時は感動しました。また下間久里でイソヒヨドリを数回見かけ、始めは「いるはずがない」と野鳥に詳しい主人に言われましたが三郷で見つけたと知り確信致しました。季節毎に出会える野鳥も在住の野鳥も多く、越谷の自然の豊かさに感謝致します。なお2021年4月に下間久里でウグイスの鳴声を1度だけですが聞きました。
- 調査は年二回続けたほうが良い。経費がかかるので年々減っているが？最小費用で調査続けられるよう検討してほしい。寄付募集とか一部有料とか難しいと想いますがアイデア募集して下さい。調査は続けて下さい。いきもの調査写真よく撮れますが頭の中に記憶できません。説明として特徴をイラストしてもらおうと良く憶えられるのでは。特に鳥などのオオヨシキリ、モズ、等。花などの類似なものの区別等。
- 身の周りのいきものに関心を持つようになり、今まで見たことのない鳥や植物を発見して調べるのが楽しくなりました。庭のサクラの木にコゲラが巣を作って雛が育って巣立ったのに感激しました。
- 私にとっても娘二人にとってもとても楽しい思い出となりました。お陰で調査の後もよく家族で生き物を探しに行くようになりました。
- この調査を通して子供との会話が多くなった。近くの公園にも様々な草や木、昆虫がいることを知った。
- ナガサキアゲハが増えてきていると思った。
- ヒグラシを探してあちこちの公園に行ったが見つけれなかった。
- 越谷は意外と自然が多くておどろいた。次回も（あったら）やりたい。
- いきものが好きで生活しながらクマゼミの声、近所のツバメの巣などの事をいつも考えていました。不足種を気にしながらこれからも生活していこうと思いました。とても楽しませて頂きありがとうございました。
- いつも身近な所に生きものがいることが分かってびっくりしました。
- 調査に参加したことで身近な自然により意識を向けるようになりました。小さな生き物にいつでも親しめる環境を次の世代に残していきたいです。
- 普段見過ごしてしまう動植物にも目が行くようになりました。心の余裕も感じる事が出来ました。また参加したいと思います。
- 今年で(2021)後期高齢者になりました。お手伝いがどこまで出来るか不明です。もう少し頑張りたいと思います。どうぞ宜しく御願います。
- 自然への関心が一層高まりました。
- いきもの調査に参加する以前は、周りの生き物を意識して見ることはありませんでしたが、意識して周りを見てみると、様々な生き物がいて驚きました。また市内を歩いてみると、都市と自然が共生している素晴らしい町だと感じました。

- 第1回クマゼミが北上していることを実感し驚きました。第2回元荒川にヒドリガモが沢山来ていること知りました。第3回ツグミが近所に来ていることに注意を払うようになりました。第4回近所の自然に興味を持つようになり、オオカマキリは意外に多くいることに気がきました。
- 色々な動物が見つけれられるかと予想していたけど、思ったより見つけれなかったけど、生き物が好きなので、すごくワクワクしました。あらためて命を大切にしていきたいと思いました！！参加させていただき、ありがとうございました。母です。息子が楽しく生き物調査にはりきっていました。身近で経験できて良かったです。ありがとうございました。雪で合同での調査ができなかったこと、残念でした。また調査があれば、参加したいです。
- 第1・2回は先輩方々と調査に同行しました。第3・4回は足の具合が悪く調査に参加出来ませんでした。当地(新越谷)は区画整理完了して、従来見られた動植物が激減しております。(ヒバリ、ツバメ、ツグミ、カワラヒワ、オナガ等)(セミ、トンボ類みなかった)(区画整理の代償か)。現在デイスサービスの車で出羽地区を通るがツバメ、シジュウカラが新川町、大間野で見かけた。
- 昔は見られたシラコバトがここ数年越谷市での発見が出来ないとの話は驚いた。大袋中学校周辺でカッコウの声が聞こえたりしたものだった。でもキジや狸がまだ見られたのは良かったと思う(第4回調査になり、初めて報告を出した)。
- 仕事をしながら調査しているので同じ所に何回も調査に行き、植物は動かないのですぐ調査終る。野鳥と昆虫は調査に行く度に新しい発見できて楽しいが調査地点が決ってしまう。次回の時は色々な場所に調査に行きたいと思います。
- いつも風を切って歩いている私がこの調査期間に運悪く足に怪我をしまいヨタヨタと歩いている始末でした。怪我の功名か普段目にしないものが視界に入ってきて記憶に残っています。余りにも無知なため携帯や参考に頂いた資料を見ながら足の回復と生き物来訪を天気の良い日だけ続けました。狭い行動範囲でこの企画のお役には立てていませんが、今、同じ季節に同じ動植物との巡り会いで季節の変化を感じています。
- いきもの調査をしていて感じた事は越谷には色々な鳥が見られたので良かったです。その後気付いたのは野鳥が最近増えてきていると思います。自宅の庭に「モミジ」の木が有るのですが、昨年「メジロ、シジュウカラ、ジョウビタキ」の3組が「香り」で一定の時間に来ています。木に餌台を付けて「ヒマワリ」の実を砕いて置いたら3日目にシジュウカラが食べて行く様に成りました。今は「ツバキ」も花が咲いているのでメジロが蜜を食べに来ます。ジョウビタキはまだ来鳥した日が浅いので餌台がまだ知らないで食わずに帰ります。12月は毎日の様に来ているので楽しみです。又、反対に「ツバメ」が今年は少なく感じました。
- いきものの生態や種類を知るきっかけになり、とても楽しかったです。機会があればまた参加したいです。ありがとうございました。
- コロナ禍によりほとんど集まったの調査会ができず残念でした。個人的なバードウォッチングで見かけた生物についてはいきものログを利用して報告しましたが、いきものログ自体がとても利用しにくく不便に感じたので継続できませんでした。他の調査員が活発に利用している様子もなかったようです。もっと使いやすいアプリの開発など工夫が必要かと思いました。身近な生物の生態調査は付近に移住している人なら誰でもできることであり地域の自然環境への理解・関心を高めることに繋がるので是非広まってほしい活動です。
- 第3回より参加することになりました。始める前の説明会(研修会?)で種々の動植物について教えて頂きましたが、先生方の動植物への愛情が伝わって大変嬉しかったのを覚えています。最近子供だけでなくそのお父さんお母さんも露骨に虫を嫌がる方が多く、植物や鳥の知識も驚く程無かったりするのを身近に感じていた中で、これらを大事にしたいという方々がこんなに集まっていること自体少し感動していました。第3回の途中からコロナのことが始まり、外へ出での調査を時間かけることが難しくなり、日常で見かけたことの報告しかできなかったのが残念でした。いつかまた機会があれば参加したいし、これからも学んだ事を活かして周りの生きものに目を向けたいと思っています。

- 今回のいきもの調査あまり活動しませんでした。ふじばかまは在来種だけは畑に保存しております。
- いきもの調査に参加して歩いて散歩する事が好きになりました。初めて見る生き物を見つけて名前調べたりしました。クマゼミの鳴き声を聞いた時、昔はいなかった生き物が移動している事を知りました。
- 第2回調査に参加したが、他の季節の調査も気になった。次回都合がつけば全てに参加したいと思う。
- 大変お世話になりました。体調不安があります。ありがとうございました。
- 温暖化に伴う動植物の変化に市民が関心を持ち気付く事が出来るこの企画は素晴らしく継続して行って欲しいと思います。機会があればまた参加させて頂きたいと思います。
- 毎回資料を頂きお手数をおかけして申し訳ございません。私は昨年より体調を崩し調査が難しい状況です。美しい越谷市を目指し貴重な生物がいきいきとすごせる様心からお祈りします。ありがとうございました。
- 全ての回に参加しました。注意深く観察することにより、普段なら気付かない珍しい生き物を発見できる事もあり、とても有意義な経験をさせて頂きました。次回もぜひ参加したいと思います。
- 今回の活動でぼくは春を中心に調べました。その時はバンやチョウが多くいました。植物も、少し道ばたのをよく見るようになりました。
- 鳥類に興味があったことから、居所を中心に河川や池沼を主体に調査を進めました。冬の時期は、渡り鳥が多く飛来するので珍しい鳥に出会えることに胸躍らせての調査となりました。鴨類がよく飛来する場所では、従来あまり気にせず同種と思っていた群れの中に、双眼鏡で覗くと意外にも複数の種が共存していることに驚きました。また、町では、スジグロチョウの姿がめっきり見られなくなりました。過去に地元で見ることのなかったツマグロヒョウモンや蒐集家により持ち込まれたと思われる外来種のアカボシゴマダラが食草を同じくするゴマダラチョウを凌ぐ勢いで増殖し、生態系に変化が生じていることを実感しました。生まれ育った越谷は、自治体や地域住民の協力により、恵まれた自然環境が維持され、多くの「いきもの」が生息しています。ただ、心無い釣り人がルアーをあちこちに絡めたり、テグスを放置するなどのマナーに反する行いやカメラマンの深追い行為が生き物達を脅威に晒す結果となっており、残念でなりません。僅かな期間ではありましたが、調査員としての機会を与えて頂き、今まで以上に自然と触れ合えたこと、そして多くの「いきもの」に巡り会えたことは、画像に残した以上に深く心に刻まれ、有意義で価値ある体験であったと感じています。最後に、各分野の専門家と参加された調査員との意見交換会があれば、より多くの情報等を吸収できる良き機会にもなったと思います。
- 自分の住んでいる近場にも多くの「いきもの」が生活しているのには驚きの発見。
- 1年のみの参加となってしまって残念でした。
- 散歩の途中で気がついた事のみ、でしたので、件数も少なくて申し訳なく感じていました。しかし、あちこち見ながらの散歩楽しかったです。スマレがあちこちで増えているなあ、と感じました。
- 全4回調査のうち後半は調査エネルギーが続きませんでした。もしタイムリーに結果報告(速報でも可)に接する事ができていたら、調査ポイントを詰めて行う事ができたかも知れません。
- 第1~4回まで全て参加。今回の調査で気になったのはツマグロヒョウモンが少なくなったこと。食草のスマレがあっても幼虫がないなど、街中にもひらひら飛んでいた頃と比べ、明らかに減少傾向。スジグロシロチョウに至っては数年出会っていない。環境が変わって来ていると思われる。アゲハチョウの幼虫が毎年沢山ついていた公園のカラタチの木が根元から切られたり、ジャコウアゲハの食草のウマノスズクサが除草剤により枯れていた。荒れ地の減少、農道の工事、土手や公園の過剰な美化などいきものにとって環境は厳しさを増している。そんな中でも新しい発見があった。トンボではナゴヤサナエ、セスジイトトンボ、ハラビロトンボ、シオヤトンボが見られた。鳥ではトビ、エゾビタキ、コサメビタキが見られた。コンピュータ集計の制限から対象種の数30種としていると聞く。そのためかナガサキアゲハの調査時期が10~12月と発生の最盛期とズレている。検討が必要と思うが。発見場所として地区、住所を記載するが、今までのデータとの整合性を保つためにもメッシュは必要と思う。

- いきもの調査(以前の回も含め)に参加するのを切っ掛けに、自宅近傍のいきものだけでなく、越谷市内にいるいきものを調査するようになり、ある程度、越谷のいきもの現状を知る良い機会となりました。今回、環境省のシステムが導入されたので、効果を期待しましたが、システムを使用して報告する方が少なかったのには、落胆しました。私は以前からこのシステムを使用していましたので抵抗が無く、ほぼ正確な位置にプロットしていました。現在は写真のExifに位置を記録させておけば、自動で環境省の地図にプロットされますので、その辺の説明をすれば利用が増えるかもしれません。システムが有効に活用されれば、正確性、即時性、添付写真による確認などの利点があったのですが、残念です。また、対象種以外の希少種などの入力ができないのがデメリットとして挙げられます。
- 第1・2回調査の2回、息子と一緒に参加しました。特に第2回の前につぶし緑の丘公園で実施した観察会勉強会が印象に残っています。専門の先生から昆虫や植物について直接教わることができよかったです。また第2回の調査では12月にもたくさんの昆虫がいることを身をもって実感しました。子供の頃は虫取りをよくやっていたのですが、一方で冬に虫探しをやったことがなかったんです。要望としては、今回の活動は市から調査を委託されて調査を報告するというのが基本ではあります。ただ、その活動を通して皆さん楽しみなのは同じ意識を持つ越谷市民との繋がりを見つけることです。調査員同士の繋がりを醸成するような仕組みは乏しいと感じました。例えば、私が参加したTOKYO2020オリンピックボランティア(ドライバーグループ)では、有志がFacebookでグループを立ち上げていました(投稿にはルールを設けグループ管理人が運用)。そこでは①知識の共有化:ボランティア活動ルールの啓蒙・競技場へのルートなどの情報交換などがされ、新しく入った人への実質的な研修となっていました。非常に助かった面も多かったです。②仲間意識の醸成:自分の得た知識や経験をシェアするという、ボランティアのボランティアという助け合いの精神のもと、仲間意識が芽生えます。③将来への発展:お互いを刺激し合い、そこを通じて得たつながりで今後も別のボランティアに参加するという活動に繋がっています。今回のいきもの調査で考えた場合、まず知識の共有化という点においては調査員に応募するくらいなので、いきものの知識をつけたいと思っている人が多数であり、諸先輩方は知識を披露する場所となり、私は勉強させてもらえる機会が得られ、win-winとなりえます。仲間意識の醸成という点においては他のメンバーが調査を行っている投稿を見て刺激を受けたり、有志観察会の呼びかけも可能です。また将来への発展という点においても、自然と生活が調和するまちづくりを進めていく上で、未来の越谷を作っていく市民意識が芽生えるきっかけになるかもしれません。ただ、これらは役所主体で行うにはどのプラットフォームでやるのか、情報格差への配慮、個人情報保護、あえてどこに生息しているか公表してない希少種などある程度ハードルがあると推測しています。もし何か良いアイデアがあれば、いきもの調査以外でも次回の別のボランティア活動などで共有頂けると有難いです。
- 身近な動植物について知るきっかけとなって良かったです。一歩進んで河川敷のアレチウリの除去や、在来生物の生息地の確保など、小さいことでも何かできたらと思うのですが・・・。
- 説明会に参加できず、スマホの操作でつまずきおまけに母の介護が必要となり、毎日東京通いそしてコロナ・・・自由な時間が、気持ちに余裕がなくなり、個人的に(スマホが最後まで操作わからず)それでも少しの時間にあちこち覗いてみては「これはハンノキ、これはモズ！」等、頂いた資料片手に楽しかったです。協力するというより自分の住んでいる所にどんな生き物、植物がいるのか知りたい！の一心で参加させて頂いたのですが・・・スマホがサッと操作できればサッと送信できたのに・・・越谷にもこんな植物、生き物があるんだと知り、見、嬉しくなりました！(モズのはやにえ実物は本当におどろきました！)
- 調査期間以外でも、様々な生物に対しての見方が変わってきました。これからも楽しく観察して行きたいと思います。
- 自分の意志で調査に参加したのですが、雑用に追われる毎日で何のお手伝いもできませんでした。逆川のそばに住んでいて魚や鳥、あるいは川沿いに生息する植物などに興味はあるのですが、自分では何もできず他の調査員の方々などのご活躍に期待を寄せる結果になってしまいました。調査の成功をお祈りいたします。

- 数年前には観察できた鳥や昆虫がいなくなり、代って本来は南方など別の地帯に生息していたいきものが見られるようになった。その変化の速さに驚きを感じた。見かけるいきものの種類は多く、名前が分からないまま放置しているものが結構ある。時には埼玉県自然学習センター(北本市)に問い合わせたりもしているが、越谷市内に気楽に聞ける場所(機関or団体)があると助かります。
- 身近ないきものを注意して観察するきっかけになり、良かったと思っています。最後の方はコロナで外出することが躊躇われたので、少し残念に思っています。地球温暖化がいきものに及ぼす影響など、今後も調査して地球の将来に役立てることができればと思っています。
- 単純に越谷のいきもの自然に興味があり参加しました。もっと講習会とか勉強会があるのかな・・・と思いましたが、一度きりでした。何か中途半端な感じで終わりました。
- 参加部員が引退してしまっているためお答えできません。コロナ禍もあり、あまり協力できませんでした。いつも以上に身の周りの生物に目を向けることが増えたようです。ありがとうございました。
- 生まれ育った街に戻った直後の参加でした(30年振り)。あまりの街の変貌振りに驚く事が多かったです。小・中・高校生の頃は「水と緑と太陽のまち越谷」というフレーズが響き渡っていましたが、そのうちの緑(田園風景)が減少している事にショックを受けました。「シラコバト」絶滅寸前の状況が大ショックです。
- 「越谷のいきもの」に深い興味を持つようになったキッカケは・・・我が家の庭のモミジの枝にトカゲの「はやにえ」が見事に突き刺さっていた事です。それからモズを探すようになり(ギチギチという独特の鳴き声。尾っぽをゆっくりと振りながら、縄張りのパトロール)メジロ、サギ、タカ類と見分けられる鳥類が増えていきました。都市と思っていた越谷市がまだまだ緑豊かな街だと。再認識出来ました。この自然豊かな「越谷市」を守らなければ！！いつもそう考えています。
- いつもはじっくり見ないような川や森の中に生き物や植物がたくさんあるんだなと思いました。いきもの調査に参加したことで、今まで行ったことのない場所に初めて行けたり知らなかった場所があることに気がついたりして楽しかったです。
- 家の周囲は空地もなくなり、虫や鳥などの姿を余り見ることがなくなりました。住宅地なので仕方ないですが・・・従って調査の数も少なくなりました。
- いきものを調べるのはとても楽しい時間でした。コロナが収まったらみんなが参加できる観察会をまたやってほしいです。クビアカツヤカミキリやムネアカハラビロカマキリ、またナラ枯れなど困った問題が身近にあることをみんなが関心を持てるようにしてほしい。足元の自然を注意深く見るが増えたので今まで気づかなかった場所にもいろんな植物やムシがいることを発見できました。
- 普段生活している地域に自分が想像しているよりも数多くの生物が生息しているという事を実際に感じる事ができました。
- シラサギやカモ、蝶等を中心に調査しました。第1回と第4回ではシラサギの数も蝶の数も数年の違いで思った以上に変化しているのに驚きました。身近な環境を守る意味でもいきもの調査は大切な調査だと思います。またいきもの調査をする機会がありましたら参加したいです。
- 平成30年度に参加させて頂きまして今まであまり気に留めていなかった鳥や草花にも関心を持つようになりました。生きもの環境は守りながら人々の生活が成り立つといいと思いました。有り難うございました。
- その種がなぜ調べるいきもの選ばれたのかわからないものがある。調べる目的が曖昧なのは？各分類における種の数から言って鳥類は調べるいきもの数が他の分類に比べて多いと感じる。
- いきもの調査では色々お世話になりました。この年齢になって仕事をもっていましたのであまり良い資料を提出できませんで申し訳なく思っております。ただ観察意欲だけはありましたので生きもの写真だけは色々撮り貯めてありますので該当する“モズ”の写真をメールでご案内のように送らせて頂きました。ハヤニエは昨年は見られませんでした。今までは二年続けて同じ木に見られました(10月下旬～12月)。モズは10月下旬～12月にかけて庭から見える隣のマンションのアンテナに良く見られます。以上報告致します。

- いきもの調査に参加して調査をしながらこれまで気づけなかった植物やいきものを見ることができました。
- 調査に参加して今までよりじっくり虫や植物を観察するようになりました。これからも続けていきます。
- いきものログに登録したが、うまく活用できなかった。あまり報告できなかったが、ガイドブックを参考に生きものを見つけるのは楽しかった。メダカについては葛西用水でそれらしき小魚を見かけたが、網など持っていないので捕獲して同定することができなかった。情報があればご教示願いたい。
- コロナの影響によって、全ての引き継ぎはできておらず、いきもの調査への参加の有無が把握できていません。今後同じような機会がありましたら参加させていただきます。私達は数年に亘ってアライグマやクビアカツヤカミキリの調査をしていますので、それらのデータがご希望でしたら提供させていただきます。
- 2017-2020年の間、市の「いきもの調査」に参加して以来、自然の変化を以前より強く感じるようになった。移住している越ヶ谷地区で小さな畑とその脇の200坪位の土地に竹や樹木があった時には、春にはウグイスが鳴いたり四季折々の野鳥が飛来していた。スズメ、モズ、シジュウカラ、メジロ、ジョウビタキ、ヒヨドリ、オナガ等。また、アオダイショウ、シマヘビ等も来た。昆虫ではオオカマキリやハラビロカマキリとそれらの卵囊も見ることが出来た。何種類かのチョウの仲間やトンボ、セミも見ることが出来た。時にはアマガエルの鳴き声も耳にした。こうした越ヶ谷地区の竹や樹木のあった土地は2020年秋に整地されマンションが建設された。その後、来る野鳥やその他の生きものの種類や数が大幅に減少した。こうした身近な事例でもわかるように僅かな樹木や竹林を失うことが生きものにとって大きな打撃になることを改めて感じた。
- あまりいきものに興味が無かったのですが、このいきもの調査に参加させて頂き越谷市内に生息しているいきものかどこに分布しているか、現在どのくらいの個体数なのか等いきものに関して調査する事が非常に楽しく、いきものに興味が湧くととてもいい機会になりました。
- 日々の生活で歩いていたりしても草花や生きものが気になるようになりました。子供が参加を希望したので一緒に参加させて頂いたのですが、良い経験が出来ました。
- 第3回調査（令和2年1月18日）とても楽しく新鮮な気持ちで参加することができました。午後からは粉雪が舞い降りるととても寒い日となりました。越谷市のいきもの調査ガイドブック、いきもの発見図鑑（越谷市自然探訪Ⅲ）・鳴く虫ハンドブック等とても参考になりました。以前から名を知られている「タンポポ」等は別として希少種の「キタミソウ」の様に寒冷地の北海道北見地方に生息している植物が越谷市の（用水が引いた川の）湿地に見られ、また葛西用水で大切に育てられていることを知りました。なぜ越谷に「キタミソウ」が生息しているのだろうか？鳥が種を運んできたのか？それとも岸辺の気候が北見地方に似ているのかな、説明を聞き逃したかわからずじまいでした。とにかく越谷市の緑豊かな地に生きものが沢山住みつき、育ち環境を潤しています。環境政策課から様々な資料の冊子が発行されいきもの調査員の市民も加わり今後この環境を次世代へ引き継げる様な心がけが大切だと思いました。お陰様で外出・散歩の時はいきもの調査ガイドブックを手にさらに興味を持つ様になりました。
- 親子で自然に触れあう機会ができ、良い思い出になりました。またの機会がありましたら参加してみたいです。この度はありがとうございました。
- 第1～4回を通じて、鳥類の減少を強く感じています。全体として、全ての生き物が少なくなっていると思います。更に外来種（ミシシippアカミガメや野草）の繁殖が目につきます。調査終了後も、同様のコースを散歩していますが、ますます減っている様に思います。生活環境が変化し、自然がどんどん減少していく中で止むを得ないのかと感じます。現在、カラス・ハト・ムクドリが蔓延っています。
- 趣味のバードウォッチングや自然観察が微力ではあるがお役に立てたのであれば嬉しい。次回も機会があれば参加したいと思う。
- 最初に福祉村で集まって調査する時に、登録していない下の子も連れて行ったので、途中で飽きてしまいました。長女は楽しく参加できました。最後に、採れた虫の説明などありましたが、子どもは飽きてしまった後だったので、途中で子どもが楽しめる仕掛けがもう少しあると良かったかと思います。

## 【参考文献】

- ・原色日本樹木図鑑（保育社）
- ・日本の樹木 上（小学館）
- ・日本の野草 秋（学習研究社）
- ・日本の野草 春（学習研究社）
- ・野鳥観察図鑑（成美堂出版）
- ・フィールドガイド日本の野鳥（日本野鳥の会）
- ・埼玉いきもの図鑑（メイツ出版）
- ・昆虫の図鑑（小学館）
- ・決定版日本の両生爬虫類（平凡社）
- ・日本の淡水魚改訂版（山と溪谷社）
- ・ため池と水田の生き物図鑑動物編（トンボ出版）
- ・越谷自然探訪皿いきもの発見図鑑（越谷市）
- ・平成24年度第4次ふるさといきもの調査報告書（越谷市）
- ・越谷市いきもの調査 2017-2020 ガイドブック（越谷市）
- ・越谷市環境管理計画（2021～2030年度）（越谷市）
- ・越谷市都市計画マスタープラン（令和3年3月発行）（越谷市）

## 【執筆・編さん協力】

- ・越谷市いきもの調査 2017-2020 市民調査員
- ・越谷市いきもの調査 2017-2020 専門委員
  - NPO法人オリザネット 齊藤 光明
  - NPO法人オリザネット 古谷 愛子
  - 日本野鳥の会埼玉 山部 直喜
  - 日本甲虫学会 内山 裕司
  - 日本生態学会 飯島 眞

## 【写真提供】

- ・飯嶋 隆、飯島 眞、石井 秀夫、石垣 隆夫、井原 菜緒、岩田 孝、延与 亜山、加藤 満、川戸 満夫、北川 五十雄、小林 伸広、小林 憲子、住田 博美、長谷川 實、古谷愛子（オリザネット）、増田 逸雄、松嶋 順子、山部 直喜、ほか4名（敬称略 五十音順）

本報告書を作成するにあたり、調査員の方から多くの写真やコメントをいただいたにもかかわらず、紙面の都合等で掲載できなかったことをお詫び申し上げますとともに、写真提供や編集等にご協力いただいた多くの皆様に厚く御礼申し上げます。

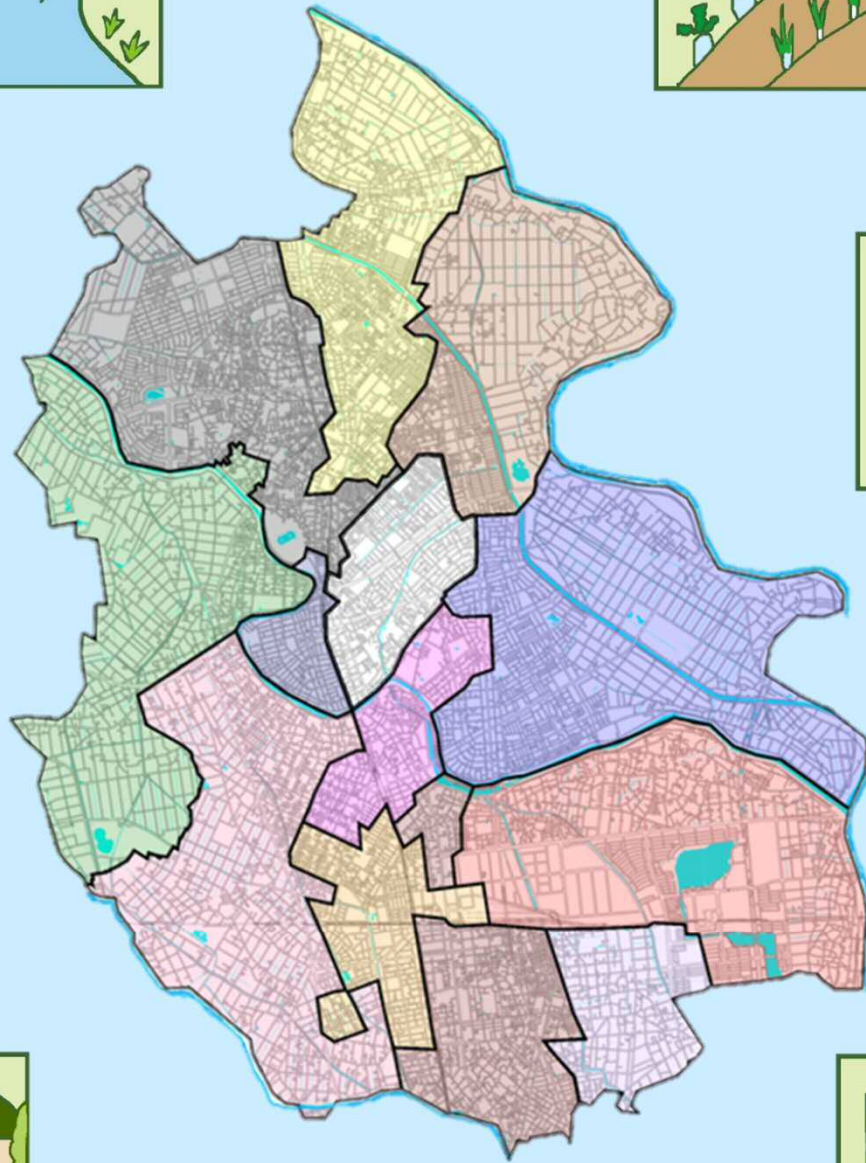
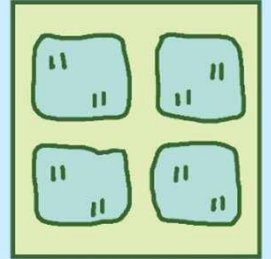
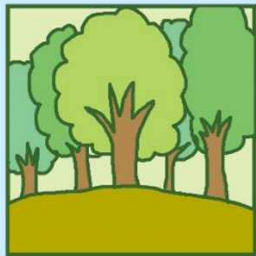
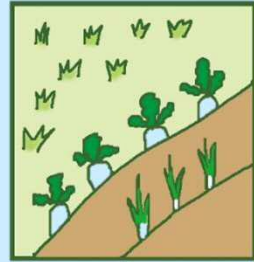
越谷市いきもの調査 2017-2020 報告書

令和4年3月発行

越谷市環境経済部環境政策課

〒343-8501 埼玉県越谷市越ヶ谷四丁目2番1号

(電話)048-963-9183 (メール)kankyo@city.koshigaya.lg.jp



「越谷市いきもの調査」は、SDGs※の  
 目標4・15・17の達成を目指す取組です  
 ※SDGs：2030年に向けて世界が合意した  
 17の「持続可能な開発目標」